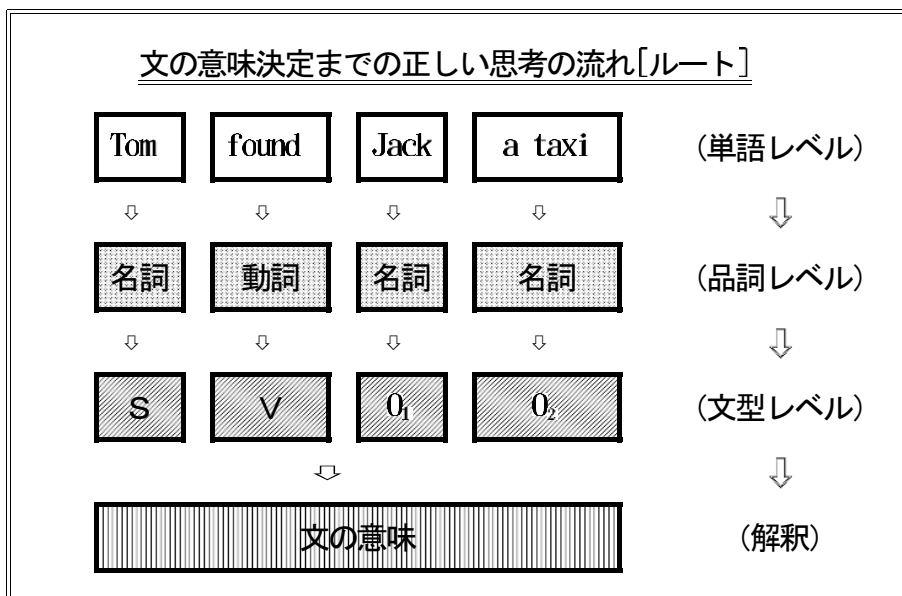


Hyper Lesson Book Review 2022

～パーフェクトルール90～

ここに載せた Rule は、「英文読解スマートリーディング LESSON BOOK」(L・B)の中の様々なルールを項目別に再編集したものです。Rule のより詳しい内容・説明については、同書の該当ページを参照して下さい。

1. 文型判断と読解の基本



Rule-1

各品詞の文中での役割[働き]

(L・B 23ページ)

1. 「名詞」。☞(S・O・Cといった文の骨組みを作る品詞であり)あらゆる品詞の中で最も重要な品詞!

(1) 「主語(S)」「目的語(O)」「補語(C)」のどれかになる。

(ex) The information is important. その情報は大切だ

S

I don't believe the information. ボクはその情報を信じない

O

What I want is the information. 私が欲しいのはその情報だ

C

(2) 「前置詞」「準動詞(不定詞・分詞・動名詞)」の目的語等になる。

(ex) I depend on my parents. ボクは両親に頼っている

※my parentsは前置詞のonの目的語になっている。

I hope to visit your house. 君の家を訪ねてみたいです

※your houseは不定詞(to visit)の目的語になっている。

會ただし「時」「方法」「方向」「場所」「距離」「程度・頻度」などを表す名詞については、文中での働きは「副詞」と同じであることが多い。

(ex) He came here **three times**. 彼は**三度**ここに来た

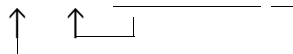
※three timesという名詞は、動詞のcameにかかる副詞としての働きをしている。このようなものは、言ってみれば「ニセ名詞」!

2. 「前置詞+名詞」。

☞(基本的に)S・O・Cにはならない! 「名詞」とは対照的!

(1) (直)前の名詞を修飾する。☞(特に前に名詞がある場合は「前置詞+名詞」は)80%(はこちらの用法)。

(ex) the influence **of the East on the West** 西洋に対する東洋の**影響**



※of the Eastもon the Westも共にthe influenceを修飾している。このように、場合によっては「前置詞+名詞」が、直前よりもっと前の名詞を修飾することもある。

なお前置詞の後には基本的に「名詞の仲間(名詞、代名詞、動名詞等)」がくる。「S+V」や動詞等は絶対でない。to不定詞もこない。

(2) 名詞以外を修飾する。☞多くは「動詞」(もしくはその仲間)を修飾する。

(ex) I went **to school**. 私は**学校**に行った



※to schoolは、動詞のwentを修飾している。

會「前置詞+名詞」は文の主要素(S・O・C)になることはない。それから、文中に「前置詞+名詞」を発見したら、まずは(直)前にかかれる名詞がないかどうか探してみる。あればその名詞にかけて試してみても意味が通じるか確かめてみる。ダメならそれ以外の語句(動詞など)にかけてみる。

3. 「形容詞」。

☞形容詞の働きは(基本的に)以下の2つだけ!

會形容詞は、日本語では「い」「な」で終わる語(例:「美しい」「綺麗な」...)。英語では、語尾が **-ful, -less, -ive, -able, -ible, -ary, -ous, -ic, -ical, -ial, -ual, -ate[ite], ient, iant** 等で終わるものが多い(全てではない)。

(1) 直前直後の名詞を修飾する。

(ex) a **kind** girl 親切な少女



a girl **kind** to other people 他の人に親切な少女



※形容詞は基本的に、一語で名詞を修飾する場合には名詞の前に置かれ、他の語を伴って全体で名詞を修飾する場合には、その名詞の後ろに置かれる。

(2) 「SVC」や「SVOC」の「C」になる。

(ex) She **is kind**. 彼女は親切だ

S V C

會形容詞が、文中で直前直後にかかれる名詞がなければ、もうその形容詞は「C」になっているとみていい。そして形容詞が文の主要素になるのは「C」になる場合だけ。それから、形容詞の80%は主観的評価(具体的には「良い(=good型)」「悪い(=bad型)」、又は「程度」を表している。

4. 「副詞」。

☞(基本的に)S・O・Cにはならない!

會副詞は、日本語では「に」「く」で終わる語(例:「綺麗に」「美しく」...)。英語では、語尾が **-ly** で終わるものが多い(これも全てではない)。

名詞以外(「形容詞」「副詞」「動詞」「文全体」のいずれか)を修飾する。

會中でも動詞を修飾することが最も多い。これは副詞(adverb)の語源からも理解できる。adverbとは「～の方に・ハ(ad)+動詞(verb) → 動詞へと向かってそれにかかる語」という意味なのだ。

5. 「動詞」。

☞動詞には「他動詞」と「自動詞」の2種類がある!

(1) 後ろに目的語になれそうな名詞があれば(その動詞は)他動詞。

(2) 目的語が見あたらなければ(その動詞は)自動詞。

(ex) Who will be elected captain of the team is a matter of deep concern to the players.

⑤ 誰がチームのキャプテンになるかは、⑥ 選手達にとって深い関心のある問題だ
このルールを使えば、上の英文の文頭の Who 節は、(Who から数えて 2 個目の動詞である) is の手前で終わっていることが一瞬で分かる。そしてその is が ⑥ (文の骨組みになる動詞) になっていると分かる。

例外① 動詞が等位接続詞によって結ばれている [並列関係にある] 場合、それら (の動詞) はワンセットで 1 つの V とみなす。

(ex) The man who is kind to his friends and loves his family is considered reliable.

⑤ 友人に親切で家族を愛する人は信頼できると見なされる

⑥ ⑤ 上例で who 節の終わりを見極める際、who 節内の is と loves は、and によって並列関係にあり、ワンセットで 1 つの V と見なす。とすると who から数えて 2 個目の動詞は is considered になる。そしてこの is considered が ⑥ (文の骨組みとなる動詞) と分かる。

例外② その節内に更に別の節が存在する場合、その (別の) 節内の動詞を、(動詞を) 数える際の数に入れてはならない。

(ex) The man who said that you were a liar is Kim. 君を嘘つきと言ったのはキムだ

⑤ ⑥ 上例でも who 節の終わりを見極める際、節内の (別の) 節である that 節中の動詞 (were) は、動詞を数える際の数に入れてはならない。そうすると who から数えて 2 個目の動詞は is になる。そしてこの is が ⑥ (文の骨組みとなる動詞) と分かる。

Rule-5

文の骨組み [主要素] を決定する際、いったん () でくくってしまうと
いいもの (つまり文の骨組みにはならないもの) (L・B 35 ページ)

1. 前置詞 + 名詞。

(ex) In those days people lived there.

⇒ (In those days) people lived there. その当時、人々はそこに住んでいた
S

2. 副詞 (-ly)。

(ex) My father died peacefully.

⇒ My father died (peacefully). 父は安らかに亡くなった
S V

ただし、いくら副詞といっても

- ① 否定の副詞……hardly「ほとんど～ない」、scarcely「ほとんど～ない」、rarely「めったに～ない」、seldom「めったに～ない」、no longer「もはや～ない」等。
- ② 論理接続の副詞…however「しかしながら」、therefore「それ故」、accordingly「それゆえ」等。

(は) いったんカッコでくくるのはいいとしても) 意味まで読みとぼしてしまてはいけなない。

①を無視すれば、文(節)の内容が変わってしまう。②を無視すれば、文と文(節と節)の結びつきが見えなくなってしまうからだ。特に論理接続の副詞(「論理マーカー」とも言う)についての知識を身に付けることは、読解力向上のための大きなカギとなる。これについては「学びエイド」サイト内の「基礎からわかる英文読解入門講座」の LESSON 14 を聴講してみることをお勧めする。

3. 関係詞節。☞ 例外は what 節 と how 節。Rule-6 を参照せよ。

(ex) The man who was standing over there is her husband.

⇒ The man (who was standing over there) is her husband.

S V
向こうに立っていた男性は、彼女の旦那さんです

4.カンマ(,)やダッシュ(-)で囲まれた箇所。ただしこのルールは「挿入のカンマ」でのみ適用可能。Rule-62を参照せよ。

(ex) You should, if you want some advice, go to his office alone.

⇒ You should, (if you want some advice), go to his office alone.

もし何らかの忠告が欲しければ、彼の事務所に1人で行くべきだ

5.主節よりも左側にあるもの

(従位)接続詞・関係詞・疑問詞が先頭についていない「S+V」(つまりS+V)のことを主節という。主節よりも左側にあるものは、(倒置構文を除き)基本的に副詞の働きしかしない。つまり文の主要素にはならないのだ(副詞句・節のうまい訳し方についてはRule-70を参照せよ)。

(ex) When she was young, she was happy.

⇒ (When she was young), she was happy. 彼女は若い頃幸せだった

◎そして上記の語(句・節)は、文中で以下のいずれかの働きをする。

①(前の)「名詞」を修飾する

②「動詞(の中間)」などを(時・理由・条件・譲歩・目的などの意味で)修飾する

Rule-6

what と how が導く節や句の役割(働き) (L・B 33ページ)

what や how が導く節(句)は、基本的に「S(主語)」「O(目的語)」「C(補語)」のどれかになる。また前置詞の後ろでその「目的語」になる。

(ex) What he said is not true. 彼の言ったことは本当ではない

How he did it made her angry. 彼のやり方が彼女を怒らせた

Ask him how the word is pronounced.

V O₁ O₂
その語がどう発音されるのか彼に尋ねなさい

The result was different from what they had expected.

【前置詞の目的語】
その結果は、彼らの予想したこととは異なっていた

例外は「what we call:いわゆる」「what is more:おまけに」などの決まり文句的なもの(詳細は84ページ(注7)を参照せよ)。

(ex) He is what we call a man of culture. 彼(いわゆる)教養人だ

上の英文でも what we call は、文の骨組みにはなっていない。

◎成り立ち的には what we[you・they] call C(形・名)は「Cと呼んでいるもの」という名詞節から来ている。

Rule-7

英文読解の基本手順

(L・B80ページ)

- 1.まず英文を見たら、単語の品詞を確認、また語句のまとまりである句や節の範囲を決める。
- 2.次にそれらの語、句、節の中で、文の主要素になりうる以下の2つを浮かびあがらせる。
 - (1)名詞とその仲間 (SOCになる) ☞文の主要素になれるのはこの2種類しかない!!
 - (2)補語になる形容詞とその仲間
- 3.そのための手段として、文の主要素にならないものを () でくるといった作業をしてみるのも効果がある。
- 4.そうして、その英文の文型を決定することにより、文の意味が決まる。

Rule-8

㊦と㊧の間の挿入部分の可能性

(L・B34ページ)

㊦と㊧の間でカンマやダッシュによって挿入されている名詞のほとんどは、直前の㊦(の性質・身分・状況・行動など)を説明している(つまり㊦と内容的にイコール関係)と思ってまず間違いない。

(ex) John — the only son of the Foreign Minister — was deeply interested in the international situation.

上の英文でも、the only son of the Foreign Minister(その外務大臣の一人息子)は、Johnの(身分の)説明(つまりJohnとイコール関係)になっている。

また、㊦と㊧の間にthat節が挿入されている場合、そのthat節は100パーセント㊦を修飾し、(㊦を)説明していると見ていい。

☞文法的にはそのthat節は、関係代名詞節である可能性と同格節である可能性がある。同格節となる場合、thatは接続詞で「～というOO」と訳す。関係代名詞のthatと接続詞のthatの見極め方についてはRule-9を参照せよ。

Rule-9

thatが接続詞なのか関係代名詞なのかの見極め法

(L・B37ページ)

関係代名詞のthatの後ろには、S、O、Cのどれか1つが欠けた「不完全な文」がくるのに対して、接続詞の後ろには「完全な文」が続く。

① that + 不完全な文 ☞ that は「関係代名詞」。

(ex) She's the woman that lives next door to us.

[不完全な文]

☞主語が欠けている。

彼女は私たちの隣に住んでいる人です

② that + 完全な文 ☞ that は「接続詞」。

(ex) She told us that the road was closed.

[完全な文]

その道路は通行禁止になっていると彼女は私たちに教えてくれた

関係代名詞のthatの働きは、基本的に1つで「(直)前の名詞(先詞)を修飾する」ことだけ。

ちなみに英文中に現れる that について簡潔にまとめると、以下の7つになる。

- ①代名詞の that。☞ that は単独で用いる。「あれ、それ」と訳す。
(ex) That is my house. あれがうちの家です。☞代名詞のthatは「the+既出の単数名詞」を指している。
- ②形容詞の that。☞ 「that+名詞」の形で用いる。「あの、その」と訳す。
(ex) That song is my favorite. あの歌は私のお気に入りです
- ③接続詞の that。☞ 「that+完全な文」の形で用いる。詳細は83ページを参照せよ。
(ex) That he is trustworthy is true. 彼が信用できるというのは本当だ
- ④関係代名詞の that。☞ 「that+不完全な文」の形で用いる。訳さない。
(ex) This is the man that helped me. こちらが私を助けてくれた方です
- ⑤強調構文の that。☞ It is ~ that ... の形で用いる。訳さない。
(ex) It is the book that I want. 私が欲しいのはその本です
- ⑥副詞の that。☞ 「that+形容詞[副詞]」の形で用いる。「そんなに(も)」と訳す。
(ex) It isn't that important. それはそんなに重要でない
- ⑦先行詞を明示する that。☞ 先行詞の前に置かれる。(詞のtheに近く)和訳しない。
(ex) He put that book on the table which he had talked about the other day.
彼は先日話してくれた本をテーブルの上に置いた

Rule-10

後置修飾の過去分詞の見極め法 (L・B182ページ)

動詞の過去形と過去分詞開が同じであるような動詞は、それが動詞として使われているのか、過去分詞(の後置修飾)として使われているのかを見分けるのに苦労する。しかしこの両者の見極めができないということは、その英文の動詞がどれか分からないということになるわけで、読解にとっては致命的な問題である。この見分けのつきにくい、しかし正確な解釈には是が非でも必要な、過去分詞(p.p.)と動詞(V)の過去形を見分ける方法が以下である。

1.見極め方その(1)

その語が元々他動詞であるなら、後ろに目的語があるはず(他動詞は目的語がなければ存在できない)。したがって、**本来他動詞であるべきはずの「~ed」が、後ろに目的語をとっていないなら、それは過去分詞であると判断する。**この見極め方は、その語の他動詞・自動詞の区別、更に元々の語法が分かっていないと判断ができないわけで、ある意味高度な見極め法。

(ex) A man robbed of his money asked for my help.

上の例文の場合、robbed は元々他動詞で、その場合

rob A(人) of B(物) : AからBを奪う
O

と、「人」を必ず目的語に取る。ところが例文のrobbedにはその目的語が後に見当たらない。となるとこのrobbed はもう他動詞としては存在できないわけで、ならば過去分詞ではないか(つまりaskedが動詞だ)と判断するのだ。

⇒ A man robbed of his money asked for my help.
 S ↑ | P.P. V

そうすると上の英文の訳は「自分の金を盗まれた男性が私の助けを求めてきた」。

2.見極め方その(2)

- ① 「1つの節に動詞は1つだけ」 ☞ つまり1つの節に動詞が2個も3個もあるはずがないということ。
 ② 「同じ節内に」

1.助動詞(+V[原形]) / have[had]+p.p.~

2.be動詞

3.一般動詞の現在時制 ☞ 「一般動詞」とは、be動詞以外の動詞のこと。

のいずれかがあったらそれがその節内の動詞だと判断せよ

(ex) The skills required for the job are not so difficult to learn.

上の英文には、節と節同士をつなぐような接続詞・関係詞・疑問詞が見当たらないので1つの節でできていると判断できる。そして次に、文中に are という be 動詞を含んでいることに着目する。同じ節内に be動詞があったら、そっちが(節内の動詞だとみなす。したがって以下のような構造分析ができる。

⇒ The skills required for the job are not so difficult to learn.
 S ↑ | P.P. V C

訳は「その仕事のために必要な技術は習得するのにそれほど難しくはない」。

3.見極め方その(3)

後ろに受け身を表わす by があれば、それは過去分詞だと判断する。

(ex) The works made by the craftsman sold well.
 S ↑ | P.P. V

上の英文の場合、直後の(受身の) by から、made が過去分詞とすぐに類推できる。訳は「その職人によって作られる作品は、よく売れた」。

2.接続詞

Rule-11

等位接続詞(and, but, or などの働き) (L・B 42ページ)

- 1.等位接続詞の最大の特徴は、語と語、句と句、節と節とを(対等の関係で)結びつけるということ。

(ex) I will write either to the secretary or to the president.

私は秘書か社長のどちらかに手紙を出すつもりです

☞ orは、句と句(to the secretaryとto the president)を対等の関係(つまり両者共にwriteを修飾している)で接続している。

- 2.読解においては、文中に等位接続詞 (and, but, or 等)を発見したら、それらが何と何(誰と誰)を結んでいるのか、等位接続詞の左右の「同構造」をヒントにして、正確に見極めよ。その結ばれたもの同士には以下のような2つの共通点があるはず。

①構造的に等しい ☞ 例え一方が「名詞」なら、もう一方も「名詞」。一方が「S+V」ならば、もう一方も「S+V」のはず。

②文中での働き[機能]が等しい ☞ 例え一方が文の主語になっているなら、もう一方も文の主語のはず。

3.特に3つ以上の語句を結びつける場合、「A, B and(or) C」のように、結びつける最後の語句の直前に and(or) をつけることが多い。したがって、英文中で「A, B and(or) C」あるいは「A, B, C and(or) D」といった構造を発見したら、それらA~C(D)は共通して前後の語句にかかっており、それらは共通して1つの文の要素になっていると判断する。

(ex) The man who lived next door, wrote the book and sometimes went fishing with me met with an accident yesterday.

上の英文で who から動詞の数を数えていったとき、lived と wrote と went は「A, B and C」の並列構造になっているから、これらはワンセットで1つの動詞と見なす。とすると、2つめの動詞は met であり、これがVだとわかる(もちろんSは The man)。訳は「うちの隣に住んでいてその本を書き、そして時々私と釣りに行った男性が昨日事故に遭った」。

Rule-12

等位接続詞を見かけたら、まずその等位接続詞の右側から攻めていくといい。つまり、まず右側の構造形に着目し、それと同じ構造になっている箇所を(等位接続詞の)左側に探してみるという手順で読み進めていく。

(L・B48ページ)

(ex) Nancy always blames and never praises her children.

上の英文の場合、その右側とは never praises という「副詞+(3単のSのついた)動詞」。これと同じ構造を左側に探す。すると always blames が見えてくる。これらが and によって結ばれ、Nancy と her children は、共通のSとO(目的語)になっている。訳は「ナンシーは、自分の子供達をいつも責めてばかりで、決してほめない」。

Rule-13

1.異なる品詞[形]同士でも、文中の機能が同じなら、(機能優先で)等位接続詞によって結ばれることがある。

2.結果として等位接続詞によって結ばれているもの同士が、等しい構造にならないことがある。

(ex) I walked slowly and with great care.

ゆっくりとしかも大変な注意を払って歩いた

上の英文では副詞(slowly)と前置詞句(with great care)と、構造は異なるがどちらも動詞(walk)を修飾する副詞の機能を果たしているため、構造や品詞よりも機能を優先して and によって結ばれている。(L・B53ページ)

Rule-14

等位接続詞の後ろが「不完全な形」で、その意味がとりにくい場合、同構造になっているその直前の文[箇所]を参考に、繰り返しによる省略によって生じた「不完全な形」を元の「完全な形」に戻してみる(Rule-49も参照のこと)。

(L・B55ページ)

(ex) The sun shines in the daytime and the moon at night.

昼間は太陽が輝き、夜は月が輝く

上の英文の場合、等位接続詞の and の右側が不完全な文構造。そこで and の左側を参考に、省略を補えば、the moon shines at night. となる。

Rule-15

1. and によって結ばれる両者が意味的に同類にならない場合、and の後ろに副詞が省略されている可能性が高い。

(L・B 58～61ページ)

① and (also) 「しかも、また」

② and (so/ therefore) 「それゆえ」

③ and (then) 「それから、その場合」

④ and (yet) 「しかし」 ☞ 特に直後に yet の省略された and には要注意。字面は and でも、意味的には but と同じ。

(ex) She worked hard and (yet) she failed.

彼女は一生懸命働いたが失敗した

したがって、and の前後が意味的に「同類」にならない場合、上記のような「and+ (副詞)」の可能性を考えてみると良い。

2. but や or も、「しかし」「又は」以外に複数の意味を持つので注意が必要。

(ex) A bat is not a bird but a mammal. コウモリは鳥でなくほ哺乳動物だ

☞ 「not A but B」で「AではなくてB」。

I will go, rain or shine, to the convention. どんなことがあっても大会に行きます

☞ A or B が(カンマ等)はまれ挿入的に用いられると「AであろうとBであろうと」という意味の副詞句になる(rain or shine で「雨が降ろうが雪が降ろうが ⇒ どんなことがあっても」)。

Rule-16

従位接続詞の働き

(L・B 64～66ページ)

1. 従位接続詞は必ず「S+V」同士を結びつける。

従位接続詞とは、要するに and, but, or, for など以外の接続詞と考えればよい。

したがって because, when, while, if, unless... などは全て従位接続詞である。

2. 従位接続詞のついた方の「S+V」を従属節という。従属節は、主節(裸のS+V)に対して以下の2種類の従属の仕方をする。

(1) 名詞節になる ☞ つまり、S・O・C はなったり、前置詞の目的語になる節になる。

(ex)

Whether she said so

 is uncertain.

S

V

C

彼女がそう言ったかどうかは不確かだ

(2) 副詞節になる ☞ つまり、名詞以外(多くは文全体や動詞)を修飾する節になる。

(ex) If Mom was here, she'd make us a hot cup of tea.

もしお母さんがここにいたら、熱いお茶を入れてくれるのに

☞ 従位接続詞のIfが導く節が、副詞節として後ろの主節を修飾している。

- 3.主節は1つの文に1つだけだが、従属節は1つの文にいくつあってもかまわない。
- 4.英文中に複数の節がある場合、まず主節を探し、そこから文全体の骨組みを見極めていく。

Rule-17

whether のまとめ

(L・B83ページ)

1. 「～かどうか」と訳せるのは以下の場合。

- (1) whether節がS・O・Cのいずれか、又は同格節になっている場合。

(ex) I doubt whether it is true. それが本当かどうか疑わしい

S V O

Ⓢ 同格節となる例については、Rule-61を参照せよ。

- (2) whether節が前置詞の後ろに置かれている場合。

(ex) I was uncertain as to whether I could win the race.

(前)

私はそのレースに勝てるかどうか確信が持てなかった

- (3) 節内に「or not」「A or B」のないwhether節は100%「～かどうか」と思っている。

Ⓢ ただし「or not」等がついている場合は、「～かどうか」「～であろうとなかろうと」両方の可能性があるので見極めが必要。

- (4) 「whether to do[原形]～」は「～すべきかどうか」。

(ex) You must decide whether to go or stay.

君は行くべきかとどまるべきかを決断しなくてはならない

2. 「～であろうとなかろうと」と訳せるのは、whether節がS・O・Cのどれにもなっていない場合。

(ex) He will do that, whether you object to it or not.

君が反対しようとしまいと、彼はそれをするだろう

上の英文はHe～thatまでで文の骨組みは終わっており(SVO)、whether節は文型から外れていると判断できる。

3.形と意味

Rule-18

SV(第一文型)の意味の類推法

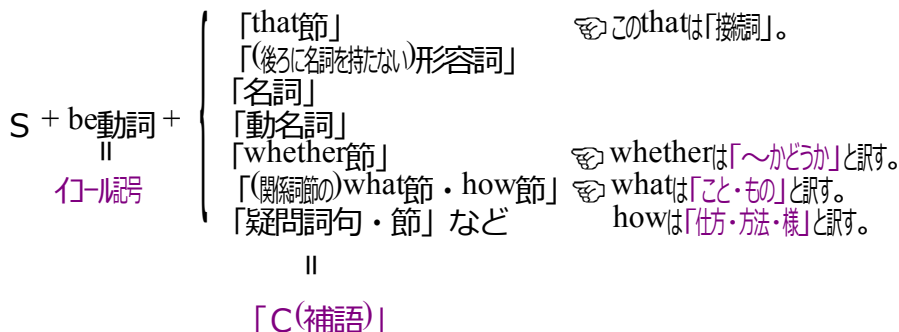
Ⓢ これについては「特別講義(60ページ～)」を参照せよ。

Rule-19

SVC(第二文型)の見極め法

(L・B69ページ)

「⑤+be動詞」の後ろに「(後ろに名詞をもたない単独の)形容詞」「(単独の)名詞」「動名詞」「that節」「whether節(～かどうか)」「疑問詞節」などがあつたら、それらはCとみてほま間違いない。be動詞は「イコール記号」と考えたらいい。



Rule-20

SVC(第二文型)の意味の類推法

(L・B86ページ)

「SVC」構文を作るすべての動詞は、be動詞、又はbecome(つまり「～である」「～になる」)で置き換えることができる。

☞ただし知覚動詞は、「SはCであると知覚する」となる。

(ex) Tom lay awake all through the night.

上の英文で、awakeは「目を覚ました、起きている」という意味の形容詞。でこのawakeは直前直後にかかる名詞がないのでCだと見ることができる。つまり全体は第2文型(SVC)。ならばlayをbe動詞の過去形のwasに置き換えて見れば良い(layに3単現のsがついていないところから過去形だとわかるから)。すると「トムは一晩中起きていた」という訳がカンタンに見えてくる。

Rule-21

SVO(第三文型)の意味の類推法

(L・B90ページ)

1. SVO構文の意味の基本は「Sが(は)Oに対して何らかの働きかけを行う」。

☞別の言い方をすれば、「Sの働きかけ(行為・影響・注目等)がOにまで(直接的に・全面的に)及ぶ」ということ。

SVO構文に関しては、目的語によっては、(その目的語に対して働きかける)動詞の種類、意味を文脈・状況・常識から類推したり限定できてしまうものもある。

類推する際の考え方(手がかり)として、日常生活の基本動作(「言う」「思う」「見る」「わかる」「作る」「壊す/消す」「する/行う」「出す」「取る」「触れる」等)のどれかを当てはめてみるといいことが多い、ということも覚えておくといい。

2. SVO(=that節)の訳し方。

(1) 「SVO」構文で、「O」がthat節だった場合、「V」の意味は「言う」「思う」「み直す/考える」「知る/分かる」のいずれかである。

(ex) He acknowledged that he had made a mistake.

彼は自分が間違いを犯していたことを(しぶしぶ)認めた

たとえacknowledgeが「～を(しぶしぶ)認める」という意味だとわからなくてもthat節を目的語にとっているくらいは誰でもわかる。ならば上記のルールを使って「言った」と訳してしまえば、意味はそう変わらない。

(2)ただし「S」が「物・事」の場合は、「示す」と訳した方がいいこともある。

(ex) Her silence implied that she was angry with me.

彼女の沈黙は彼女が私に腹を立てていることを暗に意味していた

たとえ imply が「～を暗に意味する」という意味だとわからなくても、that節を目的語にとっており、更に主語が her silence(彼女の沈黙)と、「物事」なので、「～を示した」と訳してしまえばいい。

(3)接続詞の that は省略されるので、「S+V S+V～」という構造の英文のVも、上記のルールで意味を類推できる。

Rule-22

SVO₁O₂(第四文型)の意味の類推法 (L・B93ページ)

「SVO₁O₂」を作る動詞は基本的に「SはO₁にO₂を与える」という意味になる。

(ex) I'll stand you a dinner. 君に夕食をおごってあげよう

第四文型の見極め法は、S+Vの後に名詞(の仲間)が二つ連続し、両者に内容的なイコール関係が成立しないという点(成立するのは第五文型)。

ただし「AにBを与えない」「AからBを奪う[取り除く]」という意味になる例外的な動詞もあるので注意。これらは少数ではあるが受験では頻出!

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| ・deny A(人) B(物) :AにBを与えない[使わない] | ・cost A(人) B(生命・仕事・犠牲) :AからBを奪う |
| ・spare A(人) B(苦勞等) :AにBを与えない | ・cost A(人) B(金額・費用) :AからBを奪う[取る] |
| ・save A(人) B(勞力) :AからBを取り除く | ・take A(人) B(時間など) :AからBを奪う[取る] |
| ・charge A(人) B(金) :AにBを請求する | ・owe A(人) B(金など) :AにBを借りている |

⊕ spareには「AのためにBを割いてやる」という「与える」型の用法もあるので注意。

① Could you spare me a few minutes? 少し時間をとってくれませんか

② I will spare you trouble. あなたにご迷惑はかけません

①は「AにBを与える」型のspare。②は「AにBを与えない」型のspareの用例。

その他として「envy A(人) B(物事):AのBをうらやむ」「wish A(人) B(幸せ・挨拶):AのB(幸せ)を願う、AにB(挨拶)を言う」などがある。

もう少し第四文型の意味を深掘りすると、第四文型の意味の根本は「Sが原因となってO₁はO₂をhave[get]する/しない/できない」。多くは「する」型だが、deny など(少数だが)「しない/できない」型もあるということ。

Rule-23

SVOC(第五文型)の意味の類推法

(L・B96～98ページ)

1. 「SVOC」構文の「O」と「C」には意味上、「主語と述語の関係(OはCする[される] / なる / である)」が成立している。

(ex) I told him to clean the room. ⊕ O(him)とC(to clean)は、意味の上で「主語と述語」の関係。
O C
「私は、彼がその部屋を掃除するように言った」
(主) (述)

2. 「SVOC」構文の訳し方は、「V」の種類によって2種類に分類できる。

(1) 「V」 = 「知覚動詞」 ⇒ (OとCに「主語と述語」の関係があることを意識して)左から右に直訳すれ
「思考・認識動詞」(ばい)。 ⊕ 特に出さなくていいことが多い。 find O C のfindは和訳に出さなくていいことが多い。

(ex) They warned me that the road had not been used for many years.

☞直訳は「彼らは私にその道路は長年使用されていないと注意してくれた」だが、「彼らは私にその道路は長年使用されていないと知らせてくれた」と訳せば、warnがたとえわからなくても大丈夫。なお、thatは省略されることもあり。

2. 上記の構文の受動態、更に「 $\textcircled{S}(\text{人}) + \textcircled{V} + \text{oneself} + \text{that } S+V\sim$ 」は、「 \textcircled{S} は～だと知っている[思っている]」と訳せることが多い。

(ex) I am convinced that he is guilty. ☞convince O(人) that S+V~ の受動態。
=I convince myself that he is guilty.

☞直訳は「私は彼が有罪であると確信している」だが、「私は彼は有罪だと思っている」と訳せば、be convincedがたとえわからなくても大丈夫。なお、thatは省略されることもあり。

3. 「It is + p.p.+ that S+V~」という仮主語構文の意味はたいてい以下の3種類であることが多い。

- ① 「～だと言われている・報じられている」
- ② 「～だと思われる[ている]・みなされる[ている]」
- ③ 「～だと示される[ている]」

☞要するにこれらは R-21の2.の動詞の作る受動態!

(ex) It can be concluded that we all seek for happiness.

☞「我々はみな幸福を探し求めていると結論づけることができる」。つまり「～だとみなされうる(みなすことができる)」で訳せる。

4. 「 $\sim, \textcircled{S} + \textcircled{V}.$ 」 「 $\sim, \textcircled{S} + \textcircled{V}, \sim.$ 」型の \textcircled{V} は seem, hear 以外なら「言う」「思う」と訳せばいい。

(ex) There would be an earthquake, the scientist predicted.

\textcircled{S} \textcircled{V}

☞「その科学者は地震が起ると予言した」。つまりpredictedは「言った」で訳せる。挿入されうるその他の語句として、it is certain, that is for sure, there is no doubt といった「…は確実な」タイプがある。

5. 「 $\sim, \textcircled{V} + \textcircled{S}.$ 」 「 $\sim, \textcircled{V} + \textcircled{S}, \sim.$ 」型の \textcircled{V} は「言う」と訳せばいい。

(ex) Loneliness causes sadness, noted one researcher.

\textcircled{V} \textcircled{S}

☞「孤独が悲しみを引き起こす、とある研究者は言及した」。つまりnotedは「言った」で訳せる。

Rule-26

動詞とその後に続く形からの意味の類推法

(L・B110~115ページ)

1. 「動詞 + A with B」型。

(1) 「AにBを与える」

☞もちろん「A with B」のwithが「～と一緒に」「～でもって」などという意味の場合もあるので、注意は必要。

(2) 「AをBと結びつける」

2. 「動詞 + A for B」型。

(1) [A for B のforが「理由のfor」だった場合] ⇒ 「賞罰」型が多い

(2) [A for B のforが「イコールのfor」だった場合] ⇒ 「交換する」「みなす」型が多い

3. 「動詞 + A of B」型。

- (1) 「A()からBを取り去る[取り除く]」
- (2) 「B()にAを求める」
- (3) 「A()にB(懶・教・記憶・警等)を与える」

4. 「動詞 + A from[out of] B」型。 ☞ 「Aが[を]Bから離れる[別れる・離す]方向に仕向ける」が意味の基本。

- (1) 基本イメージで理解できるもの ☞ 特に「A out of B」型はその可能性が高い。
- (2) 動詞 + A + from[out of] doing~ 「Aが~しない[できない]ようにする」
☞ これは、要するに先程の「S+V+O+from doing~」タイプ。「Sが原因となって結果としてOは~しない/できない」と訳してもいい。
- (3) 「AをBと区別する」
- (4) 「BからAを得る[出す・分ける]」

5. 「動詞 + A on[upon] B」型。

☞ AがBの上に乗っかるイメージ。

「AをBに与える[Bの上に置く]」

6. 「動詞 + A into B」型。

☞ into[to/toward(s)]のイメージは、ざっくり言うと「→」。

- (1) 「AをBに変える」
- (2) 「AをBの中に入れる」 = 動詞 + A in B ☞ 特に into は「外から中への移動」を意味する。

7. 「動詞 + A to B」型。

- (1) 「AをBに与える[伝える、加える]」「AはBのせいだと考える」
- (2) 「AをBに連れてゆく[くる]、もたらす」「AをBに合わせる」
- (3) 「AをB(状態・性質)に変える[にする]」

このうち「与える」型が一番多い(約60%)。「もたらす」型が約30%)。一言でいえば「A to B」を後ろにとる動詞は、AからBへの「移動・変化」を表す動詞が多いといえる。

8. 「動詞 + A as B」型。

「『AはBだ(A=Bだ)』とみなす[思う]/言う」 A = B ※・「A as B」は「A=B」と考えよ。
・「みならず」と訳す動詞の方が多い。

☞ S strike A as B(AにSがBという印象を与える)、S replace A as B(SはBとしてAに取って代わる)のように、「S=B」となる動詞も少数ではあるがある。
また「S=物・事」の場合、ルールが当てはまらないこともある。

9. 「動詞 + A off B」型。

「AをBから離す[遠ざける]」

Rule-27

受動態のまとめ

(L・B116ページ)

1. 受動態とは「元の(能動態の時の)英文の目的語を主語にして書き換えた文」のこと。

2.受動態の英文の意味がうまくとれない時は、元の(能動態の)英文に戻してみるといい。

3.受動態の英文の「be動詞+p.p.」の後ろの部分は、「目的語が1つ欠けた」構造になっている。そしてその欠けた目的語の位置に主語の名詞を移動させて、元の能動態の英文に直してみる。

(ex) We are burdened with heavy taxes.

④上の英文の場合、are burdenedの後ろには目的語が欠けている。主語のWeを目的語の位置に戻せば「burden us with heavy taxes」が見えてくる。「動詞+A with B」となるので「AにBを与える」型と判断し、「我々は重税を与えられて(課せられている)」と訳せばいい。

《SVOCをとる動詞とそのCのバリエーションのまとめ》

Cのバリエーション	それをCに取ることのできる動詞
原形	使役動詞(make, let, have)・知覚動詞・help ④動詞の原形をCにとるのは上記のみ。それだけこの5種類の動詞の語法はしっかりおさえておきたい。
形容詞	make・keep・leave・like・wish・paintbelieve・think・find drive・have[使役]・get[使役]・set等
現在分詞	知覚動詞・have[使役]・get[使役]・keep・leave・find・want[否定文で]等
過去分詞	④全ての「SVOC構文」は、OとCの意味関係が受身(OはCされる)になる場合、Cには過去分詞が入る。

4.準動詞(不定詞・動名詞・分詞)

Rule-28

カンタン不定詞見極め法 (L・B125ページ)

1.その不定詞が文中で「S(主語)」「O(目的語)」「C(補語)」のどれかになっていたら、その不定詞は「～すること」と訳せばいい。 [名詞用法]

④「疑問詞+to do[原形]～」で「疑問詞+(す)べきか」となる。what to doは「何をすべきか」。ただし以下の2点に注意。

① how to do[原形]～については「どのように～(す)べきか」「～の仕方」いずれかで訳す。

② what と which については、直後に what, which の中味を説明する名詞が割り込むこともある。

(ex) I don't know which ball to use. どのボールを使うべきかわからない

2.その不定詞が直前の名詞を修飾していたら「～すべき」「～するための[ような]」「～することができる」という」と訳せばいい。 [形容詞用法]

3.それ以外の不定詞(いわゆる「その他型」)は、70%は「目的(～するために)」か「結果(して～等)」だ。 [副詞用法]

④2に関して。直前に名詞があるからといってその不定詞が必ずしもその名詞を修飾しているとは限らないので、その点は注意。

Rule-29

「結果」の不定詞とは、その不定詞部分を「接続詞+S+V～」で書き換えられるものこと。

(ex) The man left the town never to return. (L・B 1 2 7ページ)

=and he never returned

彼は町を離れ、そして二度と戻ってこなかった

⚠結果の不定詞で最頻出は only to do[原形]～。これは but S+V～で書き換えられる。

(ex) I hurried to the station only to miss the train.

私は駅に向かって急いだ。しかし列車に乗り遅れた(=but I missed the train)

Rule-30

1.不定詞が感情の原因を表す場合、不定詞の前に感情を表す語(品詞としては「動詞」や「形容詞・分詞」)がある。

2.その場合、その不定詞部分は「～して」「～できて」と訳せばいい。

(ex) I'm glad to see you. あなたに会うことができうれしいです
(感情)

(L・B 1 2 7ページ)

Rule-31

1.不定詞が判断の根拠を表す場合、不定詞の前に人の性質・性格を表す語(品詞としては「名詞」や「形容詞・分詞」)やgood型・bad型の形容詞/分詞等がある。☞要するに「判断を表す語」が不定詞の前にある!

2.その場合、その不定詞部分は「～なんて」「～とは」と訳せばいい。

(ex) He was careless to say such a thing to her.
(性格)

彼女にそんなことを言うなんて彼は不注意だった

(L・B 1 2 8ページ)

Rule-32

1.不定詞が条件を表す場合、主節に推量の助動詞(will[would], may[might], can[could]等)があることが多い(逆に「強制力の強い助動詞」が主節の▽なら、その不定詞句は「目的(～するために)」の可能性が高い)。

2.その場合、その不定詞部分は「もし～(なら)」と訳せばいい。

(ex) To say it carelessly, you may be misunderstood.

もし不注意にそんなことを言ったら、君は誤解されるかもしれないよ

(L・B 1 2 9ページ)

Rule-33

be to 構文

(L・B 1 3 4ページ)

1.be to構文か、単なる「SVC」かの見極め方は、be動詞をはさんで

(1)前後がイコール関係になる ⇒ 「SVC」

(ex) My dream is to be an actor. ☞「My dream = to be an actor」なのでSVCとわかる。

私の夢は役者になることです

(2) 前後がイコール関係にならない ⇒ be to構文

(ex) You are to come here on time. ☞ 「You ≠ to come」なのでbe to構文とわかる。
君はここに時間通りにこなければならぬ

2.be to構文は、助動詞の will, can, should[must] のどれかでたいてい言い換えることができる(should[must]の意味になる可能性が最も高い)。

3.be to構文の表す意味。

① 予定 「～する予定になっている」

これは助動詞の will と同じで未来を表す。したがって未来を表す副詞(句)と共に用いられることが多いのが特徴。

(ex) The concert is to begin at seven.
コンサートは7時に始まる予定になっています

② 運命 「～する運命になっていた」

これは「予定」の be to が過去時制で用いられたもの。never とセットで用いることも多い。その場合の訳し方は「決して～することはなかった」となる。

(ex) Mr.Brown was never to see his home town again.
ブラウンさんは二度と故郷を見ることはなかった

③ 可能 「～できる」

これは助動詞の can と意味は同じ。主に否定文で使われることが多く、「be to+be+p.p.～」という形になることも多い。

(ex) The ring was not to be found. その指輪は見つからなかった

④ 意図(思) 「～するつもりだ」

たいてい if 節の中で用いられる。

(ex) If you are to succeed in anything,you have to make a good start.
どんなことでも成功するつもりなら、良いスタートを切らないといけない

⑤ 命令・義務 「～すべきだ」「～しなくてはならない」

これは助動詞の should, must と意味は同じ。実は be to構文で一番多いのが「命令・義務」をあらわすもの。だから英文中で be to構文に出くわし、なおかつ意味を特定する目ぼしいヒントが見当たらない場合、まず「命令・義務」で訳してみるという。

(ex) You are to pay your debt as soon as possible.
借金はできるだけ早く返さなければいけない

Rule-34

準動詞の完了形の表す意味

(L・B 141・148・156ページ)

準動詞の完了形(to have+p.p. / having+p.p.)は、全て主節の動詞よりも1つ前(昔)の内容(事)を表す。

1.完了不定詞 (to have+p.p.～)。

(ex) He seems to have been ill. 彼は病気だったようにみえる

上の英文の to have been は、主節の動詞(seems[現在制])よりもひとつ前の時制、つまり「過去」の内容を表している。

會単純不定詞(to do[願]~)は、主節の動詞と同じかそれよりも未来の内容(制)を表す。

2.完了動名詞 (having+p.p.~)。

(ex) She is proud of having been a famous actress when she was young.

彼女は若いころ、有名な女優だったことを自慢に思っている

上の英文の having been は、主節の動詞(is[現在制])よりも1つ前の時制、つまり過去の内容を表している。

會単純動名詞(doing~)は、主節の動詞と同じかそれよりも未来の内容[時制]を表す(remember, forget などは例外)。

3.完了分詞 (having+p.p.~)。

(ex) Having caught cold, he is absent from school today.

風邪をひいたので、彼は今日学校を休んでいる

上の英文の Having caught cold は、主節の動詞(is[現在制])よりも1つ前の時制、つまり過去の内容を表している。

會単純分詞(doing~)は、主節の動詞と同じかそれよりも未来の内容[時制]を表す。

Rule-35

準動詞とその意味上の主語

(L・B 138・145・157ページ)

1.不定詞の場合。

文中の for A(名) to do[願]~ という構造の「A」と「to do[願]~」の間には、意味上「主語と述語の関係」が成立している(「A」=意味上の主語)。

(ex) For you to study hard is important. 君が一生懸命勉強することが大切だ
(主) (述)

2.動名詞の場合。

文中で動名詞の前に「所有格」「目的格」「名詞」のいずれかがついていたら、それらと動名詞との間には、意味上「主語と述語の関係」が成立している(「(動名詞の前に置かれた)所有格・目的格・名詞」=意味上の主語)。

(ex) I insisted on his[him] going there. 私は、彼がそこに行くことを主張した
(主) (述)

I insisted on Jack paying for it.
(主) (述)

私はジャックがその支払いをするよう主張した

3.分詞の場合。

分詞構文の分詞句の前に置かれた名詞と直後の分詞とは、意味上「主語と述語の関係」が成立している(「(分詞の前に置かれた)名詞」=意味上の主語)。

(ex) John returning safe, everybody was relieved.
(主) (述)

ジョンが無事戻ったので、みんなはほっとした

4. 準動詞(不定詞・動名詞・分詞)に意味上の主語がついていない場合、文の主語、つまり主節の主語がその(不定詞・動名詞・分詞)の意味上の主語であると判断する。

⚠ただし「一般の人」が意味上の主語である場合や、意味上の主語が文脈から明らかでない場合も、意味上の主語は明示されないことがあるので注意は必要。

Rule-36

文中の「名詞+doing～」の可能性 (L・B170ページ)

文中で動名詞も現在分詞も、直前に名詞を伴って「名詞+doing～」という構造になることがある。文中に現れた「名詞+doing～」が「名詞+動名詞」なのか、それとも「名詞+現在分詞」なのか、瞬時にその区別がつくようにならないといけない。

1. 「名詞+doing～」が「名詞+現在分詞」だとみなせる3パターン。

(1) 現在分詞の後置修飾(現在分詞後から直前の名詞を修飾している場合)。

(ex) The man standing at the gate is my boyfriend.

名詞 ↑ 分詞

門の所に立っている男の人は私のボーイフレンドです

(2) 分詞構文において「名詞」が直後の分詞の意味上の主語になる場合。

(ex) Jack returning safe, we were relieved.

名詞 分詞
ジャックが無事戻ったので、私達はホッとした

Nancy was reading the letter with tears running.

O(名詞) C(分詞) with O C:「OがCの状態」
ナンシーは涙を流しながらその手紙を読んでいた

(3) 第5文型のCに現在分詞が入る場合。「S + V + O(名) + C(現在分詞)」。

(ex) I saw Tom helping his mother to carry it.

O(名詞) C(分詞)

私はトムが、お母さんがそれを運ぶのを手伝っているのを見た

2. 「名詞+doing～」が「名詞+動名詞」だとみなせるのは、「名詞」の部分が、動名詞の意味上の主語になる場合。

(ex) I insisted on Jim doing it alone. 私はジムがそれを一人ですよう主張した

名詞 動名詞 主語 述語

⚠上例の場合、doing は現在分詞で Jim を修飾していると見ると「それを一人でしているジムを私は主張した」と意味不明な英文になってしまう。動名詞なら、その動きは「主語・目的語・補語」や準動詞・前置詞の目的語等になること。そこで上例の doing は動名詞で、Jim ~ alone まで全体が前置詞(on)の目的語になっているとみると文意が成り立つ。

分詞について

1. 英文中の分詞の働きの大半は形容詞と同じ。

以下の英文の文構造と意味が取れるだろうか？

The parents using new genetic screening techniques managed to have a baby girl.

《語句》 genetic screening techniques: 遺伝子選別技術
manage to do [願] ~: (どうにか) ~ できる

まず簡単な文構造を書いてみよう。

The parents using new genetic screening techniques managed to have a baby girl.

⑤ ↑

⑥

意味は「新しい遺伝子選別技術を利用した両親が、女の赤ん坊を生むことができた」となる。

上の分析図を見てわかるように、この英文の中で using~techniques までは、主語の The parents を修飾する形容詞句。しかしなぜそう言えるのだろうか？

それは以下のようなプロセスでわかるのである。

- ① The parents は初めて現れた(前置詞の付いていない)裸の名詞なので主語だと判断する。
- ② 直後の using は、動名詞、現在分詞両方の可能性があるが、
 1. 主語の直後にまた動名詞が連続するというのも不自然
 2. using を動名詞、The parents をその意味上の主語とみなしても、V(動詞)の manage (to have) と意味的につながらないので、ここは現在分詞と判断する
- ③ 英文中の(現在分詞・過去分詞含め)分詞の働きの大半は形容詞と同じ。つまり
 1. 直前直後の名詞を修飾する
 2. C(補語)になる
 のいずれか。S C V という文型はないので、名詞、つまり直前の The parents を修飾していると見る。

という流れだ。

特に「英文中の分詞の働きの大半は形容詞と同じ」という考え方は、分詞の英文中での働きを見極める上で、とても役に立つのでしっかり覚えておこう。

會残りの(つまりそれ以外の)働きとは「動詞的な働き」。具体的には以下になる。

- ① 「be動詞+現在分詞」という形で、進行形(～している最中だ)を作る。
(ex) He is playing baseball at the park. 彼は公園で(今)野球をしています
- ② 「be動詞+過去分詞」という形で、受動態(～される)を作る
(ex) He is loved by everybody. 彼はみんなから愛されている
- ③ 「have[had]+過去分詞」という形で、完了形を作る。
(ex) He has gone to America. 彼はアメリカに行ってしまった

そもそも分詞という言葉の由来は、『「動詞」と「形容詞」の性質を”分かち”持つ”詞(ことば)”』。

これ以外に「分詞構文」という(文法的には)副詞的な働きもあるが、これはある意味、分詞の特殊な用法と言っていいだろう。

2.分詞構文のタイプとその訳し方

(L・B160ページ)

(1)分詞構文のタイプ(with O Cを除く)。

① Doing~
p.p.~
(形)~ } , (S)+(V)...

② ~, { doing~
p.p.~
(形)~ } , ~

③ (S)+(V)..., { doing~
p.p.~
(形)~ } ㊦カンマ(,)はないこともあるので注意。

(2)分詞句が文頭、文中盤(①、②のタイプ)の訳し方。

- ①[時] 「~のとき[間]」「~(しよう)と」「~につれて」「~した後」など
- ②[理由] 「~なので」「~により」
- ③[条件] 「もし~なら」
- ④[譲歩] 「~だけれど」「たとえ~としても」

のどれかで訳す。①~④の順番通り覚える。なぜなら「時」で訳せる場合が最も多い。次が「理由」、その次が「条件」。「譲歩」の可能性は最も低いから。

(3)分詞句が文章後半にあった場合(③のタイプ)の訳し方。

- ①[連続] 「そして~(する)」
- ②[同時] 「~しながら」

(ex) The man took a step forward, singing a song for her.

その男性は一歩前に進み出て、そして彼女のために歌を一曲歌った

The boys sat on the grass, looking at the setting sun.

少年たちは丸んでいく夕日を眺めながら、草の上に座っていた

もちろん文章後半でも「時」「理由」「条件」「譲歩」のいずれかで訳した方がいい分詞句もある。また文章前半や中盤の分詞句を「そして~」「~しながら」と訳した方がいいこともあるので文脈によって臨機応変な対応は必要。

(4)特に(being が省略された結果)過去分詞や形容詞で始まるような分詞構文には注意せよ。ただ訳し方のルールは、普通の分詞構文と同じ。

(ex) Seen from a distance, the rock looks like a human face.

遠くから見るとその岩は人間の顔のように見える

Unable to operate a computer, he couldn't be hired.

コンピュータの操作ができなかったので、彼は雇用されなかった

(5)with O C 構文。

(英文中のwithを含む前置詞句)with O C 構文かどうかは、以下の2点が見極めのポイントになる。

- ① 「with+名詞」の後ろに「形容詞」「分詞」「副詞」「前置詞+名詞」のいずれかがあがる。
- ② 「(withの後ろの名詞)」とそれら語句との間に「主語と述語の関係」が成立している。

with O C 構文の基本は「OがCの状態」。それでうまく訳せない時は、「時

(～の時・(したら)」「理由(～ので)」「条件(もし～)」「譲歩(～けれど・としても)」「そして～(する)」「～しながら」の6種類のうちから文脈に則して適当なものを選ぶ。

(ex) With night coming on, they started home. ☞ with O Cを「理由」として訳している。

夜になってきたので、彼らは家路についた

5.倒置・語順変化(文の要素の移動)

Rule-38

〔準〕否定の副詞(句・節)の倒置の公式 (L・B 2 2 3ページ)

(動詞を修飾する)〔準〕否定の副詞(句・節)が文頭に飛び出すと、主節は疑問文と同じ語順になる。

〔準〕否定の副詞(句・節) + 疑問文と同じ語順
[主節]

(ex) never「決して～ない」 little「ほとんど～ない」 rarely「めったに～ない」 seldom「めったに～ない」
on no account「決して～ない」 few「ほとんど～ない」 scarcely「ほとんど～ない」
in no sense[way/ respect]「決して～ない」 hardly「ほとんど～ない」 no sooner「ほとんど～ない」
in[under] no circumstances「決して～ない」 not until「～して初めて」 only「～して初めて、～のみ[しか]」

(ex) In no circumstances will I allow you to go there.

いかなる事情があろうと、私は決してあなたがそこへ行くことを許さない

更に、このルールを逆に利用して〔準〕否定の副詞(句・節)が文頭に飛び出した英文に出くわした場合、「疑問文と同じ語順になっている箇所」がその英文の主節だと判断するとよい。元々の主節がどこから始まっているのかが分かれば、それよりも左側は「(文頭に移動した)否定の副詞(句・節)」だと、簡単にこれまた判断できる。

(ex) Not until we lose our health do we realize its value.

健康を失ってはじめてそのありがたさがわかる

上の英文でも、疑問文の語順になっている下線部分が主節。そしてそれより左側のNot～healthまでが(文頭に移動した)否定の副詞節だと、これで簡単に判断できる。

また解釈などでは、[not only A but also B: AだけではなくてBもまた]の構文でnot onlyが文頭に出て、Aに当たる部分が「疑問文の語順」になるというパターンがよく出題される。

(ex) Not only does Tom say what should be said but also he does what should be done.

トムは言うべきことを言うだけではなく、やるべきこともまたやる

Rule-39

M(一般の副詞句など)を強調する倒置の公式 [第一文型の倒置]
(L・B 2 2 6ページ)

1.M + V + S

(ex) At the foot[ふもと] of a hill stands our school.

M V S
丘のふもとにわが校は建っている

☞M(修飾語)とは、具体的には、名詞を修飾する形容詞や、動詞などを修飾する副詞を指して言う。MはModifierの略。

2. M + S + V (主語が代名詞の場合)

(ex) $\frac{\text{Down}}{\text{M}} \frac{\text{it}}{\text{S}} \frac{\text{came.}}{\text{V}}$ それ落ちてきた

ⓂMには「場所(時)を表す副詞」「運動の方向を表す副詞(up, down, in, out, off など)」などがくることが多い。

Rule-40

SVCの倒置の公式 [第二文型の倒置]

(L・B228ページ)

1. C + V + S

(ex) $\frac{\text{Happy}}{\text{C}} \frac{\text{are}}{\text{V}} \frac{\text{the people who love flowers.}}{\text{S}}$ 花を愛する人は幸いである

2. C + S + V (主語が代名詞の場合)

(ex) $\frac{\text{Right}}{\text{C}} \frac{\text{you}}{\text{S}} \frac{\text{are.}}{\text{V}}$ 君が正しい

3. 特に、以下の2つの構文については「so~」「such」が文頭に飛び出すと、主節は疑問文と同じ語順になり、受験では頻出。

① S + V + so ~ that S + V... : Ⓞはとても~なので…する

(ex) So strong was his belief that he would never change his mind.

彼の信念はとても強かったので彼は決心を決して変えなかった

Ⓜ元々は His belief was so strong that~. という語順だった。

② S + be動詞 + such that S + V... : Ⓞは大変なものなので…する

(ex) Such was his anger that he became ill.

彼の怒りは大変なものだったので、彼は病気になってしまった

Ⓜ元々は His anger was such that~. という語順だった。

Rule-41

O(目的語)を強調する語順変化 [第三文型~第五文型の倒置]

(L・B231ページ)

1. 「S+V+O」のOが文頭に飛び出すと全体は「O+Ⓞ+Ⓜ」の語順になる。

(ex) $\frac{\text{This trip to Hokkaido,}}{\text{O}} \frac{\text{I}}{\text{S}} \frac{\text{will never forget.}}{\text{V}}$

今回の北海道旅行を私は決して忘れないだろう

2. 「S+V+O₁+O₂」のO₂が文頭に飛び出すと全体は「O₂+Ⓞ+Ⓜ+O₁」の語順になる。

(ex) $\frac{\text{Whether he will come or not}}{\text{O}_2} \frac{\text{I}}{\text{S}} \frac{\text{cannot tell}}{\text{V}} \frac{\text{you.}}{\text{O}_1}$

彼がくるかどうかをあなたにお伝えできません

3. 「S+V+O+C」のOが文頭に飛び出すと全体は「O+Ⓞ+Ⓜ+C」の語順になる。

(ex) $\frac{\text{Any person}}{\text{O}} \frac{\text{I}}{\text{S}} \frac{\text{consider}}{\text{V}} \frac{\text{a coward}}{\text{C}} \frac{\text{if he does nothing in that situation.}}{\text{C}}$

もしそのような状況で何もしないのなら私はどんな人であれ、(その人を)臆病者とみなします

會要するに、O(目的語)が文頭に出ても倒置(S+V → V+S)は起きない。ただし目的語に否定語(又はそれに準じる語)がついて文頭に移動した場合は、主節は疑問文と同じ語順になる(つまり倒置が起きる)。

(ex) Not a word did I say. 私は一言もしやべらなかつた
O [疑問の語順]

會SVOCの場合「CSVO」のパターンは、ないわけでは無いが数は少ない。

Rule-42

So V+S / Neither[Nor] V+S (L・B 234ページ)

1. S₁ + V ~ ⇒ So V+S₂
「S₁は~だ」[肯定] 「S₂もまた~だ」

(ex) He holds a masters degree. So do I. 彼は修士号を持っている。私もだ。
V S

2. S₁ + not + V ~ ⇒ Neither[Nor] V+S₂
「S₁は~ない」[否定] 「S₂もまた~でない」

(ex) I will not go shopping. Neither[Nor] will Mary.
V S

僕は買物には行かない。メアリーも行かないだろう。

會Neither[Nor] や So の後ろが「完全な疑問文」の形になることもある。

(ex) Brian Smith had no money, nor did he know anyone he could borrow from in this strange town.

ブライアン・スミスは金を全然持っていなかったし、また金を借りられる人もこの見知らぬ町では知らなかった

この場合の neither[nor] は、「and (also) + not」と考えるといい。

そうすると、上例の nor did he know も and he did not know と読み換えられる。

Rule-43

仮定法における if 節の倒置 (L・B 236ページ)

1. 仮定法の if 節(条件節)の if が省略されると、その条件節は「疑問文と同じ語順」になる。

(ex) Could I see him once more, I would be happy.
=If I could see him once more

もし彼にもう一度会うことができばうれしいのですが

2. 見極めのポイントは以下の2つ。

(1) ?(クエスチョン・マーク)が文末にないのに、疑問文の語順になっている節が文中にある。

(2) 主節に「助動詞の過去形」「助動詞の過去形+have+p.p.~」がある。

會「~だろう」「~の可能性はある」という推量や可能性の助動詞(would/might/could/should)は例外。

またIf 節にshouldが入る仮定法(もし万一~なら)の場合、主節に、「助動詞の

過去形」がこないこともあるので注意。

(ex) Should anyone call me, please take a message.

=If anyone should call me, please take a message.

もし万一誰かから電話があったら、伝言をきいておいてください

この2つのポイントがあてはまる英文に出くわしたら、(仮定法の) if の省略を疑ってみる。

Rule-44

There + be動詞[一般動詞] + S(名詞)構文 (L・B 239ページ)

1. 「There is S + 分詞～」となる場合は「S(はが)～している(される)」と訳すといひ(つまりSと分詞～の間には「主語と述語の意味関係」が成立している)。

(ex) There was a car coming up the hill. 車が丘を登ってきた

上例でも a car と coming up は「動登ってくる」と主語と述語の意味関係になっている。

2. 「There + V(一般動詞) + S」となる場合のV(一般動詞)には come, live, exist remain, stand など、「存在・往来」を表す動詞がくることが多い。

(ex) There stands a castle on the hill. 丘の上に城が建っている

訳す場合には(There は削って) A castle stands on the hill. と、頭の中で「㊟+㊿」の語順に戻して訳せばいい。

Rule-45

比較級の as 以下、than以下の倒置 (L・B 239ページ)

than や as の後ろの「S+V」の「S」が長すぎる場合(や比較の対象同士を明確にしたい場合に、SとVがひっくり返って「V+S」となることがある)。

(ex) He loves her more than does his big brother.

V S

兄が愛するよりもっと彼は彼女のことを愛している

㊟as や than の後ろの do[does/did]のほとんどは(直前の一般動詞の繰り返しを避ける)代動詞。上の英文でも does = loves (her)。

Rule-46

S+V+O+C ⇒ S+V+C+O (L・B 240ページ)

「S+V+O+C」が(Oが長すぎる場合に、「S+V+C+O」の語順になることがある)。

(ex) Don't leave undone what you should do.

V C O

やるべきことをやらずに置くな ⇒ やるべきことをやりなさい

㊟この手の語順変化(文の要素の移動)を見抜くには、動詞の語法についての知識が不可欠。上の英文も「leave O(名) C(形・名・分):OをCのままにしておく」という語法を知らないと読み解くことは不可能。

Rule-47

S+V+O+M ⇒ S+V+M+O (L・B242ページ)

「S+V+O+M(隣語)」が(Oが長すぎる場合に)、「S+V+M(副詞)+O」の語順になることがある。

(ex) He added to his tea a little sugar and milk.

彼は紅茶に砂糖とミルクを少し加えた

會上の英文は「add A to B: AをBに加える」が「add to B A」の語順になっている。
his teaが「B」、a little sugar and milkが「A」。

この手の語順変化(文の要素の移動)の見極め法として、「V+(前)+A(名)」という構造の後に、一見、S・O・Cといった特定の役割を持たない「名詞」を発見したら、「S+V+M+O」型の語順変化ではないかと疑ってかかってみるのもいい。

Rule-48

譲歩節中での語順変化 (L・B238ページ)

1. 「(as) **形容詞(副詞・名詞)** + as + S + V」で「Sは~だけれど」。
※「Sは~なめで」という意味になることもたまにある。

(ex) Unbelievable as it was, they actually welcomed us.

信じられないことだったが、彼らは実際私達を歓迎してくれた
Child as he was, he supported his family.

子供だったけれど(子供ながらに)、彼は家族を養っていた

會上例のように名詞が節頭に来る時は、(その名詞は)無冠詞になる。

2. その他

(1) 「**動詞 + as + S + 助動詞**」で譲歩(たとえ~としても)を表す。

(ex) Try as he would, he could not lift the rock.

彼がどんなにやってみても、その岩を持ち上げられなかった

(2) 「**動詞 + 疑問詞 + S + 助動詞**」で譲歩(たとえ~としても)を表す。

(ex) Come what may, I'll be ready. どんなことがあっても私は覚悟ができています

(3) 「**Be it (ever so)...**」で譲歩(たとえ~としても)を表す。

(ex) Be it ever so humble, there is no place like home.

たとえどんなにみすぼらしくとも、我が家に勝る場所はない

會上「**動詞の原形**」で始まる英文には命令文以外に、上記のような「譲歩(たとえ~としても)」の構文があり得ることを頭に入れておくといい。
ただしこれらは古風な表現で、使われる頻度はそれほど高くない。

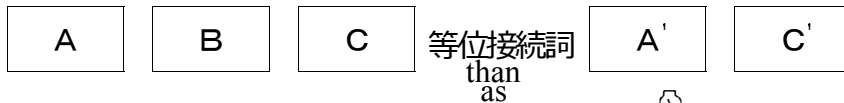
6.省略

Rule-49

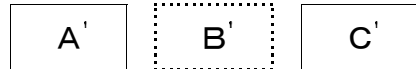
英文中で文法的に説明がつかない箇所に出会ったら

(L・B246ページ)

1. 「省略があるのでは？」とまず考えてみる。
2. 省略というのは、同じ言葉の繰り返し[同構造の反復]があった場合に生じるもの。
3. 直前部分で、その意味不明箇所と同構造の文を探してみる。
4. 見つかったら、両者を並列して省略された部分を補ってみる。
要するに、左側の[前の]英文にはあって、右側の[後ろの]英文中にはないものを探す。頭の中で上下に(両英文を)並べて見るのもいい。



☞等位接続詞とはand,but,or等のこと。



このような省略が最も生じやすいのは「等位接続詞」と「(比較の) than や as」の右側(後ろ)である(故に、「等位接続詞」「(比較の) than や as」の後ろは疑問として狙われやすい。要注意である)。

※例外的に、直後の節内の語句が省略されている場合もある。

(ex) If you want to, you may go there. ☞ to の後には、直後の節内の go there が省略されている。
そうしたいなら行ってもいい

Rule-50

that の省略

(L・B250ページ)

1. think, suppose, believe, say, know 等の動詞の目的語になる名詞節を導く that は特に口語調では省略されることが多い。

(ex) I know (that) she dislikes him. 私は彼女が彼を嫌いなのを知っている

Father told me (that) he would take me to the Exposition with him.

お父さんは私に博覧会に連れて行ってあげようと言った

I'm sure (that) he's innocent. 彼が無実であると確信しています

☞上例のように「be動詞+形動詞・過去分詞+that S+V～」の that も省略されうる。

2. 「It ~ that ...」構文や、「SVC」構文の「C」がthat節の場合、that が口語調では省略されることがある。

(ex) It is a pity (that) he died so young.

彼がそんなにも若くして亡くなったのは残念だ

The truth is (that) he was innocent.

実際彼は無実だった

3.強調構文の that は省略されることがある。

(ex) It is in London (that) the traffic is noisiest.

交通騒音が一番ひどいのはロンドンだ

It is the man (that[who]) killed her. 彼女を殺したのはその男だ

4.いわゆる「so~that」構文の that、「so that S+may[will/can]+do[願]~: Sが~するために(できるように)」構文の that は省略されることがある。

(ex) He stepped aside so (that) the child could pass.

彼はその子供が通れるようにどいてあげた

場合によっては so の方が省略されることもある(ただしこれは文語表現)。

(ex) You should study hard (so) that you will be able to pass the exam.

君は試験に通ることができるよう、一生懸命勉強すべきだ

Rule-51

even の省略

(L・B252ページ)

うまく訳せない時に even を補ってあげるといい構文として、以下のようなものがある。特に1.と2.は受験では頻出。

1.最上級 「(たとえ)どんなAでさえ[でも]」

(ex) (Even) The wisest man sometimes makes a mistake.

どんな賢い人でさえ、時としてミスをすることがある

2.if節, though節 「(たとえ)~だとしても[でも]」

(ex) (Even) If the sun were to rise in the west, my love would not change.

たとえ仮に太陽が西から昇っても、僕の愛は変わらないだろう

(Even) Though he is the prime minister, we intend to have him recognize our complaint.

たとえ彼が首相でも、私たちの不満を認識してもらおうつもりだ

3.after節 「(たとえ)~の後でさえ[でも]」

(ex) (Even) After I have started speaking in Japanese, some Japanese students continue to speak to me in English.

私が日本語で話し始めているのに、それでも英語で話しつづける日本人学生がいる

4.when節 「(たとえ)~の時でさえ[でも]」

(ex) The heat didn't ease (even) when the sun went down.

日が沈んだけれども、暑さは和らがなかった

Rule-52

「名詞 + S + V」

(L・B253ページ)

名詞の後ろに直接「S + V」のついた「名詞 + S + V」という構造は、

「名詞 + 関係詞 + S + V」

の「関係詞」が省略された形である(「関係詞」とは、具体的には「関係代名詞の目的格」「関係副詞」「関係代名詞の補語格」等)。訳す際には、「S + V」部分を直前の「名詞」にかけて訳すようにするといいい。

(ex)

The man	I love
[名詞]	S+V

 is you.
V C
「はなはです」

☞ I love を直前の The man にかけて訳す。
 左のように「名詞+S+V」全体を1つの
 名詞の固まりと考えてしまってもいい。

S(名)「私が愛している人」

Rule-53

副詞節中の「S + be動詞」の省略 (L・B 257ページ)

副詞節を導く従位接続詞の後ろの「主語+be動詞」は

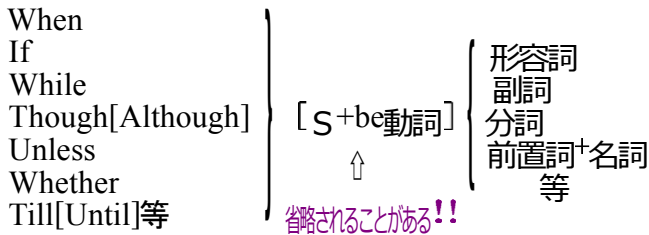
- ① その主語が、主節の主語と同一
- ② そのbe動詞の時制が、主節の時制と同じ

☞ 従位接続詞とは、and, but, or, for 以外の接続詞のこと。

場合には省略されることがある。

(ex) While walking on the street, I met an old friend of mine.
 通りを歩いていたら、古い友人の一人に会った

上の英文では、主節の主語は I なので、それと同じ I が、また主節の動詞は過去時制 (met) なので、それと同じ時制の be 動詞 (was) が、while の後ろに省略されていると判断する。⇒ While I was walking on the street, I met an ~.



このように、従位接続詞に直接「形容詞」「副詞」「分詞」「前置詞+名詞」などがくっついた構造を見かけたら、「主語+be動詞」が(従位接続詞の後ろに)省略されているのではないかと頭を働かせることが大切。

☞ ただし例外的に「when[if] necessary (必要な場合には)」のような慣用的表現では、主語が違って省略することもある。

☞ 以下の英文のように、過去と現在を対比させたような英文では、主節の動詞と副詞節中の be 動詞の時制が異なる場合も、ときにあり得る。

(ex) I am happy now though (I was) unhappy in childhood.
 子供時代は不幸だったが、今は幸せだ

☞ however などは従位接続詞ではないが、同じように節内の「主語+be動詞」が省かれることがある。

(ex) However small (they are), all efforts will count in the end.
 どんなに小さやかであれ、努力を重ねれば最後には成果が出るものだ

Rule-54

比較級での省略 (L・B 259ページ)

1. 「the+比較級 S+V~, the+比較級 S+V...:~すればするほどそれだけいっそう...」の構文で、「V」が be 動詞や become の場合、その be 動詞 (become) は省略されることが多い。

その場合は、S の後ろに be 動詞、又は become を補って訳すといい。

(ex) The larger the audience is, the better the profit (is[becomes]).
 聴衆がたくさんであればあるほど、利益は上がる

④ 「The sooner (you do it), the better (it will be):早ければ早いほどいい」のような決まり文句的なものの場合、「S+V」の部分がすべて省略されてしまうこともある。

④ またthe+比較級が3つある場合は、andのない方が前後半の切れ目と判断する。たとえば、

The+比較級 S+V~ and the+比較級 S+V~, the+比較級 S+V…

という構造の英文があったら、

The+比較級 S+V~ and the+比較級 S+V~, // the+比較級 S+V…

つまり、「~すればするほど、そして~すればするほど、それだけいっそう…」と訳せばいい。

2. 否定の原級比較や比較級の表現で、「as~」「than~」が全て省略されている場合がある。

(1) その英文の動詞が現在完了なら「今ほど」、過去完了(had+p.p.)なら「その時ほど」を補って訳すといい。

(ex) She said, "I have never been so happy."

「今ほど幸せだったことはない」と彼女は言った

⇒ 「今が一番幸せだ」と彼女は言った

(2) それ以外の時制ならば「これほど」を補って訳すといい。

(ex) Nothing could be farther from the truth.

これほど真実からかけ離れたものはない

ただし(2)の場合、「これほど」の「これ」が具体的に何を指すのかは文脈で自分で判断する。また動詞が現在完了でも(文脈上)「これほど」と訳した方がいいこともある。

Rule-55

those, others, many, some など

(L・B 261~263ページ)

1. 文中の(格詞) those の可能性。

(1) 「the+people」の代用。「~な人々」と訳す。

(ex) those chosen

☞ 「選ばれた人々」と訳す。

those raised in the country

☞ 「田舎で育った人々」と訳す。

④ those who+V~で「~する人々」は頻出。

(ex) I don't like those who have no manners. マナーが悪い人は嫌いだ

(2) 「the+既出の複数名詞」の代用。

(ex) Elephants from Africa are bigger than those from India.

アフリカ象はインド象よりも大きい =the elephants from India

2. 文中の others の可能性。

(1) 「other people」の代用。「他(の)人」と訳す。

(ex) Don't trust others. 他(の)人を信用するな

(2) 「other+既出の複数名詞」の代用。

(ex) I don't like this shirt. Show me others[=other shirts].
このシャツは好きではありません。他の(シャツ)を見せてください

3. many, few, some, any, each, all等や、数詞、分数などの後ろにpeople(又はthing(s))が省略されていることがある。

(ex) Many (people) believe in supernatural. 多くの人が超常現象を信じている
S V

ただし、前の英文中に many, few, some などが指す具体的な名詞がある場合には、people ではなくその(具体的な)名詞を後ろに補ってあげなければならない。
これについては、those、others に対する考え方と同じ。

(ex) Of the patients, some were very positive. 患者の中には前向きな人もいた
上の英文の場合には、some の後ろに patients が省かれているとみるべき。

7. その他の読解ルール

Rule-56

how のまとめ

(L・B54ページ)

1. how が導く節(つまり how節)は、

- ① 文の主要素(S・O・C) ☞ 要するに必ず「名詞節」になるということ。
- ② 前置詞・準動詞の目的語

のいずれかになる。

(ex) Tell me how you felt about it. それをどう感じたのか私に教えて
① O₁ O₂

2. how の訳し方は2タイプ。

- (1) how 単独の場合 ⇒
- ① 「どのように(な)○○か」「どうやって○○か」
 - ② 「○○の仕方、やり方、様子、(あり)様、(実際)状」
☞ 要するにhowの後に直接 S+Vの構造が続く場合。 「(…である)ということ(の次第)」
 - ③ 「どうして」「なぜ」

(ex) Nobody remembers how she was dressed.

誰も彼女がどんな服装をしていたか覚えていない
Could you tell me how I can get to Tokyo Tower?

東京タワーにはどのように行ったらよいか(行き方)を教えてください
That was how it happened. そのようにしてそれは起こったのです

☞ This[That] is how S+V~は、「こ[そ]んなふう(にして)~」と訳すとい。

That's how it is. そういう実状です

She told me how[=that] she had read about it in a morning paper.

彼女はそれを朝刊で読んだと話してくれた

☞ このように接続詞のthatで言い換え可能なhowもある。

I can't see how she sold her engagement ring.

彼女がどうして婚約指輪を売ったのか理解できない

Rule-59

文節頭の Whether節の見極め法 (L・B195ページ)

1. Whether節の直後に「(V)」があれば、そのWhether節を(S)と判断し「～かどうか」と訳す。

(ex) Whether it was true is still an open question.
 (S) (V)

それが本当かどうかは依然として未解決の問題です

2. Whether節の直後に「(S)+(V)(主節)」があれば、そのWhether節は副詞節。「～であろうとなかろうと」と訳す。

(ex) Whether you like it or not, you must do it.
 [副詞節] (S) (V)

好むと好まざるとにかかわらず、君はそれをしなくてはならない

⚠ただし、「Whether節 (S)+(V)」の(目的語を文頭に置いて強調した)構文もあるので注意。

(ex) Whether he will go there I don't know. ⚠ knowの目的語であるwhether節が文頭に飛び出した「O+S+V」の構文。

彼がそこに行くかどうかどうか、私にはわかりません

Rule-60

文節頭の Who[What/Which]+ever節の見極め法

(L・B197ページ)

1. Who[What/Which]+ever節の直後に「(V)」があれば、Who[What/Which]+ever節は(S)と判断し、「～するものは誰/何/どちらでも(みな)」と訳す。要するに最後を「～でも(みな)」でまとめてしまえばいい。

(ex) Whoever finds it may keep it.
 (S) (V)

それを見つけた者は誰でもそれを保持していてもいい

Whatever he needed was given by his parents.

(S) (V)
 彼が必要なものは何でも、両親によって与えられた

2. Who[What/Which]+ever節の後ろに「(S)+(V)(主節)」があれば、Who[What/Which]+ever節は副詞節と判断する。訳し方は「たとえ誰/何/どちらが[を]～しても」。要するに最初と最後を「たとえ～しても」でまとめてしまえばいい。

(ex) Whoever else objects, I am going to do it.
 (S) (V) O

たとえ他の誰が反対しようとも、私はそれをやります

Whichever book you borrow, you must return it by Friday.

(S) (V) O
 たとえどちらの本を借りても、金曜日までにはそれを返さなくてはなりません

同格のまとめ (L・B202~207ページ)

1. 同格とは、「名詞・名詞」という形で、後ろの名詞が前の名詞(の内容)を補足的に説明したり、言い換えたりする用法。つまり内容的には両者は「抽象と具体」の「イコール関係」。

(ex) Nancy, the girl who sits next to me in class, is very cute.

ナンシー、つまり授業で私の隣に座っている女の子はとてもかわいい

⊕上記のような「カンマ(,)」以外に、同格表現の直前には「コロン(:)」「セミコロン(;)」 「ダッシュ(—)」 「that is (to say)」 「namely」 「(,) or」 などが置かれることが多い。これらは「即ち」「つまり」などと訳すといひ。

⊕上記以外の同格表現を導く語句・記号に以下のようなものがある。

as follows (次のような)

chiefly, mainly, mostly (主として)

for example, for instance, something along the following lines, to cite a case,

like (たとえば)

especially, in particular, notably, particularly (特に)

in other words (言い換えれば)

or rather, (more) correctly (正確に言えば、(より)正確には)

i.e., viz., to wit, e.g. ⊕特に書き言葉で改まった言い方に用いる。

2. 実際の英文中では「名詞 + 名詞」以外に様々な同格のパターンがある。

⊕(1)(2)(3)タイプの同格は、「という」という訳をつけるといひ。

(1) 「名詞 + 名詞節(that節・whether節[〜かどうか]・疑問詞節など)」の同格。

(ex) He heard the news that his team had won.

彼は彼のチームが勝ったという知らせを聞いた

⊕疑問詞節を直後に取るのは、大半は「問題(question等)」系の名詞。

The question remains whether he knew the secret (or not).

彼がその秘密を知っていたかどうかという疑問が残る

⊕The questionとwhether節は同格関係。

(2) 「A(名詞) + of + B(名詞): BというA」の同格。

「A(名詞) + of + doing~: ~するというA」の同格。

(ex) the news of the team's victory チーム勝利という知らせ

his habit of smoking 喫煙という彼の習慣

(3) 「名詞 + to do[願]~」の同格。

(ex) The ambition to succeed in the world is natural for young people.

世の中で成功するという野望は若者には当然のものだ

(4) 「文 + 名詞」の同格。

(ex) Ted married a young lady recently — the talk of this neighborhood.

テッドは最近若い女性と結婚した — このかわいいではその話でもちきりだ

このタイプの同格の場合、「名詞」の前に「接続詞 + it is[was]」を補ってみるといい。上例も and it is を the talk の前に補ってみるといい。

⊕他と異なり、このタイプは「(前半の)S+V=具体的」「(後半の)名詞=抽象的」の意味関係になる。

それから補う接続詞は、「そして(=and)」「しかし(=but)」「なぜなら(=because)」など。

(5) 「副詞(句・節) + 副詞(句・節)」。

(ex) Now, We are here in America. 今や、私達はこちらアメリカにいる
(副) (副)

(6) 「節[句]+節[句]」の同格。 ㊦並列関係との違いは、同格となる両者には「抽象と具体」の(イコール)関係が成立している点。

(ex) Her life gave him the courage to hope that he didn't have to obey his parents, that he could create his own future.

彼女の人生は、彼は両親に従う必要はないということ、つまり彼は自分の未来を切り開くことができるということを望む勇気を与えてくれた

上の英文では、下線部の that 節が、前の that 節を言い換える同格節となっている。
㊦節と節同士だけでなく、「to不定詞+to不定詞」といった、句と句同士の同格もある。

Rule-62

カンマ(,)の用法のまとめ

1.並列のカンマ

(L・B 212~214ページ)

(ex) To study hard, to play a lot are important. ㊦ A, B のAとBが並列関係なのか同格関係なのかは、
よく学びよく遊ぶことが大切だ A=B なら同格、A≠B なら並列とみなすらしい。

上の英文では To study hard と to play a lot がカンマにより並列され、共に㊦になっている。

2.挿入のカンマ

(ex) You should, if you want some advice, go to his office alone.
もし何らかの忠告が欲しければ、彼の事務所に1人で行くべきだ

上の英文では if~advice までがカンマにはさまれて挿入されている。

3.その他のカンマ

(1) 副詞(句・節)と主節とを区切るカンマ。

(ex) To tell the truth, I quit my job. 実を言うと、仕事を辞めたんだ

(2) 「同格」のカンマ。「つまり」「すなわち」と訳す。

(ex) Our teacher, Henry Evans, is from Canada.
うちの先生の(つまり)ヘンリー・エバンス先生は、カナダ出身です

(3) 関係詞の継続用法。 ㊦関係詞節の前にカンマが打たれる用法。

① 「+関係代名詞」。
1. **カンマ(,)で一旦区切る**(関係詞節を前の先行詞にかけて訳さない)。 ㊦ただし関係詞節がカンマによって挿入されている場合には、
普通以前の先行詞に(その関係詞節を)かけて訳していいこともある。

2. **カンマ(,)を接続詞(and, but, because, though)とみなして訳す。**
㊦どの接続詞とみなすかは前後の意味関係で自分で判断する。

3. **関係代名詞は、単なる(直前の先行詞を指す)代名詞とみなして(あるいは先行詞をそこに代入して)訳し下げる。**
(ex) I love my car, whose color is my favorite.

㊦上の英文は、上記のルールを用いて、まず I love my car までを「僕は自分の車が好きだ」と訳し、カンマを because に置き換えてみる。すると後半は「なぜならその(車)の色が僕のお気に入りだからだ」と訳せる。

4. 「,+which」は前の英文全部(又はその一部)を先行詞にとりこともできる。

(ex) All the students respect Mr. Black, which I find natural.

学生たちはみなブラック先生を尊敬しているが、私はそれは当然だと思う

會上の英文では which の先行詞は All~Mr. Black の全部。

② 「,+関係副詞」。

1. 「, where」は「接続詞(and/but/because)+there(そこで)」と考える。

(ex) He went to Paris, where he first met her.

彼はパリに行き、そしてそこで初めて彼女に会った
=and there

2. 「, when」は「接続詞(and/but/because)+then(その時)」と考える。

(ex) I was about to leave, when there was a knock on the door.

私はちょうど出かけようとしていた。とするとそのときドアをノックする音が聞こえた
=and then

會カンマ(,)をどの接続詞の代用とみなすかについては、and/but/because のいずれかで考えてみる。最終的にどれで訳すかは、文脈判断となる。

(4)主語(主部)が長いことを詫びるカンマ。

(ex) A man arrested by the police last week for robbing a convenience store,

S ↑] P.P.

died in jail.
V

コンビ二強盗のかどで先週警察に逮捕された男が、拘留所で死亡した

會上例ではSはA man なのだが、それを修飾する arrested~store 含めた主部が長すぎるので、V(died)の手前でカンマが打たれている。

Rule-63

セミコロン(;)の用法のまとめ

(L・B217ページ)

セミコロンは、接続詞(and, but, because, though など)の代用として用いられる。

(ex) John was elected captain of the team; he was very smart.

ジョンはチームのキャプテンに選ばれた。なぜなら彼は頭がよかったからだ

文中のセミコロンが、どの接続詞の代用となっているかは、前後関係から自分で判断する。

會 1. ; and、; but、; however、; therefore などといった使い方もある。

2. (直前の内容を言い換える) 同格記号として用いられることもある。

(ex) There was a lot of work I had to do; washing the dishes, cleaning the room and looking after my little brother.

私にはやらなければならぬたくさんの仕事があった。即ち皿洗い(に)部屋の掃除、そして小さな弟の世話だ

Rule-64

コロン(:)の用法のまとめ (L・B217ページ)

コロンは、その後に直前の内容を言い換えたり説明し直したりする内容が来ることを予告する記号(つまり、同格記号)であると考えよ! 「つまり」「すなわち」と訳せばいい。

(ex) This shortcake has three layers[層]: red, white and brown.
このショートケーキは三層になっている。つまり、赤、白、茶の三色だ

Rule-65

ダッシュ(-)の用法のまとめ (L・B217ページ)

ダッシュの用法は、単独で用いられるときは、コロンとほぼ同じだが、コロンと異なるのは、2本セットで用いられ、語句や節を挿入させる際にも用いられる。

(ex) John — the only son of the minister — was deeply interested in the international situation.

ジョンはその大臣の一人息子だったが、国際情勢に非常に関心を持っていた
挿入用法のダッシュではさまれた部分は、文の主要素にはならない(Rule-5の4を参照せよ)。特に挿入部分が名詞の場合は、(前と)同格の可能性が高い。

Rule-66

文頭のOfの意味の可能性 (L・B215ページ)

1. 「〜について(=about)」

(ex) Of the case which happened yesterday, I have several questions.
昨日起きた事件について、私はいくつかの疑問を持っている

2. 「〜の中で、うちで(=among)」 ☞ 2の可能性が最も高い!

(ex) Of the participants, he had the most positive attitude.
参加者の中で、彼は最も積極的な態度をとった

3. 「of+抽象名詞」が文頭に飛び出した倒置構文。

(ex) Of importance is to acquire knowledge. 大切なのは知識を身につけることだ

【角語訳】 「of+抽象名詞」は形容詞化する、というルールがある。つまり of importance は形容詞のimportantと同じ意味。その「of+抽象名詞」が文頭に飛び出したCVS型の倒置構文が上記の例文。下記のように言い換えることができる。

⇒ To acquire knowledge is important.
S V C

Rule-67

冠詞・所有格と名詞の間に置かれた語句は、形容詞として直後の名詞を修飾する働きしかない。

冠詞(a.the) } + □ + 名詞 ☞ □は100%、形容詞(の働きをする)。直後の
所有格 } 名詞を修飾する。
(L・B249ページ)

(ex) He is my only son. 彼は私のひとり息子です

only には「形容詞」「副詞」両方の品詞があるが、上の英文の only は所有格 (my) と名詞 (son) の間にはさまれているので「形容詞」だとわかる。形容詞の only の意味は「唯一の」。

會特に形容詞の only は、「冠詞[所有格]+only+名詞」という形でしか用いない。

ちなみに下の英文の only は副詞である。

(ex) He is only a child. 彼はほんの子供にすぎない

その理由は「冠詞・所有格よりも左側にあるものが、その冠詞・所有格を飛び越えて右側の名詞を修飾することはない*」から。上の英文の only はそうすると(冠詞の a の右側にある child は修飾できないので)動詞の is を修飾せざるを得ず、したがって「副詞」だと分かる。副詞の only の意味は「ただ～だけ(にすぎない)」「ほんの～」「～のみ」「～してはじめて」。

會例外は all, half, double, both, such。

(ex) all the people 全ての人たち double the sum 倍額 half an hour 30分
such a man そのような人 both the girls 両方の女の子

Rule-68

形容詞の意味

(L・B16ページ)

英文中の形容詞の80%は主観的判断(具体的には「良(=good型)・悪(=bad型)又は「程度」)を表している。

(ex) We are proficient at talking about ourselves, but are bad at listening to others.

我々は自分のことについて話をするのは得意だが、人の話を聞くのは下手だ

上の英文では proficient という形容詞が難しいが、but の右側で、それに対応しているのが bad なので (but によって結ばれたもの同士は「逆」の意味関係になるので)、proficient は「good型」の形容詞と類推できる。つまり、「be good at ~ing: ~するのが得意だ(上手だ)」と読み直してしまえばいい。実際、proficient は「上手な、堪能な」という意味で、good に置き換えても全く問題ない。

Rule-69

連鎖関係詞節

(L・B251ページ)

連鎖関係詞節とは、簡単に言うと先行詞の後ろの関係詞節内が

① 「S+Vt V～」

② 「S+Vt S+V～」

☞ 「Vt」には「言う(say)」「思う(think, believe, know, suppose)」型の動詞がくることが多い。

の形をしているものを言う。

(ex) I saw a woman who I thought was a friend of my mother's.

主 S Vt V

このような連鎖関係詞節のうまい訳出法は、「S+Vt」の部分をついたん()でくくってしまい、それを(関係)節内の和訳の最後にもってくることである。上の例文でも、関係詞節内は「母の友人だと(私が)思った」と、「S+Vt」にあたる I thought を(関係)節内の和訳の最後にもってくるといういい日本語になる。英文全体は「母の友人だと(私が)思った女性を私は見かけた」となる。

會連鎖関係詞節を導く関係代名詞は省略されることがある。その場合、「名詞+S+Vt V～」 「名詞+S+Vt S+V～」という構造になる。

補足ルール

Rule-1

同格の that

名詞 + that S + V ~

という形で、直前の名詞の内容を具体的に説明し直すthat節がある。このような節を導く that のことを、(内容的に同じことを言っているから)「同格」の that という。訳し方は、「~というA(名詞)」。この that は、品詞としては「接続詞」である。したがって、直後には「完全な文」が続く(関係代名詞の that の直後には「不完全な文」が続く)。

(ex) He heard the news that his team had won.
名詞 ↑ 彼は彼のチームが勝ったという知らせを聞いた

The suggestion was made that English teaching should be improved.
名詞 ↑ 英語教育を改善しようという提案が出された

◎上例のように、名詞とthat節が離ればなれになる場合もある。しかもこのパターンは和訳問題でも頻出!要注意。

このような同格のthat節を後にとる名詞は決まっている。

①「思考・感情」「認識」「発言」を表す名詞 ◎要するに「言う」「思う」「知る(分かる)」から派生した名詞。
(ex) thought「考え」 feeling「感情」 notion「意見・考え」 hope「希望」 belief「信念」
knowledge「知識」 impression「印象」 argument「主張」 idea「考え」

②「事実(証拠)、事態」「情報」「機会」「可能性」などを表す名詞
(ex) fact「事実」 opportunity「チャンス」 point「点」 evidence「証拠」 rumor「噂」
chance「チャンス」 possibility「可能性」 proof「証拠」 assumption「前提」 news「知らせ」

だから文中で「思考」「認識」「発言」「事実(証拠・情報)」「機会・可能性」「要求・命令・提案」を表す名詞の(直)後に that節を発見したら、まず「同格の that」なのではないかと考えてみる。最終的な確認は、that の直後に「完全な文」がきているかどうか(「不完全な文」がきていればその thatは関係代名詞になる)で判断する(Rule-9を参照)。

Rule-2

無生物主語構文の上手な訳し方

(1)主語(無生物)は副詞的に訳出する。具体的には以下のいずれかの意味で和訳するとよい。

- ①原因(理由・手段)…「~なので、~により、~のおかげで」
- ②条件…「もし~なら」
- ③譲歩…「~けれど、(たとえ)~としても」
- ④時…「~の時」

◎このうち「原因」「条件」で訳出するとよい場合が最も多い。

(2)目的語(または「人」)を和訳の主語にして訳出する。

(3)動詞も直訳するより、(新しい)和訳の主語に応じて、文脈に則した訳語を適宜(つまり自分の判断で)当てはめる。

◎動詞は自動詞的に、あるいは受け身的に和訳すると良いことも多い。

「A of B」が通常の「BのA」では上手く訳せないときの訳出の仕方。

(1)主格(関係)の of.

「A of B」の「A」の方を「自動詞化」又は「形容詞化」できる場合がある。その場合、「B」がその「(自動詞・形容詞化したAの)主語」になる。そして両者は主語と述語の意味関係(「BはAする[である・になる]」)になる。
このような意味関係を導く of のことを、主格(関係)の of という。

(ex) the existence of ghouls

「A of B」の「A」にあたる existence は「存在する」という意味の exist に換えることができる、つまり自動詞化することができる。その場合「B」にあたる ghouls が主語になって、全体を以下のように書き換えることができる。

⇒ Ghouls exist.
 (S) (V)

「幽霊が存在する」。したがって the existence of ghouls は「幽霊が存在すること」と訳したらいいとわかる。終止形に「こと・もの」をつけて名詞の意味にするのだ。今度は「A」を形容詞化できる例。

(ex) the popularity of the movie

「A of B」の「A」にあたる popularity は「人気がある」という意味の popular に、つまり形容詞化することができる。その場合も「B」にあたる the movie がその主語になって、be動詞をはさんで全体を以下のように書き換えることができる。

⇒ The movie is[was] popular.
 (S) (形)

「その映画は人気がある[あった]」。したがって the popularity of the movie は「その映画は人気がある[あった]ということ」と訳せばいい(もちろんこの場合には「その映画の人気」と直訳しても十分ではあるが)。

(2)目的格(関係)の of.

「A of B」の「A」の方を、今度は「他動詞化」できる場合がある。その場合「B」がその「目的語」になる。つまり「他動詞+目的語」の形で書き換えられる。このような of のことを目的格(関係)の of という。

(ex) the education of children

「A of B」の「A」にあたる education は「～を教育する」という意味の educate に換えることができる、つまり他動詞化することができる。その場合「B」にあたる children はその目的語になって、全体を以下のように書き換えることができる。

⇒ educate children
 (V) (O)

こうして「子供を教育すること」、つまり「児童教育」と訳したらいいとわかる。ちなみに「所有格 A of B」は、所有格を主語(S)、Aを他動詞(V)、Bを目的語(O)で書き換えてみるといい。

(ex) his discovery of the island

そうすると上例は He discovered the island. と読み換え「彼がその島を発見した」と訳せる。
最終的な和訳は「彼がその島を発見したこと」とまとめればいい。

ただし注意したいのは「A」に「自動詞化」することも「他動詞化」することもできるような名詞がくることがあるということ。

(ex) the love of mother

「A」にあたる love を自動詞化するとみれば「Mother loves:母が愛する⇨母の愛」。他動詞化すると見れば「love mother:母を愛する⇨母への(に対する)愛」。可能性としてどちらもあり得る(ただし「母への愛」と訳すことが多い)。このような場合は、前後の文脈でどちらにするかを判断する。

(3)同格(関係)の of。

これは後ろのB(又はdoing~)が、前のAの内容を説明する(言い換える)もので、「A of B/doing~」が「A=B」「A=doing~」の意味関係になるのが特徴。

☞「A=抽象的」、「B/doing~=具体的」のイコール関係になる。

同格の of のつくる「A of B/doing~」は、B/doing~の後に「という」を付け足し、「B(~する)というA」と訳すといい。

(ex) the news of the team's victory チーム勝利という知らせ

his habit of smoking 喫煙という彼の習慣

上例のように「A of doing~」という形に文中で出会ったら、「~するというA」型の同格と見なしてほとんどかまわない。

(4)その他。

①「A of+抽象名詞」型。

「『of+抽象名詞』は形容詞化する」というルールがある。例えば of importance は、形容詞の important と同じ。したがって

a man of importance

は an important man、つまり「重要な人」という意味になる。

a machine of great use とても役立つ機械

=a very useful machine

a man of sense 分別のある人

=a sensible man

a man of courage 勇気のある人

=a courageous man

②「BについてのA」。

(ex) knowledge of the current situation 現在の状況についての知識[認識]
understanding[comprehension] of world economy 世界経済についての理解
study of law 法律(についての)研究
criticism of Japan 日本についての批判

③「Bのうち(中)のA」。

(ex) three of the girls 少女たちのうちの3人

④「(a/the)+名詞+of」で一つの形容詞の働きをするもの。

☞詳細は76ページを参照せよ。

Rule-4

「所有」の意味にならない所有格の上手な訳し方。

(1)所有格の後ろの名詞を自動詞化・形容詞化できる

⇒ 所有格の部分の主語にして「S+V」の形で書き換えてみる。

☞その名詞を形容詞化できる場合は、be動詞をはさんで「S+V」の形に書き換えてみる。

- (ex) my mother's death 「母の死」
 ☞ My mother dies[d](自). 母が死ぬ[死んだ]こと
- her father's consent 「彼女の父の同意」
 ☞ Her father consents[ed](自). 彼女の父が同意する[した]こと
- the boy's application 「その少年の応募」
 ☞ The boy applies[applied](自). その少年が応募する[した]こと
- the man's innocence 「その人の無実」
 ☞ The man is[was] innocent(形). その人は無実だ[った]ということ
- the teacher's absence 「その先生の欠席」
 ☞ The teacher is[was] absent(形). その先生が欠席する[した]こと
 [不在である[だった]こと]

(2) 所有格の後ろの名詞を他動詞化できる

⇒ 所有格の部分为目的語にして「他動詞+目的語」の形で書き換えてみる。

- (ex) the criminal's release 「その犯人の解放」
 ☞ release[d] the criminal その犯人を解放する[した]こと
- the child's rescue 「その子供の救出」
 ☞ rescue[d] the child その子供を救出する[した]こと
- his critics 「彼の批判者」
 ☞ criticize[d] him 彼を批判する[した]人たち

(3) 「所有格+A+of+B」型

⇒ 「所有格 ⇨ ㊟」「A ⇨ ㊿」「B ⇨ O」にして書き換えてみる。

- (ex) his discovery of the theory[論] ☞ He discovered the theory.
 S V O
 彼がその理論を発見したこと

☞ 上例のように、末尾に「こと」「もの」をつけて、最終的に名詞的にまとめる。

Rule-5

抽象(的)な名詞の訳し方。

(1) 動詞化できる場合には「動詞化」、形容詞化できる場合には「形容詞化」して訳す。

- (ex) Japan's total dependence on U.S. high technology can cause extreme danger to the future of our country.

dependence:依存 extreme:はなはだしい

上の英文の主語の Japan's total dependence (on U.S. high technology) だが、「日本のアメリカのハイテク技術への完全なる依存」と訳したのではなんともさまにならない。そこで dependence という抽象名詞が depend という動詞に変化させられることに着目し、以下のように主語全体を書き換えてみる。

- ⇨ Japan depends totally on U.S. high technology.
 S V

total は depend という動詞を修飾することになるので、副詞の totally に変え、depend の後ろに置く。訳は「日本は(が)アメリカのハイテク技術に完全に依存している」となる。主語をこのように日本語に訳すわけです。そうするとあとは問題文の動詞の cause は「～を引き起こす・もたらす」だから、全体は、「日本が

アメリカのハイテク技術に完全に依存していることが将来のわが国にはなほだしい危険をもたらす可能性がある」となり、自然な日本語に仕上がる。

(ex) I felt uneasy at the mere thought of my wife's anger about my forgetfulness.

uneasy:不安な mere:単なる、たったの forgetfulness:ものわすれ

I felt uneasy が「私は不安を感じた」と訳すのはいいとして、問題はまず the mere thought。「たったの考え」では意味不明。そこで thought を動詞の think として訳を考えてみる。at the mere thought of ~ を「~のことを考えただけで」と訳す(同じ要領でたとえば at the mere sight of ~ は「~を見ただけで」と訳せばいい)。次に anger と forgetfulness だが、これらはそれぞれ angry, forgetful と形容詞化できる。そこで以下のように文の形に直してみる。

my wife's anger ⇨ My wife was angry. 妻が腹を立てる

my forgetfulness ⇨ I was forgetful. 私が(ものを)忘れっぽい

これをつなげると問題文全体は「私がものを忘れっぽいことに妻が腹を立てるのを考えただけで不安になった」となり、自然な和訳ができあがる。

(2)抽象名詞には受動態もある。

次の英文の意味がわかるだろうか？

Vincent van Gogh had no country-wide recognition in France in his day.

Vincent van Gogh:ゴッホ country-wide:全国的な recognition:認識

問題は抽象名詞の recognition。辞書を開くと「認識」と出ている。動詞形は recognize で「認識する」。動詞的に訳すといくとすると、「全国的な認識をすることは全くなかった」となるのだろうか？しかしそれでは意味が成り立たない。実は、抽象名詞は「~すること」という能動的な意味はもちろん、「~されること」という受動的な意味も持ちうるのだ(どちらの意味になるかは文脈次第)。

上例の recognition がまさにそれで「認識されること(=being recognized)」という意味で使われていた。動詞的に上の英文を書き直せば以下ようになる。

☞ Vincent van Gogh was not recognized country-wide at all in France in his day.

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホは当時フランスでは全国的にまったく認められていなかった

Rule-6

名詞にかかる形容詞[分詞]をうまく訳せないときの対処法。

(1)主語と述語の関係で言い換える。

(ex) There is a growing awareness that we should do something about global warming.

上例の和訳で問題となるのは「growing awareness」。「成長している意識」「高まっている意識」では日本語にならない。このような和訳しづらい「形容詞[分詞]+名詞」をうまく処理するテクニックは、「形容詞[分詞]+名詞」の部分を(語順をひっくり返してbe動詞を加えて)「主語と述語」の形で書き直してしまうこと。たとえば、The kind girl(親切な女の子)は The girl is kind.(その女の子は親切だ)と書き換えられる。

The kind girl ⇨ The girl is kind.
(形) (名) (主) (述)

同じ要領で上例も

An awareness [that we should do something about ~] is growing.
(主) ↑ (述)

と書き直せば「地球温暖化に対して何かすべきだという意識が高まって(きて)いる」とカンタンに訳せる。

(2)品詞を転換させる。☞「形容詞[分詞]」の方をかえて名詞的に、「名詞」の方をかえて形容詞的に訳出する!

(ex) rising temperature

「上昇している気温」では意味がよくわからない。この場合、名詞の temperature の方を形容詞的に、分詞の rising の方を名詞的に訳してみるといい。すると「気温の上昇」とうまく訳せる。

Rule-7

否定語の訳出に困ったときの対処法。

(1)英語の否定語は、なるべく

- ①述語(動詞など)部分を否定する
- ②又は否定語を述語部分にもってくる、否定語を述語にする

ように和訳するといふことが多い。

(ex) They did little to help the children.
彼らは、その子達を助けるためにほとんど何もしなかった
Little is known about what happened to them.
彼らにどんなことが起きたかはほとんど知られていない
[彼らに何が起きたかについて、わかっていることはほとんどない]
There is little danger of an earthquake. 地震の心配はほとんどない
I have few friends in this town. この町には友だちがほとんどいない
(Very) Few of the proposals were ultimately accepted.
いくつもの提案のうち最終的に採用されたものはほとんどなかった
No work was done that day. その日は仕事が全然なされなかった

(2)形容詞・副詞を修飾する less は、not と同じと見ていい。

(ex) It was less cold there. そこは(他の場所ほど)寒くなかった

(3)否定語は、基本的に自身より右側を否定する。

(ex) Now I am an adult, I am no longer too shy to talk to a woman.
今はもう大人なので、女性に話しかけられないほど内気ということはない

Rule-8

部分否定について。

部分否定とは「～というわけではない」と訳すもののことだが、どういう場合にこれが起きるかということがわかっていれば、部分否定の表現をすべて暗記する必要はない。では、それはどういう場合かというと、「例外がない[例外を認めない]ような形容詞・副詞(「すべて」「完全に」「いつも」「必ず」等)に not がついたとき」に起きる(つまりその場合に「～というわけではない」という意味がつけ加わる)のだ。

①not+all 「全て～というわけではない」

②nct+every	「	”	」
③nct+both	「両方～というわけではない」		電卓なみに「両方(とも)～ない」は <u>neither</u>
④nct+always	「いつも～というわけではない」		
⑤nct+necessarily	「必ずしも～というわけではない」		
⑥nct+altogether	「まったく～というわけではない」		
⑦nct+entirely	「	”	」
⑧nct+wholly	「	”	」
⑨nct+quite	「	”	」

[その他] absolutely「完全に」 exactly「正確に」 each「それぞれの」 whole「全体の」
 completely「完全に」 generally「たいてい」

また nct very や nct so も「そんなに[あまり]～ない」という意味の部分否定になる。

Rule-9

否定語を含まない否定表現。

①anything but ～「全く～ない」

(ex) The man was anything but a gentleman.
 その男は全く紳士なんかではなかった

②far from ～「全く～ない」

(ex) She is far from (being) satisfied with the result.
 彼女はその結果には全く満足していない

③know better than to do[彫]～「～するほどバカではない」

(ex) I know better than to tell the truth easily.
 俺は簡単に本当のことを言うほど馬鹿じゃないよ

④free from ～「～がない」

(ex) The plan is free from danger. その計画には全く危険がない

《「far from A:全くAではない」と「free from A:Aがない」の見分け方》

④far from A は「Aから遠い」という意味から転じて「Aからはほど遠い→全くAではない」という否定の意味を表す。not～at all で書き換えられる。

far from の後には「名詞(の仲間)」以外に「形容詞」がこれる。

(ex) He is far from (being) happy. 彼は全く幸せではない

free from の後には「不安・心配・苦痛など」(つまり「嫌なもの、あって欲しくないもの」)を表す名詞が入る。

(ex) His composition is free from mistakes. 彼の作文にはミスがない

⑤the last (person/thingなど) to do[彫]～/関係詞節～「決して～ない」

(ex) He is the last man to betray you. 彼は決して君を裏切りはしない
 Tom was the last person (that) I expected to see there.
 そこでトムに会うなんて全く予想外だった

⑥fail to do[彫]～「1.～しない 2.～できない」

(ex) She failed to appear. 彼女は現われなかった
 =She didn't appear.

I fail to see the reason. その理由が僕には分からない

=I cannot see[=understand] the reason.

⑦beyond ~ 「～を超越している」 = above ~

(ex) What he did is beyond [=above] my understanding.
=What he did is more than I can understand.

彼のしたことは私の理解を超越している[越えている]

⇒ 彼のやったことは理解できない

She is above [=beyond] telling a lie.

=She never tells a lie. 彼女は嘘をつくような次元を超越している

⇒ 彼女は決して嘘をつくような人ではない

④beyond [above] ~ の元々の意味は「～を超越している」。そこから「～の力が及ばない」、
「(非難・賞賛等)を超越している」という意味が出てきた。more than S+V ~ で書き換えられる。

⑧remain to do [原形] ~ 「いまだ～していない」 ⑤「～するためにまだ残っている」が直訳。

=be [have] yet do [原形] ~

(ex) Most of the task is completed, but a few things remain to be done.

その仕事はほとんど完成したが、まだ少ししなければならぬことがある

He is [has] yet to know the truth. 彼はまだ真実を知っていない

⑨修辞疑問文。

形は疑問文なのに、内容は疑問文ではないという英文がある。これを修辞疑問という。漢文でいうところの「反語表現」のことである。

(ex) 「やつが負けるなんてことがあるだろうか(いやない)」

(ex) Who knows what will become of the world?

この世界がどうなるかなんて誰が知っていようか(いや誰も知らない)

Does it matter?

それは重要だろうか(いや重要ではない) ⇒ そんなことかまうもんか

Rule-10

進行形の訳出の仕方。

①「～している(最中だ)」という非完結的な継続

②「～しつつある」「～しかかっている」という完結に向けての進行
④変化を表す動詞や到達への接近、瞬間的に終わる動作を表す動詞に多い。

③「繰り返し～している」という反復
④頻度の副詞(always など)を伴うことが多い。

Rule-11

「一般の人」を表す one, we, you, they の対処法。

①「我々・私達」「人(々)」「自ら・自分」などと訳す。

(ex) One must do one's duty. 人は自らの義務を果たさなければならない
We are not bad in nature. 人は生まれつき悪人なのではない

②訳さない。

(ex) Unless you cultivate your land, you can't get good crops.

土地を耕さなければ、よい作物は得られない

It is easy to lose one's way in the city. 都会では道に迷いやすい

実際の英文の訳出では(特に one, we, you などが主語の場合)「訳さない」方がすっきりとしたい訳になることが多い。

なお、噂とか限定された地域に用いられる they は、どんな場合でも訳出さない。

(ex) They say that Jenny will marry. ジェニーは結婚するといううわさだ
What language do they speak in Canada? カナダでは何語を話すのですか
また they は「(店・事務所・学校などの特に明示されない)関係者(たち)」の意味で用いられることがあるが、この場合も普通訳出しない。

(ex) They sell good shirts at that store. あの店ではよいシャツを売っている
ときに「世間(の人々)」「当局」という意味で訳出することもある。

(ex) Whatever they say, I'll finish it.
世間の人がなんと言おうと、私はそれをやりとげます
The newspaper says they arrested the politician last night.
新聞によれば当局はその政治家を昨夜逮捕したそうだ

Rule-12

文修飾の副詞の上手な訳出の仕方。

- ① Obviously, he was one of the people who formed the conspiracy.
- ② Jim reasonably refused their offer.

上例のような文頭で主節とはカンマで区切られた副詞 (①) や、修飾している語句が一見よくわからないような副詞 (②) は、文全体にかかっているのではないかと判断する。そして、これらの副詞のうまい訳出法は、それを形容詞化し文全体を仮主語構文にしまうこと。上例の英文も、以下のように書き換えると訳しやすくな。

① → It was obvious that he was one of the people who formed the~.
(形)

② → It was reasonable that Jim refused their offer.
(形)

このように書き換えれば①は「彼がその陰謀を企てた人たちのうちの一人だということとは明らかだった」、②は「ジムが彼らの申し出を断ったのも無理はない(もっともだ)」となり、先程より格段に日本語にしやすく、またらしくなる。

Rule-13

比較で大切なこと。

(1)省かれた部分を補って訳す。

原級比較や比較級において than 以下、(so[as] ~as の後半の)as 以下が省かれてしまっていることがある。理由は、(それについては既に述べられていたり、また社会的常識や文脈から)わかりきっているからなのだが、和訳の際には、その省かれている than 以下、as 以下が何なのかを(たとえ実際には和訳に出さなくても)意識して訳すことが大切。

(ex) My grandfather is much better this morning.

上の英文の場合、「祖父は今朝は、ずっと具合が良くなりました」と訳せる。この内容から「昨日[昨夜]よりも(than yesterday[last night])」あたりが省かれているのではないかと類推するのだ。

會特に否定の原級比較・比較級で as以下、than以下が省かれた場合の対処法については Rule-54 を参照よ。

(2)強調の as~as.

「as[so] ~ as A」の「A」の部分に「時」「数」「量」「程度」などを表す語句があった場合、as[so]~as は、「同じくらい」という意味ではなく、その「時」「数」「量」「程度」がいかにか「多い[少ない]」「早い[遅い]」「はなはだしい」のかを強調する意味で使われていることが多い。

①as[so] early as A[時・時代など]「早くもAには」

(ex) The scientist discovered it as early as the 15th century.
その科学者は早くも15世紀にそれを発見していた

②as[so] late as A[時・時代など]「Aになってもまだ」

(ex) The custom remained[残っていた] until as late as the 19th century.
その習慣は19世紀になってもまだ残っていた

③as[so] recently as A[時・時代など]「ついAのことだ」

(ex) The earthquake in Mexico happened as recently as last year.
メキシコでその地震が起きたのはつい去年のことだ

④as[so] many[much] as A[数・量・金額]「Aほどもたくさん」

(ex) He has as many as 1,000 comic books. 彼はマンガを1,000冊も持っている
He has as much as 1,000 dollars in his wallet[財布].
彼は財布の中に1,000ドルも持っている

Rule-14

if節のない仮定法に注意。

A close friend would not say such a thing to you.

この英文、if節が見当たらないが、助動詞の過去形を使っている点から、仮定法ではないかと判断できる(もちろんwouldには「過去の習慣」や「過去の意志」を表す用法もあるが、そう考えて訳しても意味不明になってしまう)。この英文は、主語になっている名詞(a close friend)が、if節の代わりをしているのだ。つまりこの英文の直訳は「親友が君にそんなことを言いはしないだろう」だが、これは「もし彼[彼女]が親友であるなら、君にそんなことを言いはしないだろう」と表現し直すことが可能だ。

=If he[she] were a close friend, he[she] would not say such a thing to you.

したがって英文中において、if節は見当たらないないが

①現在の内容を述べている中に、突然「助動詞の過去形+V【彫】～」が現れた

②過去の内容を述べている中に、突然「助動詞の過去形+have+p.p.～」が現れた

ら、仮定法ではと判断し、if節にあたる内容が、文中のどこかにもぐり込んでいると考えること。そして、if節の代用をしていると思われる語句を見つけたら、それを和訳の際にはif節のように訳出するとい訳になる。

(1)「名詞(句)」がif節の代用をしている例。

①「主語」

(ex) It was so silent there that a pin drop might have been heard.

とてもそこは静かだったので、ピンが一本落ちてても(でも落ちたら)聞こえたかもしれないくらいだった

② 「(比較級の付いた)名詞句」

會 「(比較級の付いた)名詞句+and S+V[仮定法~]」の構造で、名詞(句)部分がif節の代用をする(andは省略され、「名詞, S+V~」という形になることもある)。

(ex) A few more steps and he would have stumbled on the root.

もしあと2、3歩歩いていたら、彼は木の根につまずいていたことだろう

(2) 「副詞(句)」がif節の代用をしている例。

① otherwise

(ex) Mr. Smith is very rich; otherwise he could not buy such an expensive car.

スミス氏は大変な金持ちだ。さもなければそんな高価な車を買えないだろう

② 「不定詞句」

(ex) To hear him talk, you might think of him as a leader of us.

もし彼が話すのを聞けば、君はひょっとしたら彼を我々のリーダーと思う
もしれない

會 不定詞が「もし~なら」と、条件[仮定]の意味を表す場合の見極めは、不定詞がこの意味になる場合、主節に助動詞の過去形やwill/may/canなどの、強制力の弱い助動詞が来ることが多い。

③ 「前置詞+名詞」

(ex) What would you do in my place? もし私の立場なら、君はどうするだろうか

With a little more care, you wouldn't have made such a silly mistake.

もう少し注意していたら、君はこんなばかな間違いはしなかったろうに

④ 「分詞句[分詞構文]」

(ex) Born in better times, he could have become a great teacher.

もしもっと良い時代に生まれていたら、彼は偉大な教師になっていただろう

Happening in a big city, the accident would have caused a disaster.

大都市で起こっていたら、その事故は惨事を引き起こしていただろう

⑤ その他

(ex) A hundred years ago, no one could have imagined the changes which were caused by the computer.

百年前だったら、誰もコンピューターによってもたらされた変化を想像
できなかつただろう

(3) 「形容詞節[関係詞節]」がif節の代用をしている例。

(ex) A computer which[that] breaks down every other day would be of no use.

一日おきに故障するようなパソコンなら、役には立たないだろう

A CEO whose judgment was bad would get his company into difficulties.

社長の判断が誤ると、その会社は窮地に陥るものだろう

Rule-15

「他動詞+to do[原形~]」型の訳出とその分析。

(1)不定詞を目的語に取る動詞の意味は、基本的に「希望(~したい)」系、「意図(~するつもりだ)」系、「決心(~することに決める)」系の3タイプ。

不定詞の意味的な最大の特徴は、

- ①「未来志向」
- ②「積極性」

したがってそのような性格を持つ不定詞を後ろに(自身の目的語として)取る動詞には、(不定詞と同じように)未来に向かって何かをしようという、これまた「未来志向」「積極性」が感じられる動詞が多い(「類は友を呼ぶ」、同じ性格だから結びつこうとする)。その(つまり「未来志向」「積極性」型の動詞の)3大代表選手が、「希望(~したい)」「意図(~するつもり)」「決心(~することに決める)」を表す動詞になる。

(2)「他動詞+to」を一種の助動詞ととらえる。

結論として、後ろに不定詞を目的語をとっている動詞の型(つまり「他動詞+to V[原形~]」)を見つけたら、

他動詞 + to

部分は「希望」「意図」「決心」(といった「未来志向」「積極性」)のいずれかの意味をV[原形~]に付け加える、一種の助動詞だとみなすといふ。

「助動詞」というとらえ方がまだしっくり来ない人は、以下の英文を見てほしい。

(ex) The meeting will be successful. その会議は成功するだろう

この英文中の助動詞 will は The meeting is successful(会議は成功する)に「確実にそうなるだろう」という一種の「予測・判断」を付け加える働きをしている。これ(上例の will)と同じように

(ex) He longed to return home. 彼はしきりに家に帰りたがった

この英文中の longed to は、He returns home(彼は家に帰る)に「しきりにそうしたかった」という「(主語の)希望」を付け加える働きをしている。また、

(ex) He attempted to settle the dispute. 彼はその争いを解決しようとした

この英文中の attempted to は、He settles the dispute(彼はその争いを解決する)に「しようとした[試みた]」という「(主語の)意図」を付け加える働きをしている。このように、V[原形~]にある種の意味を付け加えるという点で、「他動詞+to」は will, can, may といった助動詞とその働きが同じなのだ。

會實際 ought to(~すべきだ)、have to(~しなければならない・~するに違いない)、used to(昔よく~したものだ)、be going to(~するだろう)等は、文法書でも助動詞として紹介されている。

(3)「他動詞+to do[原形~]」の中で注意したい表現。

不定詞を目的語に取る他動詞の中で、イディオム的なものや、refuse to(~するのを拒む)、hesitate to(~するのをためらう)のような「拒絶・否定・不行動」を表すものには注意したい。

以下に(「希望・意図・決心」の範疇に入らないものの)その代表例をあげておく。

- | | |
|-------------------|--|
| ① used to do[原形~] | 1. 「(昔)よく~したものだ」[過去の習慣] ≒ would |
| | 2. 「(昔)~だった」[過去の状態] 會特にused to beは was[were]と同じ。 |
| ② have to do[原形~] | 1. 「~しなければならない」=must |
| | 2. 「~するに違いない」 |

- ③ ought to do[原形]～
 - 1. 「～すべきだ」 =should
 - 2. 「～するはずだ」
- ④ need to do[原形]～ 「～する必要がある」
- ⑤ start[begin] to do[原形]～ 「～し始める」
- ⑥ learn to do[原形]～
 - 1. 「～できる[する]ようになる」
 - 2. 「～することを学ぶ」
- ⑦ manage to do[原形]～
 - 1. 「(どうにか)～できる」
 - 2. 「～するはめになる」
- ⑧ help (to) do[原形]～ 「～するのに役立つ」 「～するのを手伝う」
- ⑨ continue to do[原形]～ 「～し続ける」 =continue doing～
- ⑩ cease to do[原形]～ 「～しなくなる」 =cease doing～

あるいは stop to do[原形]～(～するために立ち止まる)のように、不定詞が目的語以外で、自動詞などの直後に付く場合は、上記のルールはあてはまらない。

- ① come[get] to do[原形]～ 「～するようになる」
- ② happen[chance] to do[原形]～ 「たまたま～する」
- ③ seem[appear] to do[原形]～ 「～するように見える[思われる]」
- ④ fail to do[原形]～
 - 1. 「～しない」 =don't do[原形]～
 - 2. 「～できない」 =cannot do[原形]～
- ⑤ tend to do[原形]～ 「～しがちだ、～する傾向にある」

④ 一種の助動詞とみなした方がいい不定詞表現の、その他のものをあげておこう。
 中学英語の be able to do[原形]～などもこの仲間。

① 「be+形容詞[分詞]+to do[原形]～」の形で決まり文句的に使うもの。

- (1) be anxious[eager/keen] to do[原形]～ 「～することを熱望している」
- (2) be ready to do[原形]～ 「喜んで～する」「～する覚悟がある」
- (3) be willing to do[原形]～ 「～する意志がある、してもいい」
 ④ willing は ready よりも消極的な意味が込められる。反意表現は be unwilling[reluctant] to do[原形]～で「～したがるらない」。
- (4) be sure[bound/certain] to do[原形]～ 「必ず～するだろう」
- (5) be free to do[原形]～ 「自由に～できる」
- (6) be apt[prone/liable] to do[原形]～ 「～しがちだ」
 ④ be prone to の後には「名詞」がくることもある。
- (7) be likely to do[原形]～ 「～する可能性がある」
 ④ 反意表現は be unlikely to do[原形]～で「～する可能性がない」。
- (8) be going to do[原形]～ 「～するつもりだ、～するだろう」
- (9) be supposed to do[原形]～
 - 1. 「～すると思われる」
 - 2. 「～することになっている」
 - 3. 「～すべきだ」
- (10) be designed to do[原形]～ 「～するように作られている」
- (11) be inclined to do[原形]～
 - 1. 「～したい気がする」
 - 2. 「～する傾向がある」
- (12) be tempted to do[原形]～ 「～したい気がする」

② be to 構文。

④ be to 構文は、助動詞の will, can, should[must] のどれかでたいてい言い換えることができる一種の助動詞と、これも考えるといい(should[must]の意味になる可能性が最も高い)。詳細は、Rule-33を参照せよ。

(4) シンプルで実戦的な品詞分解[構造分析]を心がける。

「他動詞+to」を助動詞ととらえるということは、品詞分解[構造分析]においても、
He will solve the problem.

を

He will solve the problem. ☞ 「助動詞+do[願]」をワンセットでVととらえる。

と分析するのと同じように、下記の英文も

He tried to solve the problem.

これを

He tried to solve the problem.
S V O <O> ☞ the problem は不定詞(to solve)の目的語。

というような分析の仕方をするのではなく、

He tried to solve the problem.
S V O

と(シンプルに)分析するようにしよう。そして同じように、下記の英文も

This fund is designed to help refugees. この資金は難民を援助するためのものです
He is likely to succeed. 彼は成功しそうだ

これを

This fund is designed to help refugees.
S V O

He is likely to succeed.
S V

と(これもまたシンプルに)分析するようにしよう。

Rule-16

「仮主語構文」と「強調構文」の見極め法。

(1) It is と that の間に「形容詞・分詞」や「副詞(句・節)」がある場合。

It is と that の間に「形容詞」や「分詞」があったら、それは仮主語構文だとみて間違いはない。

It is と that の間に「副詞(の仲間)」があったらそれは強調構文だとみて間違いはない。

1. It is 形容詞・分詞 that 完全な文 . ☞ 仮主語構文

2. It is 副詞(句・節) that 完全な文 . ☞ 強調構文

☞副詞(の仲間)とは、具体的には以下の3つ。

(1) 副詞一語

※ 語尾が~lyで終わることが多い。あるいは yesterdayのような時を表す名詞も副詞として用いられることがある。

(ex) It was recently that the accident happened.

It was yesterday that I finished this work.

(2)前置詞+名詞

(ex) It was at nine thirty that I came home.

※ただし「of+抽象名詞」については形容詞化するので、そのような「前置詞+名詞」がIt is と thatの間にはさまっていたら、それは仮主語構文とみなす。

(ex) It is of importance that you should study hard.
=important

(3)接続詞+S+V~

(ex) It was since I was ill that I couldn't come here.

ただし「前置詞+名詞」が形容詞句になっている場合は例外。仮主語構文とみなし「前置詞+名詞」がC(補語)になっているとみる。

そのような代表例としては「of+抽象名詞」や「beyond+範囲・限界を表す名詞」などがある。特に「of+抽象名詞」(は形容詞化するというルールは頻出。以下はすべて仮主語構文(that節が真主語)。

(ex) It is of importance that you should study hard.
=important

君が一所懸命勉強することが大事だ

It is beyond belief that he was killed in the accident.

=unbelievable

彼がその事故で死んだということが信じられない

It was beyond a joke that you said such a thing in public.

人前でそんなことを言ったのは冗談の域を超えている

(2) It is と that の間に「名詞(句・節)」がある場合。

It is と that の間に「名詞(の仲間)があった場合、that の後ろの英文が「完全な文」なら仮主語構文、「不完全な文」なら強調構文とみて間違いない。

1. It is

名詞

 that

完全な文

 . ☞ 仮主語構文

2. It is

名詞

 that

不完全な文

 . ☞ 強調構文

《POINTS》

1. 「不完全な文」とは、S(主語)、O(目的語)、C(補語)のどれかが欠けた文のこと。

2. It is~thatの構文で、thatの後ろが「不完全な文」であれば、それは強調構文と見て(ほぼ)間違いない

☞もちろん文頭のItが直前の単数名詞や直前の内容を指す代名詞、その後のthatが直前の名詞にかかる関係代名詞という英文中にもあるので、先頭のItが文中で役割を持っているかどうかを確認する必要がある。つまりそのItが「それ」と訳せるなら強調構文ではない。逆にそのItが訳がつかない(文中での役割を持っていない)なら強調構文ということになる。

(ex) It rained suddenly. It was the problem that we had been worried about.

【関・代】

突然雨が降ってきた。それは私たちが心配をしていた問題だった

3. 強調構文だとわかったら、It is と that をカッコでくくってしまうといい。すると文の骨組みが浮かび上がってくる。

4. 強調したい語(句)が「人」の場合は、that の代わりに who, whom が使われることもある。

(ex) It was Tom that[who] broke the window. 窓を壊したのはトムなんです
It is Nancy that[whom] Jack loves. ジャックが好きなのはナンシーです

5. また強調したい語(句)が「物(事)」の場合は、that の代わりに which が使われることもある。

(ex) It is the dog that[which] bit me yesterday. 昨日私を噛んだのはその犬です
bite(かむ)の活用はbite-bit-bitten.
場合によっては It is+副詞句+関係副詞 S+V~ という強調構文もあり得る。

(ex) It was in this park that[where] we played baseball.
僕らが野球をしたのはこの公園です

6. 強調構文が下線陪隔問題になっていた場合、うまく和訳するポイントは、**強調されている語句を和訳の最後にもってくる**ことだ(上記の例文のそのように訳している)。

會または「本当に」「実際に」といったフレーズを使って強調する。
ただし、It is[was] only~ that S+V... のような、強調されている語句が「only+語(句・節)」の場合は、「~してはじめて[ようやく]...する[した]」と、前から普通に訳せばいい。

(ex) It was only yesterday that I noticed something was strange.
昨日になってはじめて[ようやく]何か変だということに気づいた

7. not A but B(AではなくてB)を強調する場合、

- ① It is not A but B that V~.
- ② It is not A that V~ but B.

どちらも可能性としてはありうるので、公式としてこれらは覚えておこう。

(ex) Love consists not in gazing at each other but in looking together in the same direction.

→ It is not in gazing at each other but in looking together in the same direction that love consists.

→ It is not in gazing at each other that love consists but in looking together in the same direction.

愛とは互いに見つめ合うことではなく、同じ方向を共に見据えることだ

それから not A but B のイコール表現に B not A (BであってAではない)がある。これを使った場合も、以下の2パターンが考えられる。

- ① It is B not A that V~.
- ② It is B that V~ not A.

(ex) I like him because he is sincere not because he is handsome.

→ It is because he is sincere not because he is handsome that I like him.

→ It is because he is sincere that I like him not because he is handsome.

私が彼を好きなのは、イケメンだからではなく、誠実だからだ

8. イデオム的な強調構文。

It is[was] not until~ that S+V... 「~してはじめて...する[した]」

(ex) It is not until we lose our health that we realize its value.
健康を失ってみてはじめてその価値が分かる

④なお上記構文は「Not until ~ +疑問文の語順」で言い換えられる。

→ Not until we lose our health do we realize its value.

9. 疑問詞付き疑問文の強調構文。

疑問詞付き疑問文の強調構文の公式は以下の通り。

公式：疑問詞 is[was] it that +平叙文の語順？

(ex) What do you want to know? 君が知りたいのは何ですか

⇨ What is it that you want to know?

〔平叙文の語順〕

和訳の際には is[was] it that の部分を()でくくって、「一体全体」「実際」といった訳を付け足すといい。

Rule-17

with ベスト3。

英文中の with の70~80%は、以下の3つのいずれかで訳せる。

- ① 「~と一緒に[共]に」「~につれて」
- ② 「~を持っている」「~を身につけている」〔所有・携帯〕
④ having で言い換えられる with。
- ③ 「~で(もって)」〔手段〕
「~のおかげで」〔原因〕

つまり英文中の with を①で訳して意味が取れない場合、②か③の可能性が高い。

その他の with の可能性は、以下の6つ。

- ① with O C 構文 ☞ Rule-37 2.(5)を参照せよ。
- ② 「~に関して」「~に対して」〔関係・関連〕
(ex) There is something wrong with this car.
この車はどこか具合が悪い〔故障している〕
- ③ 「もし~があれば」〔条件〕
(ex) With a little more care, he would not have made the mistake.
もう少し注意していれば、彼はそのミスを犯さなかつたろう
- ④ 「with+抽象名詞」は副詞化する。
with ease = easily 「カンタンに、容易に」
with success = successfully 「首尾よく」
with diligence = diligently 「勤勉に」
- ⑤ S+V A with B ☞ Rule-26 1.を参照せよ。
- ⑥ その他。
 1. with all A 「Aにもかかわらず」 = in spite of A = for all A = despite A
(ex) With all his wealth, he was not happy.
あんなに財産があるにもかかわらず、彼は幸せではなかつた
④ただし、「原因・手段」を表す with に「all+名詞」がくつついただけの with all~ もあるので注意。
 2. with that 「こう[そう]言って、こう[そう]やって」
(ex) With that, my father left the room. 父はこう言って部屋を出て行った
 3. start[begin] with A 「Aから始め[ま]る」
(ex) Let's start with these files. これらのファイルから(調査を)始めよう

Rule-18

受動態の訳出の仕方について。

英語でいくら受動態で書かれてあっても、日本語に訳す際は、できるだけ能動的に（つまり元の能動態の文に戻して）訳した方がいいことが多い。

(ex) All invitation to dinner should be answered immediately.

上例を直訳をすれば「夕食への招待はすぐに返事が出されるべきである」となるが、それよりも能動的に「夕食への招待にはすぐに返事を出すべきである」と訳した方がこなれたいし訳になる。ただし、少数だが、逆に英文は能動態で書かれているが、和訳は受動的に訳した方が、こなれた日本文になるという場合もある。

Rule-19

関係詞節の訳出の仕方について。

Rule-62 において、

「関係詞の前にカンマ(,)があつたら、カンマでいったん区切るといい」と言ったが、実際関係詞節は(特に長い・複雑な場合)、直前にカンマがあろうがなかろうが、

- ① 関係詞の手前でいったん/(スラッシュ)で区切って、
- ② そこに接続詞(「そして」「しかし」「なぜなら」「つまり」など)を補い
- ③ 関係詞に先行詞を代入し、訳し下げる

のがいいことが多い。

Rule-20

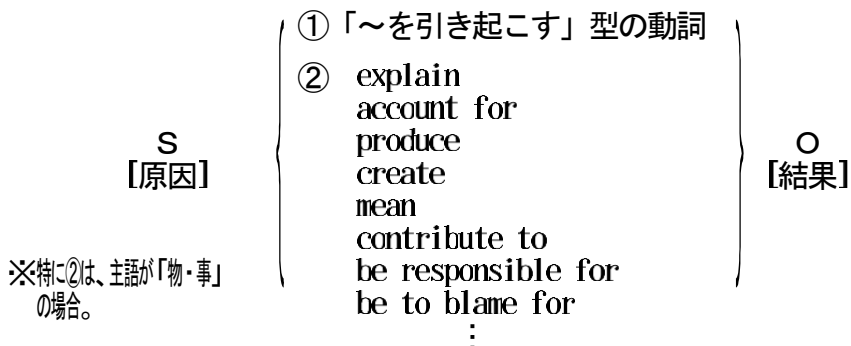
前後を「原因と結果」の関係で結ぶ動詞。

「～を引き起こす」型の動詞、(主語が「物・事」だった場合の)explain, account for [～を説明する]や contribute to [～に寄与する], produce [～を生み出す], create [～を生み出す], mean [～を意味する] provoke [～を挑発する], trigger [～のきっかけとなる], be responsible for [～の原因である], be to blame for [～の原因である] などは、「S = 原因」「O = 結果」という意味関係になることが多い。その場合、「Sが原因となって、結果としてOが生じる[できる]」などと訳してもいい。

※ただしmeanの場合は「S=O」の関係になることもある。

(ex) The red light means 'stop'. 赤信号は「止まれ」の意味だ

會 「～を引き起こす」型の動詞には bring about, cause, lead to, give rise to, induce result in, provoke, trigger (off), set off などがある。



特別講義

第一文型(S+V)の表す意味について。

セットの前置詞・副詞をヒントにした第一文型の意味の類推法。

(1) 「S+V+前置詞」の構造から即文全体の意味を類推できるタイプ。

① 「S+V from ~」型。

前置詞の from は、記号で言うなら「←」で表すことができます。

S V from ~

←

ここから「S+V from ~」型は以下の3つの意味に分類することができます。

1. 「Sは~から(もどって・やって)来る・移動する・遠ざかる[離れる]」

☞この場合、「~」は「(動作などの)起点」を表す。

(ex) He came from the room. 彼は部屋から出て来た

☞ from を out of で言い換えることもできるが、from は部屋を起点としてとらえているのに対し、out of は「(部屋の中から)外へ」の意を表す。

The teacher refrained from telling his students anything.

先生は生徒達に何も言わなかった

☞「生徒にいかなる言葉であれそれを言う(かける)ことから遠ざかった」ということ。実際 refrain from A で「Aを控える、やめる」という意味になる。

He rose from the chair. 彼はいすから立ち上がった

I still regret that we moved from the country.

私は田舎から転居したのを今でも後悔しています

He will return from his vacation next week. 彼は来週休暇から戻るでしょう

I withdrew from the drawing room. 私は客間から引き下がった

☞ withdraw from A で「Aから引き下がる、撤退する」。

2. 「S=結果」、「~=原因」の意味関係になる

S V from ~

[結果] ← [原因]

この場合は「~が原因となって(結果として)Sが生じる」といった訳がうまくはまることが多いのです。そしてこの意味になる場合、Sは「物事」を表す名詞であることが多いと言えます。

(ex) Tooth decay often results from eating sweets.

甘いものを食べるとしばしば虫歯ができる

His illness came from eating too much. 彼の病気は食べ過ぎから起こった

His anger often derived from nothing. 彼の怒りは理由のないことが多かった

☞ derive from A で「Aに由来する」「Aから出ている」。derive from の場合、「~から来る」型で訳けることもある。

(ex) The term derives from Greek. その用語はギリシャ語に由来する

3.その他

・ suffer from A: Aに[で]苦しむ

・ die from A: Aが原因で死ぬ

・ benefit from A: Aから利益を得る

- ② 「S+V into ~」型。 ④ into は「外から中への移動」を意味する。
前置詞の into は、記号で言うなら「→」で表すことができます。

S V into ~
→

ここから「S+V into ~」型は以下の2つの意味に分類することができます。

1. [~ = 場所(帰着点)・空間・時間・事業・活動] 「~の中へ(に)入る」 「~にまで至る」

- (ex) We went into the house. 私達はその家の中に入った
He is well into his forties. 彼は40歳をかなり越えている
The custom has survived into the twentieth century.
その習慣は20世紀まで続いている
She worked far[late] into the night. 彼女は夜ふけまで勉強した
④ 「勉強をして夜遅くの中に入る」ということ。
He ran into debt. 彼は借金をした
④ 「借金の中に入る」ということ。

We entered into a five-year contract. 我々は5年契約を結んだ

I got into difficulties. 私は困難に陥った

They inquired into the matter. 彼らはその事件を調査した

④ 上例のように「~の中に入る」から比喩的に「~をのぞき込む(中に入って
見てみる)」 → 「~を調査する」といった意味にもなる。以下も同じ用例。

I didn't go into details. 詳細には論じなかった

The car ran into the wall. その車は壁にぶつかった

④ 上例は run against ~ でも表現できるが、into では対象物の中に入りこんだ
り変形したり移動したりすることが暗示されるのに対し、against になると
堅い物に当たってはね返されるというニュアンスになる。

(ex) The ship ran against an iceberg. その船は冰山にぶつかった

また run into の場合、比喩的に「(人に出くわす)」「(困難などに遭遇する)」と
いう意味にもなる。

(ex) They ran into heavy weather. 彼らは悪天候に遭遇した

I ran into an old friend at the store. その店でひょっこり旧友と出くわした

She bumped into me. 彼女は私にドスンとぶちあたった

④ 「中に入り込む→めり込む」イメージ。

She's very much into jazz. 彼女はジャズに夢中になっている

④ 上例のように「~の中に入る」から転じて「~の中にどっぷりと入り込む
→夢中になっている」という意味にもなる。

We separated[divided] into five groups. 我々は5つのグループに分かれた

④ 「~の中に入る」に separate[divide] の「分かれる」という意味が加わり、
「~の中に(分かれて)入る → ~に分かれる」という意味になった。

The year falls into four seasons. 1年には四季の区分がある

They burst into laughter. 彼らはどっと笑った

④ 「笑顔の中に入った」ということ。

2. [~ = (変化した)結果] 「~に変わる」

(ex) He turned into a tyrant. 彼は独裁者に変身した

The sleet changed into snow. みぞれは雪に変わった

④ change to ~ という表現もあるが、一般に into は、ある物が別の物に変化する
ことを表すのに対し、to は1つのものの状態の変化を示すのが違い。

(ex) The drizzle changed to a rain. 小雨が本降りになった

④ ときに動詞と into の間に副詞が割り込むこともある。

(ex) He used to sit in the easy chair at the porch and float off into his fantasies.

上例の float into は「～の中に入る」型。その間に「(現実から)離れて」という意味の副詞の off が割り込んでいる。全体は「彼は玄関の安楽椅子に座り、現実を離れて空想の世界によく浸っていたものだった」となる。

③ 「S+V for～」型。

「S+V for～」型は以下の3つの意味に分類することができます。

1. 「～に向かって進む」

(ex) The ship made for the shore. 船は岸に向かって進んだ
She prepared to leave for home[the station].

彼女(は)帰宅の[駅に向かって]用意をした
Their plan was heading for trouble. 彼らの計画は前途多難だった
☞ 「トラブルに向かって進んでいた」ということ。

2. 「～を求める」

(ex) She longs for your return. 彼女は君が帰ってくるのを待ちこがれている
He reached for his cigarettes. 彼はタバコを取ろうとした
Who are you looking for? 誰を捜していますか

3. その他

- ・ pay for A: ① 「A(品物)の代金を支払う」
② 「A(人)に代わって代金を支払う」
- ・ be for A: 「Aのためのものである」
- ・ work for A: 「Aのために働く」
- ・ stand for A: 「Aを表す、象徴する」

(ex) UN stands for United Nations. UN は United Nations(国連)の略です

☞ 上記以外でも「～の間」という for と動詞が結びついて run for～(～の間走る)、last for A(Aの間持ちこたえる)、「～に賛成して」という for と動詞が結びついて vote for～(～に賛成投票する)等もありうる。

④ 「S+V to～」型。

「S+V to～」型は以下の2つの意味に分類することができます。なお注意してほしいのは、ここでの to は前置詞の to です。

1. 「～へと(自分自身を送り込む)」「～に(まで)至る」 ☞こちらが重要!

(ex) I got to the park. 私は公園に着いた

☞ 「公園に自分自身を送り込んだ」ということ。

Japan committed to military cooperation with the US.

日本は米国との(の)軍事協力を約束した

☞ 「日本は米国との軍事協力をする立場に自らを送り込んだ」ということ。

She took to drinking. 彼女は酒にふけた

Everybody took to him at once. みんなが彼をすぐに好きになった

☞ take to A には上例のように①「Aにふける」②「Aを好きになる」という意味があるが、これらは①であれば「A(良くないもの)に自分自身を送り込む」、②であれば「A(興味の対象)に自分自身を送り込む」ということ。

You should keep to this timetable.

あなたはこのスケジュール表に従わなければなりません

☞ keep to A(規則・計画)で「Aに従う、Aを守る」という意味だが、これは「Aに自分自身を送り込んでそれを keepする(保つ)」ということ。

stick to A(Aに固執する)も同じタイプで「A(主義・決定)に自分自身を送り

込んでそこに stick(留まる・しがみついている)」ということ。

2. 「～に対して〇〇する」

會「～」は主語の行う行為の対象。

代表的なものは talk[speak] to ~ (～に対して話しかける)、appeal to ~ (～に対して訴える)、respond to ~ (～に対して反応・対応する)、admit to ~ (～を認める)等があります。

それから「S+V to ~」型の例外として add to A があります。これは「Aを増す、増やす」という意味です。

(ex) This adds to our troubles. これでやっかいなことがまた増える

上の英文の場合は、This adds a trouble to our troubles. の a trouble が(to 以下と同じなので)省かれたと見るといいのです。つまり(add A to B で「AをBに加える」という語法があるので「これはもう一つのやっかいごとを、(今ある)我々のやっかいごとに加えることになる」と考えるといいでしょう。

⑤ 「S+V in (～)」型。

「S+V in (～)」型の基本は

1. 「(自身が～の中に入る[入っている])」 ☞ 自動詞の場合。
2. 「～を中に入れる」 ☞ 他動詞の場合。

そこから「S+V in (～)」型は以下の5つの意味に分類することができます。
「S+V in (～)」型の場合、以下のように in の後ろに～、つまり目的語を取らない場合も多いですね(その場合の in は品詞的には副詞になる)。

1. 「(～の中に入る) 「～にまで至る」

(ex) The sun got in through the window. 日光が窓から差し込んだ
The water ran in. 水が流れ込んできた
Her feet turn in. 彼女の足は内まただ
Come in. (中)に入ってきてください

2. 「始まる・動く[き出す]」

會「ある状態・行為の中に入る → 始まる・動く(き出す)」となった。

(ex) The rainy season has set in. 雨季が始まった[雨期に入った]

3. 「(～)の中にある[ある]・とどまる」

(ex) I lived[stayed] in London. 私はロンドンに住んでいた[滞在した]
True happiness lies in satisfaction. 真の幸せは満足の中にある
He persists in her belief. 彼はがんとして信念を曲げない
Is your father in? お父さんはご在宅ですか

會 上例は in の後に the home[house] が省かれていると見ることができる。
「流行っている」という in も fashion が省かれていると見るといい。

(ex) Long skirts are in now. ロングスカートが今流行している

4. 「～を中に入れる」「～を取り[受け]入れる」 ☞ S+V ~ in. となることもある

(ex) Take the washing in before it rains. 雨が降る前に洗濯物を取りこみなさい

會 take in ~ は、転じて以下のような意味にもなる。

① 「～を理解する」 ☞ 否定文・疑問文で用いることが多い。

I couldn't take in her argument. 彼女の真意がわからなかった

② be taken in (by ~) で「(～)にだまされる」

Don't be taken in by a smooth talker. 口のうまいやつにだまされるなよ

5.その他

- (ex) He painted in oils. 彼は油絵の具で描いた
He paid in cash. 彼は現金で払った
Hand in your homework tomorrow. 宿題は明日提出しなさい
☞ hand[send/turn/give] in A で「Aを提出する」となる。

⑥ 「S+V out of ~」型。 「S+V out of ~」型は、out of が「~の外へ[に・で]」という意味を表すので、「~から出ていく[くる]・~から出て[離れて]しまっている」という意味になります。

- (ex) They got out of the room. 彼らは部屋から出ていった
He came out of the room. 彼は部屋から出てきた
We were out of danger. 我々は危険を脱した
The manager was out of his office on business.
支配人は仕事で事務所にいなかった

また「離れている→手が届かない→~がない」という意味にもなります。

- (ex) The goods you ordered is now out of stock. ご注文の商品は現在在庫切れです
She's out of food. 彼女は食料を切らしている
He is out of work. 彼は失業中だ

⑦ 「S+V out (~)」型。 「S+V out (~)」型は

1. 「(自身が~の外へ出る[出ている]」 ☞ 自動詞の場合。
2. 「~を外に出す」 ☞ 他動詞の場合。

ただし out は「何かがある範囲から出る動作[出ている状態]」を表すので、話し手もまたその「範囲・活動」の内側にいて、そこからあるものが「出る[出ている]」となれば、(話し手から見れば)それは「消える」「出て行く」「無い」という動作状態になります(これを「退出の out」と言う)。

- (ex) She passed out at the sight of blood. 彼女は血を見て失神した
☞ 「意識の外に出てしまった」ということ。

逆に、話し手の方はその「範囲・活動」の外側にいて、あるものが(その範囲・活動から話し手のいる側へ)「出る[出ている]」となれば、(話し手から見れば)それは「出て来る」「現れる[現れている・明らかだ]」という動作状態になります(これを「出現の out」と言う)。

- (ex) A war broke out. 戦争がぼつ発した

これが out が一見正反対の意味を持つように見える理由です。具体的には以下のようにその意味をまとめられます。

- (1) 「S+V out」は「(自身が~の外へ出る[出ている]」から転じて
 1. 「消える、無くなる[無い]」 ☞ 「退出の out」の場合。
 2. 「現れる、明らかとなる」 ☞ 「出現の out」の場合。
- (2) 「S+V out ~」は、「~を外に出す」から転じて
 1. 「~を消す、無くす[排除する]」 ☞ 「退出の out」の場合。
 2. 「~を現す、明らかにする」 ☞ 「出現の out」の場合。

それから「S+V out」では、以下のような表現もあります。

- (ex) Look[Watch] out! 気をつける
☞ 「(自分の視界の外を見ろ[見る]」ということ。

(2)前置詞[副詞]のイメージから類推した方がてっとり早いタイプ。

「S+V on～」型は、onが「接触」を表すので「～に接触して(した状態で)○○する」が基本となります。たとえば survive on Aは「Aでもって食いつなく」という意味ですが、これはAは「手段」です。つまり「Aを手段としてその上で生き延びる→Aで食いつなく」となるのです。

(ex) He survived on water in the desert for a week.

彼は一週間の間沙漠で、水で食いつないだ

My salary is just enough to survive on. 私の給料ではやっと生きていけるだけだ

depend on Aは、onは同じように「接触」ですが、Aは「依存する対象」です。つまり「Aに接触して[つかまって]ここにぶら下がっている→(自分では何もせずに)Aに依存している、頼っている」となるのです。

會 dependの語源は「de(下に)+pend(ぶら下がる)」。同じ語源を持つ語に pendantがある。「ペンダント」とは首から”ぶら下げる[下がっている]”ものだ。

(ex) We depend on the newspapers for information about it.

我々はそれに関する情報を新聞によって得ている

go about Aは「A=仕事」の場合、「Aに取りかかる」ですが、これはaboutが「周辺」を表し、「Aの周辺へと行く→Aに取りかかる」となったのです。

(ex) I went about my graduation thesis. 私は卒論に取りかかった

「S+V with～」型は、withが「～と共に[一緒に]」「～につれて」という意味の場合は、「～と共に存在する」「～と共に行く[来る]・変わる」と、「存在」や「移動・変化」を表すことが多いと言えるでしょう。

(ex) Don't associate with dishonest people. 不正直な人たちとは交際するな

Prices vary with the seasons. 値段は季節とともに変わる

withが「手段・原因」を表す場合は「～でもって[が原因で]○○する」となります。

(ex) I paid with a check. 私は小切手で支払った

withが「関係[対象]・対立」などを表す場合は「～を相手に[として]○○する」「～に向かって○○する」となります。

(ex) I correspond with a friend in Canada. カナダの友人と友人と文通しています

The speaker dealt with the problem atomic-power accident

講演者は原発事故の問題を論じた[扱った]

They fought with[against] the enemy. 彼らは敵と戦った

《「動詞+前置詞[副詞]」型意味の一覧》

(1) 「S+V from～」型。

1. 「Sは～から(もどって・やって)来る・移動する・遠ざかる[離れる]

會この場合、「～」は「動作などの起点」を表す。

2. 「S=結果」、「～=原因」の意味関係になる

會その場合は「～が原因となって(結果として)Sが生じる」といった訳がうまくはまることが多い。そしてこの意味になる場合、Sは「物事」を表す名詞であることが多い。

3. その他

(1) suffer from A: Aに[で]苦しむ

(2) benefit from A: Aから利益を得る

- (2) 「S+V into ~」型。 會 into は「外から中への移動」を意味する。
 1. [~ = 場所(帰着点)・空間・時間・事業・活動] 「~の中へ(に)入る」 「~に(まで)至る」
 2. [~ = (変化した)結果] 「~に変わる」

- (3) 「S+V for ~」型。
 1. 「~に向かって進む」
 2. 「~を求める」
 3. その他
 ・pay for A: ① 「A(脚)の代金を払う」 ・work for A: 「Aのために働く」
 ② 「A(人)に代わって代金を払う」 ・stand for A: 「Aを表す[象徴する]」
 ・be for A: 「Aのためのものである」
 會 上記以外でも「~の間」という for と動詞が結びついて run for~(~の間走る)、last for A(Aの間持ちこたえる)、「~に賛成して」という for と動詞が結びついて vote for~(~に賛成投票する)等もありうる。

- (4) 「S+V to ~」型。 會 to は前置詞。「S+V to [原形]~」型の類推法は、P53を参照せよ!
 1. 「~へと(自分自身を)送り込む」 「~に(まで)至る」 會 こちらが重要!
 2. 「~に対して〇〇する」
 會 「~」は主語の行つ行為の対象。
 (ex) talk[speak] to ~, appeal to ~, admit to ~等
 會 例外として add to Aがある。これは「Aを増す、増やす」という意味。

- (5) 「S+V in (~)」型。
 1. 「(~の中)に入る」 「~にまで至る」
 2. 「始まる・動く[き出す]」
 會 「ある状態・行為の中に入る → 始まる・動く[き出す]」。
 3. 「~の中にいる[ある]・とどまる」
 4. 「~の中に入れる」 「~を取り[受け]入れる」 會 S+V ~ in.となることもある。
 5. その他
 (ex) hand in A 「Aを提出する」 會 「Aを受け手の中に入れる」ということ。
 pain in A 「Aで描く」など。 會 「手段(~でもって)」の in.

- (6) 「S+V with ~」型。
 1. with が「~と共に[一緒に]に」という意味の場合は、「Aと共に存在する」「Aと共に行く[来る]・変わる」と、「存在」や「移動・変化」を表すことが多い。
 2. with が「手段・原因」を表す場合は「Aでもって[が原因で]〇〇する」。
 3. with が「関係[対象]・対立」などを表す場合は「~を相手に[として]〇〇する」「~に向かって〇〇する」。

- (7) 「S+V out of ~」型。
 1. 「~から出ていく[くる]、出る・~から出て[離れて]しまっている」
 2. 「~がない」

- (8) 「S+V out (~)」型。
 「S+V out (~)」は、Vが自動詞なら「(自身が~の)外に出る」。Vが他動詞なら「~を外に出す」が基本。後はoutが「出現」か「退出」かで意味が決まる。
 1. out が「退出」 (1) [V = 自動詞] 「外に出る、消える、無くなる[無い]」
 (2) [V = 他動詞] 「~を外に出す、~を消す、無くす[排除する]」
 2. out が「出現」 (1) [V = 自動詞] 「外に出る、現れる、明らかとなる」
 (2) [V = 他動詞] 「~を外に出す、~を現す、明らかにする」

④また比喩的に「～をやり遂げる」となることもある。

「やり遂げる」となるのは、「外に出す」という out の意味が比喩的に用いられた結果。「～を出し切る → 物事を(最後まで)やり切る・やり終える → やり遂げる、徹底的にやり尽くす」となる。

(ex) I cleaned out the room. 部屋をすっきり掃除した

They fought it out. 彼らは戦い抜いた

④「S+V out」では、以下のような表現もある。

(ex) Look[Watch] out! 気をつけろ

(9)その他。

1. S+V away[aside] 型 ⇒ 「遠ざかる[脇にどく]」「いない、(い)なくなる」

④ S+V away[aside] ~ / S+V ~ away[aside] なら「～を遠ざける[捨てる・どかす・取り除く・片づける]」。away の場合はそれでいいが、aside の場合、「①～を取り除く[捨てる・片づける] ②(後で必要な)ので～を取っておく」の2つの可能性がある。

2. S+V back 型 ⇒ 「(元)に戻る、さかのぼる」「後ろに[で]〇〇する」

④ S+V back to ~ なら「～に戻る、(まで)さかのぼる」。S+V back ~ / S+V ~ back なら「～を(元)に戻す」。また back は「お返しに」という意味もある。

3. S+V down 型 ⇒ 「下がる、落ちる[降りる]」

④ S+V down ~ なら「～を下げる、～を落とす[降ろす]」。

4. S+V off 型 ⇒ 「離れる[れている]」「出る[ている]」

④ 応用形として、This pork is off.(この豚肉はいたんでいる)などがある。これは「本来の(食べられる)状態から離れている → 痛んでいる」ということ。S+V ~ off / S+V off ~ なら「①～から離れる[れている]、出る[ている]、②～を離れた[出た]状態にする[なる・である]」。

【問題演習】以下の英文を訳せ。

Generation gaps, wars, and prejudices stem, at least in part, from what is communicated.

《語句》prejudice: 偏見 in part: ある面では、いくぶんかは at least: 少なくとも

【解説】 at least in part という副詞句を()でくくると、「S+V from ~」型の骨組みが見えてくる。「S = 結果」「~ = 原因」の関係と見る。実際、stem from A で「A から生じる、起こる」「A に由来する」という意味がある。問題文の訳は「伝えられるものが原因となって世代間のギャップ、戦争、偏見が、少なくともある面では生じるのだ」。

「各品詞やルールの例外的な用法」

1. 「名詞」の例外的な用法。

(1) 準動詞の意味上の主語になっている。

① 不定詞の意味上の主語になっている

(ex) For Jack to investigate the case, she told a lie.

ジャックが事件の捜査をできるように、彼女はウソをついた

上の英文の Jack は、前置詞(for)の目的語ではあるのだが、それよりも直後の不定詞(to investigate)の意味上の主語としての働きを解釈では重視するので、あえてここで取り上げておく。

② 分詞(構文)の意味上の主語になっている

(ex) John coming here, everybody was surprised.

ジョンがここにきた時、みんな驚いた

Johnは、直後の分詞(coming)の意味上の主語になっている。この英文は分詞構文。

(ex) He sat on the chair, his eyes closed. 彼は目を閉じて椅子に座っていた

his eyes を含む後半部の元の形は ~and his eyes were closed. これを分詞構文にすれば、本来なら his eyes being closed. となるはずなのだが、分詞構文における being は多くの場合省略されるので、その結果、意味上の主語の his eyes の後に直接過去分詞の closed がつく形となった。

このような being が省略された結果としての「名詞+p.p.~」「名詞+形容詞~」という形の分詞構文には注意しよう。

(ex) This agreed, the meeting was closed.

このことが同意されると、会議は閉会した

My head full of new ideas, I couldn't hear his voice.

私の頭は新しい考えで一杯だったので、彼の声が聞こえなかった

それから意味上の主語ではないのだが、being が省略された結果、名詞だけが残ってしまったような分詞構文として、こんな形もある。

(ex) An only son, he had to inherit the family property.

彼は一人っ子だったので、家督を相続せねばならなかった

上の英文の波線部は、元々は Since he was an only son, で、分詞構文になれば、本来は Being an only son となるはずなのだが、これも being が省略され、その結果、元の英文の補語(C)である an only son だけが残ったというもの。

③ 動名詞の意味上の主語になっている

(ex) He insisted on the criminal being released.

彼は犯人が解放されることを主張した

上の英文では、the criminal は、直後の動名詞(being released)の意味上の主語になっている。

(2) 前の名詞(又は句・節)と同格になっている。

(ex) Our teacher, Henry Evans, compiled this dictionary.

私たちの先生のヘンリー・エバンス氏がこの辞書を編集した

上の英文の Henry Evans は、直前の名詞(our teacher)と同格で、それを説明している。

(3) 「時」「場所」「方法」「方向」「距離」「程度」などを表す名詞が副詞的に用いられる場合がある。

(ex) I saw him yesterday. 私は昨日、彼を見た

上の英文の yesterday は、動詞の saw にかかるとしての働きをしている。

(ex) He came here three times. 彼は三度ここに来た

上の英文の three times は、came を修飾する副詞としての働きをしている。

(4) 会話などで呼びかけで用いられる。

(ex) "Hey Jack, You're so smart". ジャック、君は頭がいいな

(5) 接続詞的な働きをする名詞がある。

① the way S + V ~

1.[S.O.C. になったり、前置詞の後ろで] 「～の仕方」「様子」「(あり)さま」「どのように～」
=how S+V ~
=the way[manner] in which S+V ~
=the way[manner] that S+V ~

(ex) Tell me the way you did it. あなたのやり方を教えてください
O₁ O₂ (あなたがどのようにそれを行ったかを私に教えてください)

I don't like the way he smiles. 彼の笑いがきらいだ
O

2.[S.O.C. にならない] 「～のように」 =as S+V ~

(ex) You must do it the way he told you to.

彼があなたに言ったように、それをしなければならぬ

☞ the way は、接続詞用法から、次のような意味にも用いられるので注意。

① 「…すること[もの]」

(ex) It was strange the way[=how] he said it. 彼がそう言ったのは不思議だ

② 「しきたり、風習」

(ex) That's the way it goes[is]. それが世の習いだ[世の中とはそういうものだ]

=That's the way.

=That is the way of the world.

☞ 「人を勸めて」そんな(ことはよくある)ものだ。それが運命だ」という意味で用いる。

③ 「…から判断すると」

(ex) the way I see[=look at] it, 私の見るところでは

④ 「どれくらい」

(ex) No one can understand the way[=how much] I miss her.

彼女がいなくてをどんなに寂しく思っているかだれにもわからない

⑤ [感嘆詞として] 「なんと」

(ex) The way[=How] you look ! なんとという格好をしているの

⑥ [形容詞節やCなどになって] 「…のような」 ☞ asと同じ。直前の名詞を修飾する。

(ex) I like you the way you are. 今のそのまま[ありのまま]のあなたが好きだ

- ② the moment[second/ minute/ instant] S + V ~ 「～するとすぐに」
 (ex) The moment[second/ minute/ instant] he saw me, he turned away.
 彼は私を見るとすぐ顔をそむけた
- ③ every time S + V ~ 「～する時はいつも」
 = anytime S + V ~
 (ex) She says something every time I turn around.
 私が顔を出すと彼女はいつも文句を言う
- ④ each time S + V ~ 「～する度ごとに」
 (ex) Each time I see her, I like her more and more.
 彼女に会うたびごとにますます彼女が好きになる
- ⑤ the first[second/ last] time S + V ~ 「初めて[二度目に/最後に]～した時に」
 (ex) The first time I saw him, he was a boy. 初めて会ったときは彼は子供だ

(6)その他

- ① No wonder S+V ~ 「～するのは当然だ、無理もない」

(ex) No wonder he refused the proposal.

彼がその申し出を断ったのは全く不思議ではない

◎これは会話でよく使われる表現で、元々「It is no wonder that S+V ~」という仮主語構文だったものが It is と that が省かれて上記のようになった。

- ② No doubt 副詞として用いられる
1. 「相手の同意を求めて」 「たぶん、おそらく」 = probably
 2. 「疑いもなく、確かに」 = surely
 3. 「but とセットで」 「なるほど～だが(がしかし...)」 = of course

(ex) No doubt your story is true, but others don't believe it.

なるほどあなたの話は本当だが、他人は信じないだろう

- ③ what(+ever) や which(+ever)の直後に置かれた名詞が、what(+ever)、which(+ever)の中身を具体的に(同格的に)説明していることがある。

(ex) I will give you what money I have. 私が持っている金の全てを君にあげよう

上の英文の場合、money を省いて「what I have: 私が持っているもの」といっても意味は通じるが、それではその持っているもの何なのかがハッキリしない。そこで、「what money I have」とすると、私が持っているものが「金」だと、その意味が明確になる。「what=money」の意味関係。

ただ、直後に「名詞」がつくと、普通の関係代名詞の what よりも強調的なニュアンスが強くなり、「～する全ての○○」などと訳す。

(ex) He told me what little information he knew.

彼は自分が知っている少ないながらも全ての情報を私に教えてくれた

上の英文の場合も同じで、「what he knew: 彼(自分が)知っていたこと」でも意味は通じるが、それではその知っていたことが何なのかがハッキリしない。そこで「what little information he knew」とすると、彼の知っていたものが「情報」だったと、その意味が明確になる。「what=information」の意味関係。

ただ、「little[few]+名詞」がつくと更に強調的なニュアンスが強まり、「～する少ないながらも全ての○○」と訳す。

(3) 「前置詞+名詞」が接続詞になることがある。

① by the time S+V～ 「S～する頃までには」

(ex) I will have finished my work by the time she comes here.

彼女がここにくるころまでには仕事を終えてしまっているだろう

② for fear S + $\left\{ \begin{array}{l} \text{will[would]} \\ \text{may[might]} \\ \text{should} \end{array} \right\} + V\sim$
「Sが～するといけけないので、～しないように」

(ex) Insure your house for fear there should be a fire.

火災に備えて家に保険をかけなさい

③ in case S+V～

1. 「もし～なら」

(ex) In case anything happens, call me immediately.

もし何かあったら、すぐに電話してください

2. 「～の場合に備えて、～するといけけないので」

(ex) You had better take an umbrella in case it rains[should rain].

(万一)雨が降るといけけないから傘を持っていきなさい

☞ in case のあとの動詞が「should+do[原形]～」となるのは、予想される事柄が起きる可能性が低いと話者が考えているような場合。

3. 「形容詞」の例外的用法。

(1) being の省略された分詞構文として、副詞句を作る。

(ex) Able to operate a computer, he was hired.

コンピュータを操作できたので彼は雇われた

この英文の前半部は、元々 Since he was able to operate a computer だった。それが分詞構文になり、being 省略された結果としてこうなった。

[Being] Able to operate a computer, he was hired.

分詞構文の分詞句は、前にも説明したように、文中盤、文後半にも置かれるある。

(2) 「the+形容詞[分詞]」が名詞として使われることがある。具体的には

①(人を表す)複数名詞化する 「…な人たち」

(ex) the blind 目の見えない人達 =blind people
the young 若者 =young people

☞このような形で使われる形容詞・分詞の具体例は以下の通り。

ablebodied[体の丈夫な], brave[勇敢な], dead[死んだ], deaf[耳の間えない], disabled[体の不自由な], dumb[口のきけない], elderly[年輩の], guilty[有罪の], homeless[家を持たない], injured[負傷した], innocent[無実の], living[生きている], old[年をとった], poor[貧乏な], rich[金持ちの], sick[病気の], unemployed[失業した], wealthy[裕福な], wise[賢い], wounded[負傷した], young[若い]等。

☞ the accused[被告], the deceased[故人], the pursued[追跡されている人] はしばしば単数の人を表す。

☞ the British[英国人], the Dutch[オランダ人] など、「the+国籍を表す形容詞」についても同じように国民全体を表し、複数形として用いられる。

① 成句的な(both) young and oldなどではtheは省略されることがある。また、修飾語を伴うことも可。

(ex) the young at heart 心の若い人

② 抽象名詞化する、あるいは集合名詞化する 「～なもの[こと]」

(ex) the beautiful 美 =beauty
the important 重要なこと =important things

③ 結局、「the+形容詞[分詞]」には3つの意味があることになる。たとえば the good は、

- ① 「善良な人々」 =good people (人を表す)複数名詞化
- ② 「善」 =goodness 抽象名詞化
- ③ 「良いこと[物]」 =good things 集合名詞化

the old も同様に「老人たち」「古さ」「古い物」の3つの意味をもつことになる。文中でそのどれになるかは文脈判断となる。ただし、すべての「the+形容詞[分詞]」が3つの意味をもっているとは限らない。

(3) 形容詞(形容詞用法の分詞)が副詞的に使われることがある。

① 強意語として、そのままの形で他の形容詞の前に置く。もとの意味はほとんど失われている。

(ex) She was dead asleep. 彼女はぐっすりと眠っていた

上の英文の dead は「ぐっすり」という意味で、後ろの asleep を強調しています。元々の dead 「死んだ」という意味は失われている。

② 「形容詞+and+形容詞」の形で、前の形容詞が後ろの形容詞の意味を強調する。

(ex) Everybody feels nice and happy. みんなとても楽しい気分である

上の英文の nice and の場合、意味的には very とほぼ同じ。and の後ろには上の英文の happy のように「好ましい」意味を表す形容詞がくる。

③ 文全体を修飾する。

(ex) More important[vital], the plan is imperfect.
更に重要なことは、その計画は不完全ということだ

上の英文では、more important[vital]が後続の主節全体を修飾している。

(ex) Sure enough, he didn't come. (はたして(案の定)、彼は来なかった

上の英文では、sure enough が後続の主節全体を修飾している。Surely enough としても意味は同じ。

④ 動詞を修飾する。

I 完全自動詞[第一文型(SV)]を作る自動詞の後に置かれる場合。

(ex) The sun shines bright. 太陽は明るく輝く

上の英文の bright は、shines を修飾しており brightly の意味です。このような bright の用法は、動詞の shine や burn と共に用いられる場合に起こります。

(ex) The children returned safe. 子供たちは無事に帰ってきた

上の英文のような「安全に、無事に[で]」という意味で用いる safe は、be動詞, come, return などと共に用いられる場合に起こる。

Ⅱ 完全他動詞[第三文型(SVO)を作る他動詞]の目的語の後に置かれる場合。

(ex) He opened his mouth wide. 彼は口を大きくあけた

上の英文の wide は、opened を修飾している。

(4)その他

True S+V~:なるほど~だ

(ex) True he is young, but he is trustworthy. なるほど彼は若いが、信頼できる

◎これも元々「It is true that S+V~」という仮主語構文だったものが、It is と that が省かれて上記のように使われるようになった。

4. 「副詞」の例外的用法。

(1)副詞が形容詞的に使われることがある。

①名詞を修飾することがある。

(ex) People there work diligently. その人々は勤勉に働く

上の英文の there は、people という名詞を修飾している。

(ex) the then laws その当時の法律

上の英文の then は、law という名詞を修飾している。

(ex) Even a child knows it. 子供だってそれは知っている

上の英文の even は a child という名詞を修飾している。

(ex) Mike alone was absent. マイクだけが休んでいた

上の英文の alone は Mike という名詞を修飾している。

②be動詞の補語になることがある。

(ex) Spring has come and winter is over. 春が来て冬は過ぎ去った

このような種類の副詞は down, in, off, on, out, over, through, up など。

③その他に補語として用いられる例。

(ex) Keep the radio on. ラジオをつけたままにしておきなさい

上の英文の on は、keep の補語(つまり、keep O Cの「C」)になっている。

(ex) What's on? 何を上演[上映]しているの?

上の英文の on は SVCの「C」になっている。

(2)副詞が接続詞的に使われることがある。

(ex) Immediately he saw me, she began to weep. 彼は私の姿を見るとすぐに泣き出した

文頭の immediately は「~するとすぐに」という意味で、二つの「S+V」をつなぐ接続詞として働いている。

(3)副詞が前置詞や他動詞の目的語になることがある。

(ex) They started from there. 彼らはそこからスタートした

She left there. 彼女はそこを去った

5. Rule-21 2. の例外。

- ① deny that S + V ~ 「～でないと言う」
(ex) He denies that he is the criminal. 彼は自分は犯人ではないと言っている
- ② doubt[question] that S + V ~ 「～でないと思う」
= don't think that S + V ~
(ex) I doubt that he actually solved the problem.
彼が本当にその問題と解いたとは思えない
- ③ ensure that S + V ~ 「確実に～するようにする、～を保証する」
(ex) I cannot ensure that he will be here today. 彼が今日来るとは保証できない
Ensure that you eat plenty of fresh fruit and vegetables.
必ず新鮮な果物と野菜を食べるようにしなさい
- ④ see that S + V ~ 「～するよう取り計らう、気をつける」
= see to it that S + V ~
= make sure that S + V ~
(ex) See that all the doors are locked. 全部のドアにかぎをかけるようにしなさい
※ただし see that S + V ~ が「～だとわかる、～が見える」となることもある。
(ex) I see that you are right. 君が正しいことはわかるよ
- ⑤ pretend that S + V ~ 「～のふりをする」
(ex) He pretended that he was studying. 彼は勉強しているふりをした
- ⑥ prefer that S + V ~ 「～を望む」
(ex) I prefer that you (should) wait here. ここで待っていてください
- ⑦ forget[remember] that S + V ~ 「～ということを忘れる[思い出す]」
(ex) I forget that you have lived abroad. 君が外国に住んでいたのを忘れていた
I remembered that I had been there with her.
彼女とそこに行ったことがあるのを思い出した
- ⑧ demand[require/ask/request] that S + V ~ 「～を要求する」
(ex) They demanded that the passage (should) be deleted.
彼らはその一節の削除を要求した
- ⑨ regret that S + V ~ 「～を残念に思う、後悔する」 ☞「思う」型なのだが、ちょっと和訳に注意を要する。
(ex) He regretted that he had been idle. 彼は怠けていたことを悔んだ
I regret that I cannot see you today. 残念ながら今日はお目にかかれません

6. Rule-23 2.3. の例外。

- ① expect O to do[願] ~ 「Oが～することを期待[予想]する」
(ex) I expect him to come on Friday. 私は金曜日に彼が来ると思っている
- ② 知覚動詞 O do[願] ~ 「Oが～するのを見る[聞く、感じるなど]」
(ex) I saw him enter the room. 私は彼がその部屋に入るのを見た
- ③ forbid O to do[願] ~ 「Oが～するのを禁じる」
(ex) I forbid him to go there. 私は彼にそこに行くのを禁じている
- ④ promise O to do[願] ~ 「Oに～することを約束する」
(ex) I promise you not to tell this secret to anyone else.
私は他の誰にもこの秘密を話さないと約束します
☞この to tell ~ の意味上の主語は、目的語の you ではなく、主語の I。
実際、この promise は第四文型であり、以下のように書き換えられる。
⇒ I promise you that I'll not tell this secret to anyone else.

- ⑤ trust O to do[願]〜「Oが〜すると信じる」
 (ex) I will trust you to do your best. 君が最善を尽くすものと信じよう
 ㊦ trust O to do[願]〜には、「Oを信用して〜させる」という意味もある。
 その意味の場合は「〜する方向に仕向ける」型になる。
 (ex) You can trust her to go alone. 彼女を信用して1人で行かせてもいい
- ⑥ 「被害・不利益」を表す have[get]+O+p.p.〜「Oを〜される」
 (ex) She had her ring stolen. 彼女は指輪を盗まれた
 I had my leg broken in the accident. 私はその事故で足の骨を折ってしまった
 ㊦ 同じ have[get]+O+p.p.〜でも「被害・不利益」を表さない場合は、「SはOがされる方向に仕向ける」で訳せる。
 (ex) She had her shoes shined. 彼女は靴を磨いてもらった

7. a lot of A 型の形容詞。

- ① a number of A / numbers of A 「多くのA」 =many A
 =a crowd of A / crowds of A =scores of A
 =a host of A / hosts of A
 ㊦ number の前に good, large, great, amazing(驚くほど), increasing[growing](ますます)など、
 いろいろな形容詞がつくことも多い。
 (ex) An increasing number of people are giving up smoking.
 たばこをやめる人の数がますます増えている
 ㊦ the number of A は「Aの数」。要注意。
 (ex) What is the number of people present? 出席者(の数)は何人ですか
- ② a large amount[quantity] of A 「多量のA」 =much A
 =large amounts[quantities] of A
 =a good[great] deal of A
 (ex) He spent a large amount of money during the trip.
 彼は旅行中に多額のお金を使った
 ㊦ the amount of A は「Aの総額、総計」。要注意。よく似た表現に the bulk of A で「Aの大半」などがある。
 (ex) What is the amount of money you spent?
 君が使った金額は全部でいくらですか
 =a volume of A / volumes of A
 ㊦ the volume of A は「Aの量」
 (ex) the volume of water in a container 容器の中の水の量
- ③ a lot of A / lots of A 「多くのA」 ㊦③は可算名詞、不可算名詞両方に使える。
 =plenty of A
 =a mass of A / masses of A
 (ex) a mass of e-mails 電子メールの山
 masses of treasure たくさんの宝
 =a body of A ㊦「Aのかたまり[集まり]、一連のA」となることもあり。
 (ex) a large body of information 大量の情報
 a body of water 水塊 (池・湖・海など)
 large body of the people 国民の大多数
 =no end of A (切りがないほど) たくさんのA
 (ex) I have no end of trouble 私はとても悩み事が多い
 =loads of A
 =a bunch of A
 (ex) I asked him a bunch of questions 彼にたくさんの質問をした
 ㊦ a bunch of A は「一束のA」「Aの団[一味]」という意味になることもある。
 =an abundance of A
 (ex) an abundance of valuable information たくさんの貴重な情報

- ④ a handful of A 「わずかのA」 =a few[little]
 (ex) Only a handful of people came to the ceremony.
 ほんの数えるほどしかその式典には来なかった
- ⑤ a spot of A 「少量のA、ごくわずかのA」 =a little
 =a trace of A / traces of A
 (ex) I had a spot of whisky. 少量のウイスキーを飲んだ
 =a hint of A
 (ex) a hint of garlic ニンニク少々
 =a bit of A
 ⑤ a bit of A で「一つのA」という意味になることもある。
- ⑥ a (certain) kind[sort] of A 「一種[ある種]のA」 cf; the kind of A は「Aの種」。
 =a form of A
 (ex) He had a kind of feeling that his son would soon come back.
 彼はなんとなく息子がすぐにでも戻って来るような気がした
 ⑥ a kind[sort] of A を「Aの種」、a form of A を「Aの形態」と訳す場合もある。
 (ex) Ice is a form of water. 氷は水の一形態である
 また all kinds[sorts / manner] of A は「あらゆる種類のA」となる。
- ⑦ hundreds of A 「何百ものA」、thousands of A 「何千ものA」
 millions of 「何百万ものA」など。
- ⑧ a series of A 「一連のA、相次ぐA」
 =a sequence of A =a succession of A =a train of A / trains of A a set of A
 =a chain of A =a sequence of A =a course of A =a range of A
 (ex) A series of rainy days made our vacation spoilt.
 一連の雨(続き)で我々の休暇は台無しになった
- ⑨ a variety of A 「さまざまなA、多様なA」 =various A =diverse A =different A
 =varied A =a diversity of A
 (ex) The US has a variety of races. アメリカは多様な人種がいる
 ⑨ the variety of A は「Aの多様性」。ただ、場合によっては a variety of A が、「Aの種類[一種]」となることもある。
 (ex) I was surprised at the variety of his interests. 彼の関心事の多様性には驚いた
 He discovered a new variety of dragonfly. 彼はトンボの新種を発見した
 ⑨ large, great, wide 等が variety の前につくこともある。
 (ex) There were a large variety of flowers. 種々さまざまな花があった
- ⑩ a wide[large] range of A 「広範囲のA」
 (ex) shoes in a large range of sizes いろいろなサイズをとりそろえた靴
 an area with a narrow range of temperatures 気温変化の小さい地域
 a range[chain] of mountains 山脈、山並み
 ⑩ ただし「the range of A」は「Aの幅」と訳す。
 (ex) The range of prices for gasoline was narrow in Japan.
 日本では、ガソリンの価格の上下の幅はわずかだった
- ⑪ dozens of A 「何十ものA」 thousands of A 「何千ものA」
 hundreds of A 「何百ものA」 millions of A 「何百万ものA」
 (ex) This home page links directly dozens of useful sites.
 このホームページは、何十もの便利なサイトと直接リンクしています
- ⑫ a bit of A 1. 「少々のA」
 (ex) a bit of money 少しの金
 2. 「ひとつのA」
 (ex) a bit of luck ひとつの幸運

- ⑬ a couple of A 1. 「2つの」「1対の」
 (ex) a couple of eggs[girls] 2つの卵 [2人の少女]
 a couple of players 2人1組の競技者
 2. 「2、3の(=a few)」「いくつかの」
 (ex) a couple of days ago 数日前に ㊦ of が略されることもある。

⑭ an array of A 「ずらりと並んだA」
 (ex) an array of actors[umbrellas] ずらりと並んだ俳優[かさ]

⑮ a minimum of A 「最小限(度)のA」
 (ex) at a minimum of expense 最小限度の費用で

⑯ a (certain) degree[extent] of A 「ある程度のA」
 ㊦ ちなみに a high degree of A は「高度のA」。a vast extent of A は「莫大なA」。

⑰ 物質名詞(不可算名詞)を数える際に使う表現。

- | | |
|---------------------------------|-------------------------------------|
| 1. a cup of coffee | 「一杯のコーヒー」 |
| 2. a glass of water | 「一杯の水」 |
| 3. a slice of bread | 「一枚のパン」 |
| 4. a loaf of bread | 「一塊のパン」 |
| 5. a bottle of ink | 「一本のインク」 |
| 6. a sheet of paper | 「一枚の紙」 |
| 7. a spoonful of sugar | 「(スプーン) 一杯の砂糖」 |
| 8. a lump of sugar | 「(一個の) 角砂糖」 |
| 9. a cake[bar] of soap | 「(一個の) 石けん」 |
| 10. a piece of baggage[luggage] | 「(一個の) 荷物」 |
| 11. a piece of furniture | 「(一個の) 家具」 |
| 12. a piece of information | 「一つの情報」 |
| 13. a piece of advice | 「一つの忠告」 |
| 14. a pair of | ㊦ 前に付く名詞。㊦ 「対(二つ一組)」で一つのものとなる名詞に付く。 |
- | | | |
|--------------------------|----------------|----------------|
| glasses[spectacles] 「眼鏡」 | scissors 「はさみ」 | trousers 「ズボン」 |
| chopsticks 「箸(はし)」 | pajamas 「パジャマ」 | pants 「パンツ」 |
| shoes 「靴」 | socks 「靴下」 | gloves 「手袋」 |
- ㊦ information や advice, news などの抽象名詞を数える場合には「a piece of～」を用いる。
 ㊦ 「a pair of～」が前に付く名詞は、常に複数形で用いる名詞である。

8. 「～に関して(は・の)、～に関する、～について(は・の)」のいろいろ。

on A	concerning A	in[with] regard to A	in[with] relation[reference] to A
about A	concerned with A	with respect to A	associated with A
as to A	regarding A	involved in A	when it comes to A
as for A	in the way of A	respecting A	relating[referring/relative] to A
as regards[concerns/respects] A		in connection with A	in terms of A

このうち about が最も一般的な語。

on は内容が専門的で高度な場合に用いる。つまり同じ「について」でも about は、「**拡散的(に)周辺**」がその『核』のイメージなので、talk about A といった場合、「A について(話題を広げて)あれこれ話す」という「**拡散的**」なニュアンスになる。一方 on の場合、「**接触**」がその『核』のイメージなので、あるテーマについてより密に(近づいた)、つまり「**専門的な**」という意味が生じる。

㊦ a book about Japan は「日本に関する一般書」、a book on Japan なら「日本に関する専門書」となる。
 of は about としばしば交換できるが、of は(全般的に)軽く触れるような場合に用いられる。talk of A と言った場合、「A についてちょっと話す」といったニュアンスになる。over は「～をめぐる」の意で、しばしば(長期にわたる)意見の対立・不一致を含意する。

concerning[concerned with], with regard[respect] to, in relation to は、about, on より堅い表現となる。

as to は、書き言葉で多く用いられ、疑問詞節が続く場合に好まれるが、それ以外では about, on, of が普通。

as for は、既に出た話題に関連して別のことを述べる場合に用いる。通例次の文、又は節の初め(つまり文頭、節頭)に置かれる。時に軽蔑や無関心を含意する。

(ex) Tom has few close friends. As for [=As to] his sister, she is always surrounded by friends.
トムには親友が殆どいない。彼の姉はどうかと言えば、いつも友人に囲まれている

9. 訳出に工夫を要する関係詞節。

(1) (関係詞の)直前の名詞が、必ずしも先行詞とは限らない。

(直前よりも)更に前の名詞が先行詞になることもある。それを「数」で判断できることもあるが、文脈判断によらざるを得ないこともある。

(2) 関係詞節がカンマ(,)によってはさまれ、文中に挿入されていた場合の訳出の仕方。

① Rule-62 3.(3) した紹介した継続用法の(3ステップの)訳出の仕方でもとめる

② 従来通りの(直前の)先行詞にかけて訳す訳出の仕方でもとめる

②の例はあげておこう。

(ex) In a big city, which has become more complicated, many crimes occur.
より複雑化した大都会では、多くの犯罪が起きている

(3) 関係代名詞的に用いられる than(先行詞に比較級がついている場合に用いられる)。

関係代名詞として使われているかどうかの見極めはカンタンで、than の後ろに「S(主語)」「O(目的語)」「C(補語)」のどれか一つが欠けた、いわゆる「不完全な文」が続いていたら、その than は関係代名詞。関係代名詞だとわかれば、比較級が前についている名詞(つまり先行詞)に than 以下をかけて訳したらいい。和訳は否定的な訳し方がピッタリはまることが多い。

(ex) Bill eats more food than is good for him.

↑
ビルは自分にとって健康に良い以上にたくさん食べる
⇒ ビルは体によくないほどたくさん食べる
🔍 than は more food という名詞を先行詞にとる主格の関係代名詞と見ることができる。

The universe is made of more stars than anybody can count.

↑
宇宙は誰もが数えられるよりもっと多くの星々からできている
⇒ 宇宙は数えきれないほど多くの星からできている
🔍 than は more stars(それ以上に多くの星)を先行詞にとる、目的格の関係代名詞と見ることができる。

(4) 「前置詞(句)+関係代名詞」の訳出の仕方について。

① 他の関係代名詞と同じく、単なる接着剤としての機能と判断して、訳出しない。

(ex) A sustainable society is one in which people use natural resources carefully, always thinking about how to replace them.

《語句》 sustainable: 持続可能な
natural resources: 天然資源

one = 「a+既出の単数名詞」
replace: ~を置き換える、代替する

「持続可能な社会とは、人々が天然資源を慎重に使い、そして常にどのようにそれらを置き換えるかを考えている社会である」

②前置詞を訳に活かす方法。

1. 「前置詞+関係代名詞」の手前でいったん(区切って)そこまでで訳をまとめ、
2. 「そして(=and)」 「しかし(=but)」 「なぜなら(=because)」 といった接続詞を補い、
3. 関係代名詞に先行詞を代入し、前置詞の意味も活かして、関係詞節を訳出する。
その際、「前置詞+関係代名詞」部分だけでいったん意味をまとめるといい。

特に「イディオム的な前置詞(句)+関係代名詞」の場合や、スラッシュリーディングなどでは、この手法で和訳すると速読につながる。

(ex) He set out on a dangerous adventure in the course of which he had to feel his way with the utmost care.

《語句》 set out on A: Aに乗り出す[出発する] with the utmost care:最大の注意を払って
feel one's way:手さぐりで進んでいく in the course of A: Aの間で(において)

☞ in the course of をワンセットで一つの前置詞とみなす。このように、複数の語句が集まって(ワンセットで)一つの前置詞の働きをするものを「群前置詞」と言う。

He set out on a dangerous adventure / in the course of which /
彼は危険に満ちた冒険に出発した そしてその冒険の間(じゅう)
 =and in the course of the adventure

he had to feel his way / with the utmost care.
手さぐりをしながら(先を)進んでいかなければならなかった 最大限の注意をもって→注意を払って

③「+,前置詞+which+名詞」。

(ex) The storm raged all night, during which time the climbers waited to be rescued.

「+,前置詞+which+名詞」の形になる英文は、その部分を「接続詞+前置詞+that[those]+名詞」で書き換えられる。

※補う接続詞は「そして」「しかし」「なぜなら」など。そのうちどれにするかは前後関係[文脈判断]。

⇒ The storm raged all night and during that time the climbers waited to be rescued.
 その嵐は一晩中吹き荒れ、そしてその間、登山者たちは救援を待っていた

④「前置詞+which[whom]+to do[彫]」。

(ex) Everybody needs something for which to live.

誰でもみよ、なにか生きる目的が必要である「生きがいが必要である」

上の例文は非常に堅い言い方で、あまり普通使う形ではない。が、もし長文などでこの表現が出てきたときには、以下のどちらかでこれを処理するといいい。

1. 「前置詞+which[whom] S should[can] V」で読み換える。
2. 形容詞用法の不定詞で読み換える。

名詞 + 前置詞 + (関係代名詞の)目的格 + to do[彫]〜
 =名詞 + to do[彫]〜 + 前置詞

とすると上の英文は

→ Everybody needs something for which we should live.

→ Everybody needs something to live for.



と書き換えられる。ちなみに for は「目的」を表す。

(5) what について。 ⑤ what を用いたイディオムについては、83ページを参照せよ。

- ① 「こと」「もの」と訳すか、「何(なに)」と訳すかは文脈判断となることが多い。
どちらで訳してもいいこともある。

(ex) What matters most is what we can derive from our life experience.
重要だ 引き出す

最も重要なことは「何が最も重要か」といって、自身の人生経験から何を引き出すことができるかだ

- ② 何にでもなれる関係代名詞 what。
関係代名詞の what は、一般的には「こと」「もの」と訳すが、このような漠然とした訳が成り立つということは、what は「何にでもなりうる言葉」ということなのだ。
たとえば、

I gave him what I had. 私は持っていたものを彼にあげた

この場合の what は、「金」「本」「手紙」「言葉」…いろいろなものがありうる。
what の和訳を「こと」「もの」で済ませられる場合はそれで良いのだが、(文中の) what の中身を示す必要がある(示さないで和訳にならない)場合には、その文脈の中で what が何を指しているのかを具体的に(和訳に)出さなければならない。

(ex) Some people think that if they could, they would like to put the clock back to what they see as a purer age.
時計の針をへにもどす
より純粋な時代

もしできるなら、時計の針を自分達がより純粋な時代とみなす時代に戻したいと思っている人達もいる

- ③ that which[that], things which[that], something which[that] なども、what のイコール表現と見ていい。

ただし、that which について注意したいのは、There is 構文の中で用いられた時。その場合、that と which が離れなければならないことがある。

(ex) There is that about him which makes us have respect for him.
彼には、人に敬意の念を抱かせるなにかがある

which節は、離れたところにある前の(先行詞の) that を修飾している。

There is that about him [which makes us have respect for him].
↑

- (6) 関係詞節内の have to は要注意！

なぜ関係詞節内の have to は要注意かというと、have to と言えばおなじみの「～しなければならない」という意味にならないことが関係詞節内の have to についてはあるから。

(ex) The government should listen to what the victims of an earthquake have to say.

この英文の what節内を「地震の被災者が言わなければならないこと」と訳したのでは減点になる。ここは「地震の被災者の言葉[言い分・話]」と訳さなければならない。なぜなら、what節は元々、

The victims of an earthquake have something to say.

の something が what となって節頭に飛び出したわけで、have は「持っている」という意味の have なのだ(to say は something を修飾する形容詞句。something to say は「言うべきこと → 言い分・話・言葉」となる)。

つまり、関係詞節内の have to には2種類があるということになる。

- ① 「～しなければならない」というおなじみの have to
- ② have something to do^願 から生じた have to

見極め方法は、「(客観的状況により仕方なく)～しなければならない」という訳をして不自然な場合、②タイプと判断したらいい。
必要するに文脈で判断するということ。

ただ what ~ have to say 型の多くは②タイプとっておくといい。

(ex) The king sentenced him to death without listening to what he had to say.

王は彼の言い分を聞くことなく、彼に死罪を言い渡した

《語句》 sentence A(入) to B(刪): AにBを宣告する

(7) 「the+抽象名詞+with which S+V～」のうまい訳し方。

「the+抽象名詞+with which S+V～」は「how+副詞+S+V～」で書き換えられる。
つまり、「どれほど[なんとも]…に、Sは～する」と訳せばいい。

(ex) We were surprised at the ease with which she climbed the mountain.

the ease with which S+V～は、how easily S+V～、つまり「なんとも[どれほど]カンタンにSは～する」と訳してしまえばいい。そうすると全体は「彼女がなんともやすやすと登頂に成功したことに我々は驚いた」となる。

(8) 「the extent to which S+V～」は「how much S+V～(どれほど[どの程度]Sは～するの?)」と考えよ。

(ex) There are many opinions about the extent to which freedom of expression should be guaranteed.

どの程度言論の自由が保証されるべきかについては、多くの意見がある。

(9) the way[manner] in which S+V～は how[the way] S+V～(～の仕方・方法・やり方・どのように[な])で言い換えられる。

(ex) That was the way in which it happened.

=That was how[the way] it happened.

そのようにしてそれは起こったのです

《節の種類のみとめ》

	that節	if節	whether節	what節
名詞節	接続詞「…という(こと)」	「…かどうか」	「…かどうか」	疑・代「なに」 関・代「こと(もの)」
形容詞節	関・代 前の名詞を説明	×	×	×
副詞節	接続詞 下を参照せよ	「もし…なら」「たとえ…としても」	「…であろうとなめらうと」	what we call等のイディオム

- ①名詞節とは、その節が文中でS・O・Cになっている、又は前置詞の後ろに置かれて「前置詞の目的語」になっている節をいう。
 ②形容詞節とは、文中でS・O・Cにはならず、前の名詞を修飾している節をいう。ただ基本的に「形容詞節＝関係詞節」と見ていい(例外はasなど)。
 ③副詞節とは、文中でS・O・Cにはならず、名詞以外(多くの場合、動詞や主節等)を修飾している節をいう。

(注1) 接続詞のthatが副詞節を導く(つまりSOCにならない)場合、その用法は大きく分けて以下の3つ。

① so (that) S+may[can/will]+V～ 「Sが～するために(できるように)」[目的] ⇨「ごくたまに「その結果～」という意味になることもある。」
 =in order that S+may[can/will]+V～

(ex) We tied him up so that he wouldn't be able to escape.

「私達は、逃げられないように彼をきつく縛った」

She will come early in order that you may read her report.

「彼女は真説の前に自分の原稿をあなたに読んでもらうためにきつと早く来るでしょう」

② I, so (that) S+V～ 「その結果～だ」 [結果] ⇨節頭のカンマ(,)は、ないこともある。

(ex) She changed her hairdo completely, so that no one recognized her.

「彼女はヘアスタイルをすっかり変えたので誰も彼女とは分からなかった」

Ⅱ so[such]～that S+(can)+V… ①「とても～なので…(できる)」[結果]

②「～するように(ほど)～だ」 [程度・様態] ⇨この場合、後ろから訳し上げる。

⇨[様態]の場合、soとthatの間には、「動詞」や「過去分詞」が入ることが多い。後ろから訳し上げる。

(ex) The letter is so written that it gives a wrong idea of the facts.

「その手紙は事実をわざと誤解させるように書かれている」

⇨[程度]の場合、「否定文+so～that S+V…」という形になることが多く、これも後ろから訳し上げると良い。

(ex) He was not so busy that he couldn't write to his parents.

「彼は、両親に手紙を書くことができないほど忙しいわけではなかった」

Ⅲ S+be動詞+such that S+V～ 「Sは大変なものなので～」

(ex) His anger was such that he became ill. 「彼の怒りは大変なものだったので、彼は病気になるってしまった」

③ Ⅰ判断を表す語+that S+V～ 「～するなんて」「～とは」「～のだから」 [判断の原因]

(ex) Is he mad that he should say such a silly thing?

「そんなバカなことを言うなんて彼は気がおかしのか」 ⇨例文のように「判断を表す語」とは「人の性格(性質)」を表す語であることが多い。

Ⅱ感情を表す語+that S+V～ 「～して(まで)」「～ので」 [感情の原因]

(ex) We were disappointed that it was raining. 「私達は雨が降っているのがっかりした」

(注2) 接続詞のthat(同格用法)と、関係代名詞のthatの見分け方は、thatの後に「完全な文」がくれば接続詞、「不完全な文」がくれば関係代名詞と見れまい。
 「不完全な文」というのはSOCのうちのどれかが1つが欠けた文のこと。

(ex) You can't deny the fact that you were wrong. ⇨that節内は完全な文。従ってthatは接続詞。

「君が間違っていたという事実を否定できない」 S V C 「～というA(名詞)」と訳す。

I know the fact that will surprise you. ⇨that節内は不完全な文(主語がない)。従ってthatは関係代名詞。

「ほくは君をびっくりさせるような事実を知ってる」 V O

(注3) 接続詞のthatが名詞節になる場合でも、前置詞の目的語になることは基本的にない。例外は以下の2つ。これらは「前置詞+that S+V～」の形で使われる決まり文句として覚えた方が早い。珍しいだけに受験ではよく狙われる。

① in that S+V～:～の点で、～なので

② except (that) S+V～:～を除いて ⇨exceptの後のthatは省略されることが多い。受験では①の方が頻出。

(注4)thatが関係副詞(where, when, why, how)の代用として用いられることもあるが、そのようなthatは普通、省略される。
またthatのその他の用法として「It is □ that ~」の強調構文を作ることがある。この場合のthatの品詞は特定できないので考えなくていい。

(注5)whetherは、「～かどうか」という意味で、S・O・Cのいずれにもなれるが、if節が「～かどうか」という意味になるのは、大抵次の場合。

①以下のような他動詞の目的語になる場合。

know「分かる」、ask「尋ねる」、doubt「疑う」、see「調べる」、tell「分かる」、wonder「思う」等。

(ex) I don't know if [=whether] it is good. 「それがいいかどうか分からない」。

②if節が真正語になる場合。

(ex) It doesn't matter if [=whether] he will come or not. 「彼がくるかどうかは問題ではない」

また文頭のifは、「～かどうか」という意味には決してならない。①「もし～なら」②「たとえ～としても(=even if)」のどちらかである。「～かどうか」という意味のwhetherはS、O、Cにもなれるし、前置詞の後ろにも置ける。またもちろん文頭に置くこともできる。

(注6)whether節内に「or not」がなければ、そのwhether節は100%「～かどうか」と見ていい。

whether to do「原形」～は「～すべきかどうか」という意味しかない。

(注7)whatを用いたイディオムには、以下のようなものがある。このうち①～⑩は副詞節となり、「what節は名詞節を導く」というルールの例外。

①what S is 「現在のS(の姿、性質)」

(ex) His mother made him what he is. 「彼の母が、彼を現在の彼にせしめた」

②what S was[used to be] 「昔のS(の姿、性質)」

(ex) He is not what he was. 「彼は昔の彼ではない」

③what S will be 「未来のS(の姿、性質)」

(ex) I often imagine what my son will be. 「私はよく息子の将来を想像する」

④what S should be 「本来あるべき(理想の)S(の姿、性質)」

=what S ought to be

(ex) Miss Brown is what a lady should be. 「ブラウンさんは理想的な女性だ」

⑤what S seem to be 「見かけのS(の姿、性質)」

(ex) We tend to judge a person by what he seems to be. 「私達は人を見かけて判断しがちだ」

⑥A is to B what[as] C is to D 「AとBの関係はCとDの関係と同じだ」

(ex) Reading is to the mind what food is to the body.

「読書の精神に対する関係は食物の身体に対する関係に同じである」

⑦what we[1, you, they] call 「しやゆる」 =what is called

會成り立方的には what we call C(形・名)は「Cと呼んでいるもの」という名詞節から来ている。

(ex) He is what is called a self-made man. 「彼はしやゆる腕一本で成功した」

⑧what is 比較級 「さらに～なことには」

(ex) It was blowing very hard, and what was worse, it began to snow.

「風がひどく、更に悪いことに雪まで降り出した」

⑨what is more 「おまけに」

(ex) He is well off, and what is more, he is of good birth.

「彼は金持ちで、おまけに名門の出だ」

⑩what with A and (what with) B 「AやらBやらで」

(ex) What with the heat and humidity, he could not sleep well.

「暑いやらむしむしするやらで彼はよく眠れなかった」

	when節	where節	how節	why節	who/which節
名詞節	「いつ」「時(時間)」	「どこ」「場所(合)」	「どのように」「方法」	「なぜ」「理由」	「誰」「どちら」
形容詞節	関・副 前の名詞を説明	関・副 前の名詞を説明	×	関・副 前の名詞を説明	関・代 前の名詞を説明
副詞節	接続詞「…の時・したら」	接続詞「…する所に」等	×	×	×

(注1) when, where, why, howが名詞節を導く場合の訳し方は2種類で、

①それらが「疑問副詞」の場合、「いつ」「どこ」「なぜ」「どのように」と訳せる。

(ex) I don't know when she will come here. 「いつ彼女がここにくるのかわかりません」

O

②それらが「(先行詞が省略された)関係副詞」の場合、「時」「場所(台、所)」「理由」「方法」等と訳せる。以下に例を挙げてみよう。

(ex) Monday is (the day) when I am busiest. 「月曜日は私が一番忙しい時(日・曜日)です」

S V C
Show me (the place) where we can have a drink of water. 「水を飲める所に案内してください」
V O₁ O₂
That is (the reason) why I cannot go. 「それが私のいけない理由です」
S V C

(注2) (副詞節を導く)接続詞としてのwhenには、実際の英文では「～の時・したら」以外に複数の意味があって要注意。

①「前の英文を受けて」(…するとそのとき

(ex) I was thinking about her, when another call came from her.

「私は彼女のことを考えていたが、(と)その時彼女からもう1度電話がかかってきた」

②「通例現在時制の文で」～するときはいつも =whenever

(ex) I get annoyed when I am kept waiting. 「待たされているときはいつもイライラする」

When she listens to the radio, my mother falls asleep. 「母はラジオを聞いているといつも眠ってしまう」

③「対照・譲歩」～なのに、～だというのに、～だけれども(だとしても) ⇨「譲歩」のwhenの用法は頻出!!

(ex) Why did he give up trying, when he might have succeeded?

「彼は成功したかもしれないのにどうしてあきらめてしまったのか」

The heat didn't ease when the sun went down. 「日が沈んだけれども、暑さはやわらかなかった」

④「理由」～なので =since

(ex) I cannot go when I haven't been invited. 「招待されていないので私はいかない」

⑤「現在時制と共に」～ならば ⇨ifを用いるより確実性が強い。

(ex) No one can swim when they haven't learned how. 「泳ぎ方を習っていないければ誰も泳げない」

⑥「形容詞節として直前の名詞を修飾して」～する[した]時の

(ex) I can imagine his astonishment when she asked him to marry her.

「彼女が彼に結婚してほしいと言ったときの彼の驚きを想像できる」

⑦「when S said」Sが約束した時間に

(ex) Call me back when I said. 「今言った時間に電話をかけ直してくれ」

(注3) (副詞節を導く)接続詞としてのwhereがある。

①～する所・場所に(へ・で・では)、～する場合には)

(ex) Put back the book where you found it. 「その本をもとあった場所に戻しておきなさい」

Where there is a will, there is a way. 「意思ある場合には、道はある」⇒「意思あるところ、道は開ける」

②～する所はどこ(へ)でも =wherever

(ex) Go where you like. 「どこでも好きな所へ行きなさい」

③「対照・範囲」～する(である)のに =whereas

～する(である)限りでは

(ex) Where he was shy, his brother was gregarious. 「彼は内気だったが、弟の方は社交的だった」

Where known, the facts have been reported. 「判明している限りではその事実は報告されていた」

(注4) 関係副詞のhowが省略されて、残った先行詞のthe wayが接続詞的に(つまりthe way S+V～という構形で)用いられることがある。その場合、

①the way S+V～が全体で名詞節になっていれば(つまりSOCになったり、前置詞の後ろに置かれたりして)、「～のやり方[方法]」「～の様
「様子・過程」「どのように～」「(～ということ)」と訳せば良い。 =the way[manner] in which S+V～

=the way[manner] that S+V～ =how S+V～

(ex) I don't like the way he talks to me. 「彼の私に対する話し方が気に入らない」

②(in) the way S+V～が全体で副詞節になっていれば(つまりSOCのどれにもなっていないければ)、「～のよう[と]おり」
と訳せば良い。

(ex) You should do it the way you were told. 「言われたようにそれをすべしだ」 =as S+V～

(注5) whatとhowが導く節や句は、基本的に名詞節になる(つまりS・O・Cのどれかになる)。例外はwhat we call等のwhatを用いた決まり文句。

	whoever節 whatever節 whichever節	whenever節 wherever節 however節	as節
名詞節	「…する者は誰でも」 「…するものは何でも」 「…するものはどちらでも」	×	×
形容詞節	×	×	関・代 先行詞を説明
副詞節	「たとえ誰が[を]…しても」 「たとえ何が[を]…しても」 「たとえどちらが[を]…しても」	たとえいつ…しても」「…する時はいつでも」 たとえどこで…しても」「…する所はどこでも」 とえどう…しても」「どんな方法で…しても」	①[時]「の時」「しなから」②[理由]「…なので」 ③[比例]「…につれて」 ④[様態]「…のように」「…だが」「…とは違って」

(注1)「00+ever」節が、副詞節で用いられる(つまりSOCにならない)場合、すべて「たとえ～しても」という譲歩の意味になる点に注意。そしてそれらは「no matter+00」で書き換えられる。

(ex) Whoever comes, I won't change my mind. 「たとえ誰が来ても、ボクは決心を変えません」
=No matter who comes, I won't change my mind.

(注2) 接続詞の(つまり後ろに「S+V」を持つ)asの7割は「時(～のとき・～ながら)」か「理由(～なので)」なので、まずそれで訳してみてもおかしいかは欠の可能性を考えてみたらいい。asが「～につれて[に]伴って[に]」となる場合、節内の動詞(つまりas S+Vの「V」)が「変化(～になる、増える、減る等)」や「進行(ゆく、過ぎる等)」を表していたり、また節内に比較級が使われていることが多い。asが「様態(～のように[に]～と同様・～だが)」を表す場合は、as節内が「(繰り返しを避けるための省略による)不完全な文」や「直前と同じ形の繰り返し[同語反復]」になっていることが多い。

(ex) You must do the work as I do. 「君は、私がするようにその仕事をしなければならぬ」

特に、「～とは違って」となる場合、下の例文のように、asの前後に否定と肯定が入り代わっていることが多い。

(ex) Men usually like wrestling as women do not. 「女性とは違って男性は普通レスリングが好きだ」

(注3) 前置詞のasの場合は、「as+名詞」の形で用い、「～として(は・の)」という訳が基本。ただし、以下は例外として注意(特に③は要注意!)。

①such A as Bで「BのようなA」。

③「as+A(人生の成長段階を表す名詞)」で「Aの頃[時]」。

②the same A as Bで「Bと同じA」。

(ex) As a child, he was poor. 「子供の頃、彼は貧しかった」

(注4)「(as) □ as S+V～」で「Sは□だけれど」という構文もある。□の部分には「形容詞」「副詞」「名詞」等が入る。

(ex) Young as he was, he was brave. 「彼は若かったけれど、勇敢だった」

(注5) 接続詞のasも、名詞にかかってその意味を限定する(つまり例外的に、形容詞節になる)場合がある。特に「as+形容詞・分詞」となる場合、大抵は直前の名詞を修飾している。

(ex) man as compared with other animals 「他の動物と比較した場合の人間」
the history of Japan as we know it 「我々が知っている(ような)日本の歴史」

(注6) 関係代名詞のasとしては、以下の決まり文句が頻出。関係代名詞なのでasの後ろには「不完全な文」くる。

①as is often the case with A 「Aにはよくあることだが」

②as is usual with A 「Aにはいつものことだが」

関係代名詞のasは先行詞よりも前に出ることができるのが特徴。

(ex) As is often the case with him, Tom was late for school. 「Tomにはよくあることだが、彼は学校に遅刻した」

☞上例の文頭のAsは関係代名詞で、先行詞はTom was late for schoolの部分。

(注7) 上記以外の従属接続詞(because, while, though, unless, until等)は副詞節しか導かない(つまりSOCになることはない)。

(注8) who(ever), which(ever), what(ever), whom(ever), whose(ever)の後ろには必ず「不完全な文」が続く。

それ以外の「接続詞」「関係副詞」「前置詞+関係代名詞」「疑問副詞」の後ろには「完全な文」が続く。例外は以下の3つ。

①疑問代名詞として用いられる場合の where。

(ex) Where are you from? 「どちらの出身ですか」

②元々の権語だったものが疑問副詞の how になった場合。

(ex) How are you? 「お元気ですか」

③関係代名詞として用いられる場合の as, that。☞これについては既に説明済み。

また、繰り返しを避けるための省略や、(従属接続詞等の後ろで)「主語+be動詞」が省略されることによって「不完全な文」構造になることはもちろんあり得る。

長文総合問題のストラテジー[戦略]

1. 「ザックリ」読みをし、(1分以内)英文全体の骨格(テーマ・主張・展開)をつかむ。
會論説[評論]文の場合。詳細は90ページを参照。

2. 設問と設問内のキーワードをチェックする。

まずは設問の種類やタイプを探り、解法への戦略・アプローチを確認・整理する。
それからキーワードとは、「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」といった主要品詞。
中でも名詞は最大のキーワード。「名詞は嘘をつかない」という原則がある。
そして後で本文を読んでいく際、にそのキーワードが現れ出したら、そこが設問の
対応箇所の可能性が高いとみて、しっかり読み込んでいくことになる。
それから、名詞の中でも特に「数詞」と「固有名詞」は二重線を引いておくといい。
會「数詞」「固有名詞」は、具体例に属する英文中に含まれることが多い。
つまり段落中盤部(つまりボリュームゾーン)に現れることが多い。

3. キーワードからの「テーマ」の探し方。

- ①「テーマ」…抽象度が高い
「具体例」…抽象度が低い 裏を返せば「具体性が高い」。
- ②チェックしたキーワードを頭の中で並べてみた場合(抽象度を上げてみる)に、
それを包括する概念が見えたら、それが本文のテーマである可能性が高い。
注釈をチェックする際にも、これをしてみるといい。
- ③大学受験で用いられる英文は、社会通念や世間一般の常識から逸脱するような
「テーマ」のものはないと思ってい。
- ④もちろんこの段階での「テーマ」予測は、はずれることもある。その場合は
後で修正すればいい。

4. 各設問の解き方

(1) 下線部和訳問題。

まずは下線部だけの情報で訳してみる。もしそれで訳せない場合は、下線部の
前後を膨らませて補足情報を手に入れる。
會現代入試の下線部和訳問題においては、下線部だけで正解が出せるタイプ
のものが圧倒的に多い。

(2) 空欄穴埋め問題。 會空欄穴埋め問題のタイプは以下の5種類！

- ① 単語・イディオム問題
- ② 文法・語法問題
- ③ 「論理」がヒントになる問題
- ④ 「形[構造]」がヒントになる問題
- ⑤ 文脈問題

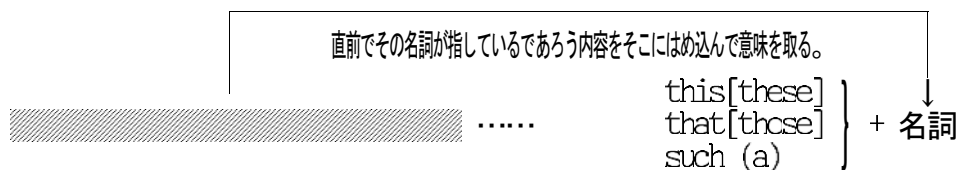
會・①や②は、本文の内容に関係なく解けてしまうので、このタイプは本文に
本格的に取りかかる前に目を通し、解けるなら先に解いてしまうといい。
・③は、論理マーカーが選択肢となる設問と、空欄前後の論理(マーカー)を
ヒントに解くものの2タイプがある。
・選択肢の半数以上が論理マーカーの場合、その(論理マーカーの)いずれか
が正解である可能性が高い。
・④は、選択肢の品詞がバラバラの場合、まず選択肢の品詞分けをするといい。
・パラグラフ冒頭部に空欄が置かれている場合、直後に具体的な言い換えとな
る箇所(パラフレーズ)があることが多い。

(3) パラグラフ冒頭文に空欄部や下線部がある場合。

- ① 指示語を含む下線部であれば、前パラグラフ内に対応箇所がある。
- ② それ以外は、第二文以降の具体的説明部分に対応箇所になることが多い。

(4)下線部説明問題。

- ①下線部が指示語やそれを含む語句であった場合。
パラフレーズや(解答の)対応箇所は、下線部の前後にあることが大半。
中でも下線部が it, this, that などの指示語だったり、the+名詞だったりしたら、直前でそれを指すものを探せばいい。
⚠ただし this の後にコロン(:)があったときは、その this はコロンの後ろの内容を指していることもあるので注意。
(ex) I'll say this: he's completely honest.
このことは言うておこう。彼はまったく正直だ
また下線部が格言・諺などの慣用的な表現の場合、直前[直後]の内容の言い換えであることが大半。
- ②「その理由[例]を書け」というような設問の場合、下線部の後ろに解答のカギがあることが多い(ただし、そうでないこともあるので注意は必要)。
- ③「それ」という意味の it や、「それら[彼ら]」という意味の they が文[節]の主語になっている場合、その it [they] は、直前の文[節]の主語を指していることが多い(ただし、そうでないこともあるので注意は必要)。
- ④また this [these], that [those] や、such (a) の付いた名詞は、直前の内容を抽象的に(一言で)言い換えたもの。したがって、その名詞の意味がわからなかったら[問われていたら]、直前の内容をその名詞に当てはめて[はめ込んで/代入して]、文全体の訳[解答]をまとめてしまえばいい。
⚠代入して(正しいかどうかを)確認する作業は必ず行うこと。



this [these], that [those], such (a) の付いた名詞は、(直前の内容を抽象的に言い換えた表現のために)抽象度の高い難語[表現]であることが多い。それだけにこの類推法を知っておくと、(語句の)知識だけで勝負しようとするライバルに勝つスキルとなりうる。

- ⑤下線部が単語やイディオムなどだった場合、以下の2つ可能性がある。

- (a)単純な知識問題 ⚠このタイプは、本文を読む前に解けてしまう。
(b)文脈・論理問題 ⚠簡単な単語にあえて下線が引かれている場合、その語の「意外な意味」「その文脈での特殊[比喩的]な意味」が問われていることが多い。あるいは逆に(単語集にも載っていないような)難解な語に下線が引かれている場合は、文脈からその意味を類推させる設問だと見たらいい。

(5)内容一致問題。

- ①選択肢は、事前の段階では読まない(読んだとしても選択肢中の「固有名詞」「数詞」に下線を引くくらいにとどめる)。
⚠ただし、最初の「ザックリ」本文に目を通した段階で、本文の内容に深く切り込めた場合には、この時点(つまり設問の先読みの時点)で選択肢を読み、正解を出せるなら、出してしまってもいい。
- ②「分割方式」と「消去法」で正解をあぶり出していく。
消去法については、内容一致問題以外でも言えること。本文[問題文]中に明確な正解の対応箇所が見つからない場合には、確実に不正解だと分かる選択肢から消していくやり方(つまり消去法)で正解をあぶり出していくといい。

③正解の選択肢と本文中の対応箇所は、内容的には一致するが、表現方法は必ず異なる。これを「同一内容異表現の原則」と言う (P109~111を参照せよ)。

④(これも内容一致問題以外でも言えることだが)、「最も」「唯一の」「必ず」「絶対」「決してない」などの語(要する程度があまりに著しい語)が使われている選択肢は×であることが多い。これを「極論不一致の原則」と言う。例外は本文の内容自体が極論の場合。

(ex) absolutely「絶対に」 all/every「すべての～」 invariably「いつも」
only「唯一の～」 few/little「ほとんど～ない」 never「決して～ない」
without fail「間違いなく」 (almost) always「(ほとんど)いつも」 any「いかなる」
without exception「例外なく」 necessarily/certainly/definitely「必ず」

⑤(「〇〇段落の内容に一致する選択肢を選べ」といった)ある段落限定の内容一致問題は、その段落の冒頭文と最終文を読むと、正解が得られることが多い。

(6)タイトル選択型問題。

タイトル選択型問題の選択肢は、先に全部読んでおいた方がいい。なぜなら間違っている選択肢も、部分的に本文の内容を語ってくれている可能性が高いから。これは本文のテーマ予想に役立つ。

◎正解の選択肢は、一般的に抽象度が(不正解の選択肢と比べ)高い。
時間がないときは、本文[問題文]を6割程度読んだ段階で、最終パラグラフの冒頭文(もしくは最終文)を読んで正解が出せるかどうかをチェックしてみる。

◎タイトル選択問題以外の設問の選択肢の先読みに関するアドバイス。

- ①選択肢が短い、又は読みやすい場合(日本語の場合も)読んでおく。
- ②選択肢が長い、構造が複雑な場合には、キーワードに下線を引くだけにとどめる。「数詞」「固有名詞」はチェックしておくといい。
- ③設問だけで対応箇所を探す十分な情報が手に入った場合には、読まない。

(7)パラグラフ完成問題[文章並べ替え]問題。

解法のカギは「文脈」「論理(マーカー)」「指示語」の三つ。

また、英語は「抽象 ⇒ 具象」へと展開する傾向がある点に着目する。つまり同様の内容でも、より抽象的な内容が先、具体的な内容が後になりやすい。

(8)要約問題。

これについては、105~107ページを参照せよ。

5.具体的な本文の読み方。

(1)本文の種類(「評論文」「説明文」「エッセイ」「小説・物語」とテーマを探る。大学受験の英文の種類は以下の通り。

- ①評論文[論説文]…「テーマ」「主張」「サポート(具体例・論拠)」を持つ文。選挙演説や(新聞の)社説もこれにあたる。現代入試英文の約90%はこのタイプ。
- ②説明文……………「主張」がない。ある事物[現象・人物など]について淡々と(時系列などに沿って)説明をする文。
- ③エッセイ……………個人的な体験[見聞いたこと]について書きながら、それについての筆者の思いを語る文。具体的な読み解き方については108ページを参照。
- ④小説・物語……………具体的な読み解き方については108~109ページを参照。
- ⑤その他(会話文など)

(2)「ザックリ ⇒ ジックリへ」が、評論系長文問題を効率よく読み解くための近道。まず「ザックリ」読んで本文の「骨格(テーマ・主張・論)」を探る。手順は以下の通り。

①簡易版

1.注釈をチェックする。

☞未知語のチェック目的以外に、注釈から本文のテーマを類推できる場合もある。

2.本文の第一パラグラフ、第二パラグラフの冒頭文にさっと目を通してみる。

それをするだけで、ザックリ「テーマ」を予想できる(ヒントが得られる)場合がある。超長文の場合、第三(第四)パラグラフまで目を広げてもいい。また最終パラグラフが短い場合、その冒頭文[もしくは最終文]を読んでおく。それをするによって、本文のゴール・落とし所を先につかんでおく。

②本格版

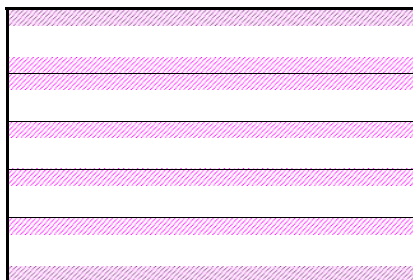
1.注釈をチェックする。

2.第一パラグラフと最終パラグラフだけは第一文[冒頭文]と最終文。それ以外のパラグラフは第一文[冒頭文]のみをまず読む。

(a)第一パラグラフと最終パラグラフについては、2～3文程度の短い構成のものならこの時点で(冒頭と最終文のみと言わず)全部読んでもいい。

(b)第一文が情報として不完全だったり、曖昧だった場合は、その前後を読んで不足している情報を補うのはかまわない。

3.大文字の逆接語を含む英文(特に第二文)、「私は思う」系のフレーズ(I think[believe]…, In my opinion など)のような、トピックセンテンスを暗示させるようなフレーズを含む英文もあれば、そこも読んでおく。



①大文字の逆接語を含む英文。

☞パラグラフ冒頭文、第二文の場合、小文字の逆接語の後ろの文も読んでおくといい。

+

②I think[In my opinion…]
などのフレーズを含む英文。

☞冒頭文の後にすぐ設問が続いている場合には、(情報的に連続している可能性が高いので)その設問は解けるなら解いてしまった方がいい。

☞この手法が功を奏しないのは、以下の4タイプの長文問題。

1.物語長文(一部のエッセイ) 2.一つ一つのパラグラフが短すぎる長文

3.会話長文

ただし、その場合でも、「テーマ」「(論旨)展開」「結論[主張]」を理解・整理しながら読む姿勢が大切。

③「(本文全体の)テーマ」候補を探る際の基準。

1.第一候補は、第一パラグラフ冒頭文中の最も抽象度の高い語[表現・概念]。

☞第二文が逆接語で始まっている場合には、第二文がトピックセンテンスであることが多い。

・また第一パラグラフ冒頭、もしくは末尾の疑問文はテーマを暗示していることが多い。

2.第二パラグラフ冒頭文が「具体例」「論拠」を示す内容だった場合、第一パラグラフ冒頭文(または最終文)が、本文全体のテーマであることが多い。

3.第二パラグラフ冒頭文が逆接語で始まっている場合、それが本文のテーマのことがある。

4.第一パラグラフ冒頭文が、いきなり固有名詞や個別的事例で始まっている場合、それがテーマのこともあるが、それよりも第一パラグラフ末尾、または第二パラグラフ冒頭に本文のテーマが述べられていることが多い。

(3)次に本文を「ジックリ」読んでいく。

①基本は「**読みながら解きながら**」。

本文を読んでいく中で、設問の対応箇所が見つかった時点で(その場で)解く。つまり「読む」作業と、「解く」作業を同時進行で行っていく。

②「**分割方式**」で。

本文を複数分割し、その分割した箇所まで読んだところで、(一旦読みを止め)解ける設問、消せる選択肢がないかチェックをする。

「英文同士の関係[論理]を意識して読め！」

1.連続する英文同士の「論理」「関係」を意識しながら読むことが、いわゆる「構造分析」レベルの読解から飛躍するための第一歩。

2.英文と英文が論理マーカー(However, Therefore …)なしで直接連続しているような場合、自身で「**つなぎ語**」を英文同士の間に補いながら読んでいくようにするといい。

英文同士の間に補ってあげるような「つなぎ語」の可能性というは大きく分けて以下の3種類(この3種をもって「論理」と言う)。

(1)英文同士が内容的に「逆(又は対照的)」の論理関係でつながっていると判断できれば、

「**しかしながら**」
「**その一方**」
「**対照的に**」
「**それどころか**」

などの日本語を(両者の間に)補ってやる。

(2)英文同士が内容的に「イコール」の論理関係でつながっていると判断できれば

「**例えば**」「**実際**」(「B=Aの具体例・裏付け」の場合)
「**すなわち**」「**つまり**」(「B=Aの言い換え・説明」の場合)
「**おまけに**」「**更に加えて**」(「B=Aの付け加え」の場合)

などの日本語を(両者の間に)補ってやる。

(3)英文同士が内容的に「原因 ⇨ 結果」「結果 ⇨ 原因[その理由]」の論理関係でつながっていると判断できれば

「**それゆえ**」「**そこで**」(「A(原因) ⇨ B(結果)」の場合)
「**というのは~だからだ**」(「B(結果) ⇨ A(原因・理由)」の場合)

などの日本語を(両者の間に)補ってやる。

3.段落冒頭文の後、論理マーカーなしで第二文が続く場合、その第二文は

①第一文とはイコール関係(具体例・言い換えなど)になっている

②第一文とは因果関係(多くは因、つまり**論拠**)になっている

可能性が高い。

「日本語を読むように英語を読み！」

日本語の文章で以下のような文があったとする。

「純粋に数字だけを見れば、日本人の平均所得は過去30年間で5倍になっています」

さて、このあとにどんな展開が予測できるだろうか？ それは、

「日本人の平均所得は過去30年間で5倍になっています」

という内容に対する逆接的な展開だろう。たとえば、

「しかしながら実質所得の点では、決してそうはなっていないのです」

「しかしながら実質所得の点から見れば、逆に30年前と比べてかえって下がっているのです」

といったような。

つまり「純粋に数字だけを見れば」というフレーズから、その直後に述べられる数字 [事実] に対する逆接的な内容・展開がその後に続くことが予想できる。ところが以下の英文で、同じような展開をパッと予想することができない(ただ品詞分解をして英文を日本語に和訳しているだけの) 学生がとても多い。

In sheer numbers, the number of persons engaged in Japan has begun to increase after Lehman's fall.

単純に数字だけを見れば、リーマンショック後、日本の就業者数は増加し始めている

実際、この英文の後には、以下のような内容が続く。

In spite of the numbers, a lot of economists comment that the Japanese economy doesn't yet seem ready to emerge from its lethargy.

このような数字(の増加)にもかかわらず、多くの経済学者たちは、日本経済はいまだその沈滞状態から抜け出す準備が整っていないようだと言評している

このような展開を、In sheer numbers を見た瞬間に予想し、その確認作業としてその後の英文に目を通す(実際その予想は的確に当たる)読者と、そんなこと全く考えずに、ただただ「S、V、O、C、M、P → 〈O〉 ◎…」といった記号を振ることだけが頼りの読者では、どちらが速読、そして速解の力を身に付けられるだろうか。それはもう自明の理。

日本語の文章の「読み」において、普通に行っている「展開を予測しながら読む」アプローチを、英文を読む際にも「普通に」行う習慣が、君の速読に更に磨きをかけてくれることだろう。

「文章は『メイン』と『サポート』によって構成されている！」

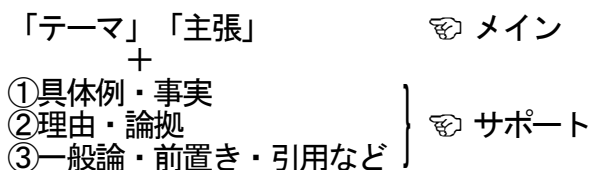
1. 人はなぜ文章を書くのか？

その動機(行動の本質)は、書く側の人間が、ある「テーマ」について、自分なりの「主張」を読み手の側に伝えたい(そして「理解[共感]」してもらいたい)から、と言えるだろう。

したがって、そのような動機をもって書かれた文章(特に評論文[論説文])には、「テーマ」と「筆者の主張」が存在するもの。ただし、ある「テーマ」について、自分の言いたいことを書くだけ書いてそれでおしまい、では説得力のある文章にはなりえない。そこでほとんどの文章には、「主張」に説得力を持たせるための「具体例」「理由」「譲歩」といった内容が付け加えられる。

つまり、「テーマ」「主張」を英文のメインとするなら、「具体例」「理由」「譲

歩」といった個所は、その「サポート」と見ることができる。この「メイン」と「サポート」によってほとんどの文章は構成されている。



(ex) 「原子力発電と我々の暮らしについて論じてみたい。私は原子力発電に賛成だ。なぜなら、原子力なしに現代の生活水準を維持することは不可能だからだ…」

[テーマ] : 「原子力と我々の暮らし」
[主張] : 「原子力発電に賛成だ」
[理由] : 「原子力なしに現代の生活水準維持は不可能だから」

上記の日本語は非常に明快な例だが、基本的に英文においては

「1つのパラグラフで扱っているテーマは1つだけであり、それに関する筆者の主張も1パラグラフに1つのみ」

という暗黙のルールがある（サポートは複数のことは十分ありうる）。「テーマ」は書かれないことも多いが、「テーマ」のない（つまり何について書くわけでもなく、ただダラダラと書いただけのような）文章は、大学受験レベルの英文では存在しないといっている。

そのパラグラフの「主張」を述べている文のことをトピックセンテンス (topic sentence) という。

トピックセンテンスは1文のこともあれば、2、3文にわたる場合もある。トピックセンテンスを読めば、極端な話、サポート部分を読まなくても、そのパラグラフ全体の内容がつかめてしまう。

(ex) 「僕は、NATO軍のユーゴ空爆に賛成だ。なぜなら、ユーゴは国際社会のルールに反しているからだ。国連の調停案にも頑として応じず、非人道的なコソボでのアルバニア人虐殺を続けている…」

上記の例文では、下線部がトピックセンテンスになっており、そこから先は単なるそのサポートでしかない。

英文の読解において一番大事なものは、このメイン（つまりトピックセンテンス）がどれなのかを見抜く目を養うことだと言っている。

《まとめ》

- ① 評論文[論説文]は、基本的にメイン(「テーマ」「主張」とサポート(「具体例」「理由」「譲歩」など)の2種類で構成されている。
- ② パラグラフの「主張」を述べている文のことをトピックセンテンス (topic sentence) と言う。トピックセンテンスを読めば、極端な話、サポート部分を読まなくてもそのパラグラフ全体の内容がつかめてしまう。
- ③ 英文の読解において一番大事なものは、このメイン(つまりトピックセンテンス)がどれなのかを見抜く目を養うこと。

ものもある。あるいはあるいはトピックセンテンス自体がないパラグラフという英文も、中にはあつたりする。その場合は、以下の2つの考え方をしてみるという。

- ①パラグラフ内で一番**一般的[抽象的]な内容を述べている英文**がトピックセンテンス。

☞問題文全体で見た場合でも、問題文の中で最も抽象度の高い概念が、(その問題文の)「テーマ」と判断していいことが多い。

- ②**明確な1文としてトピックセンテンスが示されていない場合は、全体を読んで、個々の事象を大きな枠でとらえ直したきに、そこに現れる共通した特徴、概念を見だし、そこから筆者の言わんとする主張を浮かび上がらせる。**

(ex) 「東京は物価が高い。もちろん地価もだ。1ルームマンションが7～8万すると聞いた。空気も悪い。ベランダに洗濯物を干したら、夕方には灰が積もっていた。犯罪も多いそうだ。特に独り暮らしのお年寄りが狙われやすいらしい」

上記の例文は、明確なトピックセンテンスを持っていないが、全体から得られる共通した特徴から、「東京は住むには適さない」という主張が浮かび上がってくる。

(4)「トピックセンテンス」を探す際のその他の注意点。

- ①過去形は原則として筆者の主張とはみなさない。つまり、**トピックセンテンスは基本的に「現在時制」(又は will などの助動詞)を用いて述べられる。**

- ②現在完了を主節に用いて筆者の主張が述べられている場合、

1. 「これまで…だった。だからこれからは～だ」

2. 「これまで…だった。しかしながらこれからは～だ」

という大きく2通りの展開が考えられる。

それから**現在完了進行形を用いた英文があつたら、その逆の内容が筆者の主張であることが多い。**

☞現在完了進行形とは have been+doing～(これまで～し(続け)てきた)。

たとえば以下のような英文があつた場合

(ex) Our country has been persisting in the principle of equality.
わが国はこれまで平等の原則に固執し続けてきた

この内容の逆、つまり「わが国は、今後は平等の原則に固執し続けるべきではない(し続けることはないだろう)」というのが筆者の言わんとしたいことではないのか?と予測できる。

※もちろん例外もあるので、注意は必要。

- ③あるパラグラフの第2文に**逆接語(But, However, Yet など)が含まれていた場合、第2文の方がトピックセンテンスである可能性が高い。**

逆接語を含む英文(特に逆接語から始まる英文)は、第2文でなくてもトピックセンテンスが含まれてれていることがあるので、そのような英文がパラグラフ内にあつたら注意が必要。

☞特に大文字の But は、(単に直前部だけでなく)そこまでの論旨の流れ全体をひっくり返すことがままある。パラグラフ冒頭の But は、ことさらその傾向が強い。

- ④「一般化」や「譲歩」を表わす論理マーカ―は「逆接」「対比」を表わす論理マーカ―とセットで用いられ、その(「逆接」「対比」を表す論理マーカ―の)後に筆者の「主張(つまりトピックセンテンス)」がくることが多い。

(ex) 「**一般的に言って**老人は記憶力が悪い。**しかし**、昔のこととなると彼らの記憶力は頼りになる。何十年も前のことを、まるで昨日のことのように

覚えている。先日もうちの祖父は…」

「なるほど、最近の若者は頼りない。昔なら男は12歳にでもなれば、侍なら元服、つまり一人前の大人とみなされた。女も15~16歳で嫁に行くのは当たり前だった。しかし、現代という時代性を考慮に入れると、一概にそうとも言えないのではなからうか。価値観の多様化、高度情報化、国際化など、現代の若者を取り巻く情勢は過去に例を見ないほど複雑だ」

上記の2つの例文の場合、「しかし」という逆接語の前までは、単なる「(譲歩の)一般論」であり、「しかし」の後に「主張」が述べられている。

1. 「一般化」を表す論理マーカー

on the whole	「一般的に言って」	④ 1,2の論理マーカー直後の内容は、筆者の主張に(独断性を薄め)客観性や説得力を加味するための、単なる「味付け」「添え物」にすぎない。
in general	「 " 」	
by and large	「 " 」	
as a rule	「 " 」	
generally speaking	「 " 」	
all in all	「だいたい」「概して」	
in most cases	「たいていの場合には」	
in almost all cases	「 " 」	
in many cases	「多くの場合」	
broadly speaking	「大雑把に言って」	
to some extent[degree]	「ある程度は」	
mostly	「大部分は」	
most people	「大抵の人々は」	

2. 「譲歩」を表す論理マーカー

(It is) True (that) S+V~	「なるほど~だ」
Of course, S+V~	「なるほど~だ」
Indeed, S+V~	「なるほど~だ」
No doubt, S+V~	「なるほど~だ」
At first, S+V~	「はじめのうちは~だ」
S+may[might]+V~	「~かもしれない」
Certainly, S+V~	「確かに~だ」
Surely, S+V~	「確かに~だ」
To be sure, S+V~	「確かに~だ」

④ 「確かに~だ」という表現の場合、「譲歩」を示す場合と、(それとは逆に)筆者の主張を補足する際に用いられることもある。may[might]なども単なる推量を意味することもあるが、段落冒頭のこれらの語句、それから逆接の論理マーカーと共に用いられている場合は、100%「譲歩」を表すと思ってい。

- ⑤ 「主張」の再提示を導く論理マーカーがある。パラグラフ末において、筆者は自分の「主張」を最後にもう一度読者に提示することがある。その際によく使われる論理マーカーがある。

(and) so	「それ故」	in short	「要するに」	to summarize	「要するに」
therefore	「それ故」	in a word	「要するに」	thus	「このように」
consequently	「それ故」	in brief	「要するに」		「それ故」「従って」
in consequence	「それ故」	to sum up	「要するに」	in conclusion	「結論として」

- ⑥ パラグラフ冒頭の疑問文は、そのパラグラフの論証すべき「テーマ」を表していることが多い。又、パラグラフ末尾の疑問文は、次パラグラフの(論証すべき)「テーマ」を表わしていることが多い。

(ex) 「平和とは何であろうか。ある人が『平和とは戦争と戦争の間の期間』と言ったのを聞いたことがあるが、この表現は極めて、政治的という

か、皮肉的な言い方で私は好きになれないし、人類が求めるべき真の平和とはそのようなものではないはずだ…」
「『愛』と『恋』の違いは何だろう。ものの本によれば『愛』とは…」

上記の例文では、冒頭の疑問文が「テーマ」となっている。

(ex) 「第二次大戦後の日本を表して、『日本は未だ独立国ではない』『日本はアメリカの属国である』などと言う人々がいる。彼らは、日本は真の独立を果たさねばならないと言う。では彼らの言う『真の独立』とは何であろうか?』

上記の例文では、末尾の疑問文が次のパラグラフの「テーマ」を暗示している。それから複数のパラグラフからなる英文においては、第一パラグラフ冒頭(あるいは末尾)の疑問文は、その文章全体を貫く「テーマ」を示していることが多いということも覚えておくといいたいだろう。

《まとめ》

- ①トピックセンテンスが示されやすいのはパラグラフ冒頭[第1文]。
- ②トピックセンテンスを見抜くヒントになる語句を覚える。
- ③「例えば」「なぜならば」「第一に」等、サポート部分を示す語句を含む文の直前の英文は、トピックセンテンスであることが多い。
- ④トピックセンテンスを探す手がかりが見つからない(あるいはトピックセンテンス自体がないパラグラフというものの中にはある)場合。
 - 1.パラグラフ内で一番一般的[抽象的]な内容を述べている英文がトピックセンテンス。
 - 2.明確な1文としてトピックセンテンスが示されていない場合は、全体を読んで、個々の事象を大きな枠でとらえ直したきに、そこに現れる共通した特徴、概念を見だし、そこから筆者の言わんとする主張を浮かび上がらせる。
- ⑤「トピックセンテンス」を探す際のその他の注意点。
 - 1.トピックセンテンスは基本的に「現在時制」(又は will 等の助動詞)を用いて述べられる(「過去形」は原則として筆者の主張とははみなさない)。
 - 2.現在完了を主節に用いて筆者の主張が述べられることもまずない。特に現在完了進行形(have been+doing~:これまで~し(続け)てきた)を用いた英文があったら、その逆の内容が筆者の主張であることが多い。
 - 3.あるパラグラフの第2文に逆接語(But, However, Yet など)が含まれていた場合、第2文の方がトピックセンテンスである可能性が高い。
逆接語を含む英文(特に逆接語から始まる英文)は、第2文でなくてもトピックセンテンスが含まれてれていることがあるので、逆接語を含む英文がパラグラフ内にあったら注意が必要。
 - 4.「一般化」や「譲歩」を表わす論理マーカ―は「逆接」「対比」を表わす論理マーカ―とセットで用いられ、その(「逆接」「対比」を表す論理マーカ―の)後に筆者の「主張(つまりトピックセンテンス)」がくることが多い。

5.パラグラフ末において、筆者は自分の「主張」を最後に再提示することがある。そのような「主張」の再提示を導く論理マーカーを覚えておくといい。

6.パラグラフ冒頭の疑問文は、そのパラグラフの論証すべき「テーマ」を表していることが多い（又、パラグラフ末尾の疑問文は次パラグラフの論証すべき「テーマ」を表わしていることが多い）。複数のパラグラフからなる英文においては、第一パラグラフ冒頭（あるいは末尾）の疑問文は、その文章全体を貫く「テーマ」を示していることが多い。

7.パラグラフの「テーマ」「トピックセンテンス」を見抜くこれらのルールは、本文全体の「テーマ」「トピックセンテンス」を見抜く際に、拡大適用される。

3.サポート部分の見極め方。

実は、サポート部分を見抜くヒントになる語句がある。その一覧をあげてみよう。

①「具体例」を導く論理マーカー

for example	「例えば」
for instance	「例えば」
to take[give] an example	「例えば」
Let us take an example	「一例をあげよう」
as an example of A	「Aの一例として」
An illustration will make this point clear.	「例えば」
in illustration of A	「Aの例証として」
by way of illustration	「実例として」
Let us take an illustration	「例証してみよう」
This is seen in A	「このことはAに見受けられる」

會特に、これらの論理マーカーがパラグラフの冒頭にあった場合、そのパラグラフ全体が前のパラグラフの「具体例」になっているとみていい。

②「理由」を導く論理マーカー

The reason is that S+V~「その理由は~である」

③「具体例[事実]」を列挙[記]する際によく用いられる論理マーカー

first A. second B. third C. then D. at last[finally/lastly] E.

「まず第一にA。第二にB。第三にC。その次にD。最後にE」

firstly[to begin with] A. secondly B. thirdly C.

「まず第一にA。第二にB。第三にC」

for one thing A. for another thing B.

「一つにはA。もう一つにはB」

in the first place A. in the second place B.

「第一にA。第二にB」

moreover 「更に加えて」 in addition 「更に加えて」

furthermore 「更に加えて」 also 「~もまた」

besides 「更に加えて」

④「固有名詞」「数詞」「(直前の内容とは一見)無関係に見える内容。つまり突然の関係ない話」。

「主張(トピックセンテンス)」には、より抽象的な表現が使われるのに対して、「具体例」や「理由」といったサポートには、より具体的な名詞(固有名詞)や

事件・事実を表わす名詞が使われることが多い。つまり、英文を読んでいて

1.固有名詞

2.数詞

3.(直前の内容とは一見)無関係に見える内容。つまり突然の関係ない話(のいづれか)を含む英文が現れたら、それは、直前の内容の具体例[理由]だとみてほぼ間違いない。

《まとめ》

①サポート部分を見抜くヒントになる語句がある。

1.「具体例」を導く論理マーカがある。

2.「理由」を導く論理マーカがある。

3.「具体例(事実)」を列記する際によく用いられる論理マーカがある。

②「主張(トピックセンテンス)」には、より抽象的な表現が使われるのに対して、「具体例」や「理由」といったサポートには、より具体的な名詞(固有名詞)や事件(事実)を表わす名詞が使われる。つまり、英文を読んでいて、

1.固有名詞

2.数詞

3.(直前の内容とは一見)無関係に見える内容。つまり突然の関係ない話を含む英文が現れたら、それは、直前の内容の具体例[理由]だとみてほぼ間違いない。

4.まとめ

ここまでの内容から、(特に評論文系の)英文を読む際に、読み手の側が注意すべきことは以下の通り。

(1)メインとサポートを見極める。特にメイン、つまりトピックセンテンスがどれなのかを見極める。

それがすぐに分からなくても、少なくとも何について筆者は語っているのか(つまり「テーマ」)を理解する。そしてその「テーマ」について、筆者はどんな判断をしているのか(肯定的・批判的・中立的等)といった点に注意しながら読み進める。

(2)サポート部分はメイン[トピックセンテンス]に対して、どんな役割(「具体例」「理由」「譲歩の一般論」…)を果たしているのかを理解して読み進める。

(3)サポート部分が複数ある場合、サポート部分同士の関係(「具体例の列挙」「理由の列挙」「具体例+理由」…)についても考えてみる。

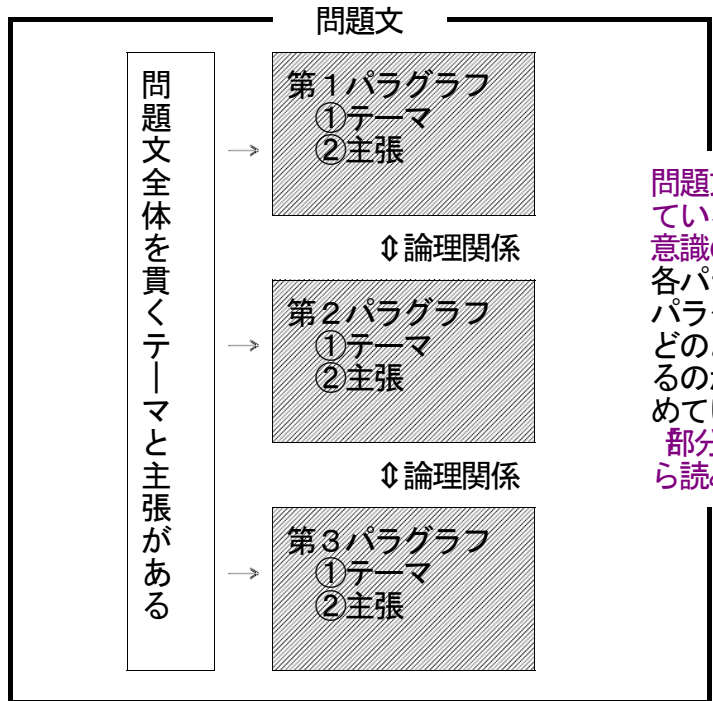
場合によっては、サポートのサポート(「具体例」「理由」等)になるようなパラグラフもあったりする。

これらのことをする場合、先にあげたような論理マーカに注意を払うことによって、その作業がより素早く、正確にできるようになるだろう。

「全体を貫いているテーマ・筆者の主張・論理展開を的確にとらえよ！」

1.本文[問題文]全体を貫いている「テーマ」と「(筆者の)主張」を的確にとらえ、本文[問題文]全体の構成と各パラグラフ間の関連[論理関係]に注目しながら読み進めていくことが大切。

2.全体を通して貫かれているテーマ・主張を常に意識し、それが各パラグラフとどのような関連性を持ち、またそれにどのような影響を与えているのかを考えながら読み進めていく。つまり全体と部分を常に関連させながら読むことが大切。



問題文全体を通して貫かれているテーマ・主張を常に意識の中心にすえ、それが各パラグラフの役割と、各パラグラフ間の論理関係にどのような影響を与えているのかを考えながら読み進めていく、つまり「全体」と「部分」を常に関連させながら読みを進めていくのだ。

3.パラグラフの展開パターン ④評論文[論説文]の目的は、読者を説得すること。相手を説得する[納得させる]には型がある。

(1) (「テーマ」 ⇨) 「主張」 ⇨ 「具体例」や「理由[論拠]」 (⇨ 「主張の再提示」)

④このパターンが最も一般的。つまり

- ・冒頭文[第一文]…テーマ・主張
- ・第二文以降…具体例・理由[論拠]
- ・最終文…1.主張の再提示
2.まとめ・言い換え(そのパラグラフ全体の内容をまとめる。または直前の内容をまとめる。言い換える)
3.具体例・理由[論拠]
4.次パラグラフのテーマの暗示 ④特に最終文が疑問文の場合、その可能性が高い。

(2) 「一般論」(又は「譲歩」) ⇨ { ⇨ 「主張」 ⇨ 「具体例」や「理由」
⇨ [逆接] ⇨ 「主張」 ⇨ 「具体例」など
④「一般論」→「それに反する筆者の主張」パターンの方が多い。

(3) 「定義・引用・エピソード…」 ⇨ { ⇨ 「主張」 ⇨ 「具体例」や「理由」
⇨ [事実]や「一般論」⇨ 「主張」

(4) 「分類[比較]」⇨ 「主張」
④「分類[比較]」の仕方には2種類ある。
1.両者の類似点を列挙していくやり方
2.両者の相違点を列挙していくやり方 ④2のパターンの方が多い。

(5) 「分類[比較]」

(6) ① 「疑問」 ⇨ 「解答」

(ex) 「なぜ未成年者に喫煙と飲酒が許されていないのだろうか。それにはわけがある。つまり…」

② 「問題提示」 ⇨ 「解決」

(ex) 「大都市は様々な問題を抱えている。まず第一に…。これらの抜本的な解決策とは…」

(7) ① 「事実[結果]」 ⇨ 「その原因」

(ex) 「現在のアフリカは飢餓問題に苦しんでいる。そしてその原因は大きく分けて2つある。第一の原因は…。第二の原因は…」

② 「事実[原因]」 ⇨ 「その結果」

(ex) 「現代の若い女性の過激なダイエットが問題となっている。この種のダイエットにより、結果として将来、女性たちに健康上の大きな障害が出る可能性が高いという指摘がある。具体的には、例えば…」

「読む」という行為は、「予測[予想]と修正」の連続!

1.特に評論文の場合、以下に注意しながら、その先に続く内容や論旨展開を予測[予想]しながら読み進めることが大切。

①論理を構成する語句やパラグラフの展開パターン

②筆者の主張[トピックセンテンス]となるメイン部分であることを暗示する語句

③具体例など、サポート部分であることを暗示する語句

④⑤⑥については、94～99ページ、104ページを参照せよ。

具体例にして、設問にも関係ない箇所であれば、読み飛ばしてかまわないことも多い。

2.連続する英文同士の「論理」を意識する(101ページを参照せよ)。

3.欧米人の思考の癖を理解して読む(102ページを参照せよ)。

①二項対立 ②主観(主張)→客観(論拠・事例・データ)の連続 ③論証責任

④否定したままで終わらない ⑤抽象 → 具体 ⑥バリエーション など

4.日本語を読むように英語を読む(92ページを参照せよ)。

5.語られていることの裏側[逆]の意味を予測しながら読み進めてみることで、それが読みを深め、更に展開を素早くつかむことにつながるが多い。
つまり「ということは〇〇ってこと?」と、常にその裏・逆・その向こう側にあるものを考え・予想[予測]しながら読みを進める気持ちが大切。

・「昔は石油輸入国だった」 ⇨ 「ということは今は石油輸出国。過去形の文章に出会ったら、常に「今はその逆」と予想を立ててみる。

・「外国米を食べるべきではない」 ⇨ 「国内米を食べるべきだ」

・「日本の方が中国より住みやすい」 ⇨ 「中国の方が日本より住みにくい」

6.抽象的・比喩的な内容[表現]の場合、いかにそれを自身の身近[卑近]な事柄に落とし込んで、その内容をくみ取れるか(つまり「落とし込み力」)が重要になる。

7.特に物語の場合(時として評論文でも)、予測[予想]を覆す展開になることも多いが、外れたとわかれればその時点で修正をすればいい。またそれ[修正する]と同時に、「自分(の中の常識・知識)と筆者の考え方や登場人物の気持ちにどのくらい

の温度差があるか」、「なぜこの人はこう考えるのだろうか？その根拠になっているのはなんなのだろうか？」ということを探る気持ちで読むことも大切。「読む」という行為は、極論すれば「予測[予想]と修正」の連続なのである。

8.エッセイでは、書き手[作者]の心の内面に入り込み、書き手の気持ちになりきって(書き手と一体化して)、その心情(の変化・展開)を理解し、それ追いかけてながら読むことが大切。

◎エッセイは、自身にまつわる出来事について述べつつ、それを通して筆者がある思いを伝えようとするもの。その「思い」を正確につかむのがポイント。

9.状況や流れがつかめなくてもあわてるな！(P104)

10.内容[展開]が複雑な場合にはメモをとれ！(P105)

「欧米人の思考の癖を理解して読め！」

1.二項対立主義。

全く相いれない水と油の二者を俎上に挙げ、それを比較・対比・分析しながら自身の考えを整理したり、また相手を説得しようとする考え方・手法のことを「二項対立主義(binarity)」と言い、これが、欧米人の論理的な思考(パターン)の最もベースなるものと言っている。対比的・逆の関係で扱われやすいテーマ[概念]としては、以下のようなものがある。◎をつけたものは特にその傾向が強い。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| ◎ 「過去と現在[代]」 | 「人間と動物」 |
| ◎ 「一般論と(筆者の)主張」 | 「大人[老人]と子供[若者]」 |
| ◎ 「東洋[日本]と西洋[アメリカ]」 | 「文明[開発]と自然[環境保護]」 |
| 「科学と宗教[哲学]」 | 「理想と現実」 |
| 「男と女」 | 「権力を持つ者と持たない者」 |
| 「理論と実践」 | 「富める者と富まざる者」 |
| 「先進国と途上国」 | 「生と死」 |
| 「都会と田舎」 | 「精神[心]と物質[体]」 |
| 「個[自己]と全体[他]」 | 「専門家と素人[一般人]」 |

2.英語は論証責任を要求する言語。

英語という言語は、筆者があることを主張した場合、必ずそれを論証する(客観的論拠[証拠]・具体例を示す)責任が求められる。言い方を変えれば、「英語は言いつ放しは許されない」のである。読者の側の「なぜ(そう言えるの)?」「論拠[証拠]・具体例を示して」という疑問に答えなければならない。つまり、

「私は～だと思う」「～だと信じる」「○○は～すべきだ」

といった「主観(=主張)」を述べただけで英文が終わることはないと言っている。それをサポート(論証)する、「客観(=論拠・具体例)」が必ず必要になる。したがって読者の側は、英文中で筆者の「主観」を表す内容が現れたら、その後に「論拠[証拠]」「具体例」といった「客観」が続くことを予想して、その後を読まなければならない。「主観」と「客観」は常にセットで現れる。そうしておくといい。英語、特に評論文というのは、このように主観と客観の繰り返しで成り立っているといっても過言ではない。

3.英語は否定して終わることはない。

「○○政権は駄目だ」「××はやめなければならない」「△△は違う」

といったような、あるものを否定した形で文が終わってしまうことは(特に評論文では)英語ではほとんどない。そのような英文を見かけたら、

「ということは、それに代わる(筆者なりの)代案・主張がこの後展開されるはず。それをしっかり押さえて読もう」

という気持ちが必要になる。これもある種、字面の裏側を予測して読むことにつながる。そして「主張」が示されれば、その後には(前述のように)その論証責任を果たす展開が続くことになる。

「筆者の主張と社会通念(あるいは時代背景)とを照合してみよ！」

1.社会通念上、善悪の価値判断が示されている[世間で一致している]ような「テーマ」「問題」を筆者があえて「テーマ」とする[として書く]場合、その展開の仕方は以下の2つ。

- ①「社会の大勢的意見に同調する」
- ②「(社会の大勢的意見に)同調しない」 ☞こちらの展開の方が多い。

「同調する」展開の場合、単に同調するだけでなく筆者独自の根拠があるのかどうか、「同調しない」展開の場合、それは社会の通念を意識した上でのことなのか?、もし意識しているとするなら、大勢的意見を跳ね退けてまで強く訴えようとするその根拠あるいは意図は何なのか…。「それを知りたい」という気持ち(で読み進めること)が大切。

2.評論文などでは、まず一般的な内容、誰もが認めるような内容を書き、その後で前文の内容をひっくり返して、それとは相反する筆者の独自の主張、視点を持つてくるという展開が多い。このような展開が多い理由は以下の通り。

- ①まず世間一般の物の考え方を筆者自ら煎じ詰めて述べることにより、
 - 1.これから語る議論のための土台[前提]作りができる。
 - 2.「自分は世間の人(あるいは大勢的な)物の考え方を理解していますよ」ということを読者にアピールできる。
- ②特に2.により、決して一方的[独断的]な視点から筆者が主張を展開しようとしているわけではないことを読者にアピールする。
- ③結果、その後の自身の主張に「客観性」や「説得力」を持たすことができる。

3.「主観(=主張)」を述べた直後(あるいは、自説を延々と述べてきた後)に、それとは真逆の内容が表れたら、それは(「主張・自説」に客観性や説得力を高めるために添えられた)「譲歩」と見ていい。いずれその「譲歩」はひるがえされ、また「主観・自説」へと戻っていく。「譲歩」が終わって再び「主観・自説」に戻る際には、往々にして「逆接の論理マーカー」がそこに置かれるもの。

「英語は『抽象 → 具象[具体例・説明・論拠』へと展開する!』

1.抽象的内容の後に具体的説明あり。

評論文[論説文]などの場合、あまりに抽象的な内容[表現]で、それが何を言いたいのかわからない文章に出くわすことがある。しかしそのような内容[表現]の後には、多くの場合、その内容を具体的に言い換えたり説明したりする文が続くのが普通。ということは、その具体的な言い換え[説明]部分を正確によ読み取ることができれば、そこから「抽象的内容[表現]」の表す意味を、なんとか類推することができる。

また、英文中に、

- ①固有名詞
- ②数詞
- ③(直前の内容とは一見)無関係に見える内容。つまり突然の関係ない話。

④「～だと仮定[想定]してみよう」という表現。

- ・Let's say (that) S+V～.
- ・Let's suppose (that) S+V～.
- ・Let's assure (that) S+V～.
- ・Suppose (that) S+V～.

⑤「～だと想像してみよう」という表現。

- ・Let's imagine (that) S+V～.
- ・Imagine (that) S+V～.

を含む文が現れたら、それらは直前の内容の具体例[理由]であることがほとんど。またセリフも、③の一種として直前の内容の具体例を示すために用いられているということが多い。

2.問題文の冒頭が(いきなり)「固有名詞」や「個別的な事例」で始まっていたら。その場合、以下のような予測が立てられる。

- ①その「固有名詞」「個別的な事例」は、その文章の「テーマ」と密接な関係を持っており(あるいは「テーマ」そのものであり)、それらについてこの後更に具体的に掘り下げられていく可能性。
- ②その「固有名詞」「個別的な事例」は、単なる「枕詞」「前置き」「(本当の「テーマ」への)呼び水」のようなもので、その後に筆者が語りたい「テーマ」が現れる可能性。

このうち、特に評論文系においては、②のパターンが圧倒的に多い。

②の場合、本当の「テーマ」(を暗示させる内容)が、第一パラグラフ末尾、または第二パラグラフ冒頭などで示されることも多い。

3.「いくつかの(いろいろな・様々な)」「ある」といった形容詞。

several, different, various, a variety of, some など、「いくつかの(いろいろな・様々な)」「ある」といった形容詞のついた(複数)名詞は、直後で詳しく(具体的に)言い換えられる[説明し直される]可能性が高い。

4.具体的説明を示す文が見つからない場合。

その抽象的内容をできるだけ自分の身近で具体的にあるような例で置き換えて考えてみる。

5.「具象[具体] → 抽象」の展開がないわけではない。たとえばそれは、パラグラフ末尾でそのパラグラフ(又は直前の内容)を抽象的な表現で換言するといった展開だ。100ページの「パラグラフの展開パターン」を参照せよ。

「具体例を通じて筆者は何を言いたいのかを考えてみよ！」

抽象的表現とは逆に、あまり具体例が長かったり、数がたくさんあったりすると、それに振り回されてしまうことがある。

④英文によっては、(複数の)具体例の後に、それを一言で要約・換言したフレーズが存在することもある。そしてその(抽象的に換言された)フレーズの具体的な意味を問うような設問もよくある。

具体例とは、読者の理解を助けるために与えられているもの。したがって、具体例に終始するような展開に出会ったときには、与えられたそれらの具体例を大きな枠【くり・範疇】でとらえ直したときに明らかになる共通した特徴を見だし、そこから筆者の言おうとしている主張の輪郭を浮かび上がらせることが大切。

④(抽象的に換言された)フレーズの具体的な意味を問うような設問も、この考え方でほぼ解ける。

特に英語では、同じ趣旨の複数の具体例を並列させたり、同じ主張を言葉尻を変え複数回に渡って何度も繰り返されるということが往々にしてあるもの。

「状況や流れがよくつかめなくてもあわてるな！」

1. 「必要な情報は必ず与えられる」と信じて読む。

特に物語文などに多いのだが、読者の興味を引くためにわざと不明瞭な書き出しで始まっていることがある。そのような英文に出くわした場合、まずは、**現状で「分かっていること(情報・状況)」と、「分かっていること」を整理すること。**そして「分かっていること」を探すつもりで、それ以降の文章を読んでいく。**ほしい情報が得られるまで忍耐強く冷静に読み進めること。**大切なのは「必要な情報はこの先にきっと書いてあるはず」と信じる気持ち。

Ⓜ 大事なのは、わからないといってすぐに「パニックらない」「焦らない」こと。
抽象的(で理解しづらい)な内容も、その後で具体的に言い直されることも多いものだ。

2. 「バリエーション」や意外な「ヒント」に注意する。

特に小説で多い手法なのだが、バリエーションといって、同じ内容(人・物)なのに、出てくるたびに毎回その表現を変えることがあったりする。これは同じ表現の繰り返しを嫌う英語の特徴でもある。評論文でもこの手法は用いられる。

(ex) ジェイソン ⇨ 殺人鬼 ⇨ ヤツ ⇨ あの悪魔 ⇨ 死に神

また、小説・物語などでは、文中のほんのちょっとした言葉(あるいは時制等)に意外な意味が込められていたりすることもある。

「内容[展開]が複雑な場合にはメモをとれ！」

読んでいて前の内容を忘れそう(あるいは展開が複雑)な時は、パラグラフごとに重要と思われる箇所を、メモを取りながら読むといい。

そのパラグラフのどの箇所が重要なのか判断できない場合、各パラグラフの第1文(又は最終文)、更に(既に示した)トピックセンテンスを暗示させる語句を含む英文をメモ書きしてみるといい。

Ⓜ また「固有名詞」「数詞」も、メモ書きの中に入れるといい。以下も参照せよ。

「要約は以下の手順でまとめよ！」

1. 基本手順。

ある英文を要約する際、まず以下の4つのことを頭に整理することが大切。

- (1) 問題文全体を貫いている「テーマ」は何か？
- (2) 筆者はその「テーマ」に対して、どのような話の組み立ててで読者に、その「テーマ」に対する自身の考え、つまり「主張」を伝えようとしているのか？
- (3) 筆者の「主張(結論といってもいい)」は何なのか？
- (4) サポート部分(具体例・理由など)はどこか？

(5) 30字を超える要約は「〇〇が……すること[から]」とまとめる。それ以下の字数で要約する場合は「〇〇の + 体言止め」でまとめる。

Ⓜ 「体言止め」とは、語尾を名詞・代名詞などで止める使い方のこと。

20~30字の要約の場合「…すること[から]」「〇〇の+体言止め」どちらでまとめてもいいこともある。

(6) 「〇〇字程度で要約せよ」という指示の場合、30字未満ならプラスマイナス2割、30字以上ならプラスマイナス1割の字数が許容範囲。

2. 要約の中に入れるべきもの。

(1) トピックセンテンス(筆者の主張を一言で述べている文)があれば、それを入れる。

(2)トピックセンテンスがなければ、それを自分で作って入れる。
指定字数が少ない場合は、「テーマ」と「主張」に的をしぼってまとめる。

(3)「キーワード」を入れる。
キーワードとは、その語がなければ要約にはなり得ない、まさに「鍵」となる語のこと。キーワードはトピックセンテンスの中にある場合もあるし、それ以外の箇所に書かれている場合もある。

(4)指定字数が多い場合は、具体例など、サポート部分も入れる。
具体例というものは、筆者が自らの主張を読者により明確に、説得力をもって伝えるための手段、味付けであり、あくまでもサポートでしかない。したがって本文を要約する際には、基本的には「削るべき部分」となる。ただし、制限字数が多く具体例も書かなければ字数が埋まらないといった場合もある。そのような場合、しかも具体例が複数あるような場合には(制限字数に応じて具体例をどの程度入れるかを決めるのだが)、そのどれか1つを抜き出そうとするよりも、すべての具体例を包括する概念[共通項]は何かということを考えてみた方がいい。つまり(抽象度を上げて)具体例を一般化するのだ。そのやり方として、以下のようなものがある。

①同類に属する語を上位の語で代表させる。

(ex) キャベツ
ニンジン
タマネギ
ほうれん草
トマト } ⇨ 「野菜」

②個々の行動[事実]を上位の行動[事実]に統合する。

(ex) John left the house.
He went to the train station.
He bought a ticket.
He got on the train.
He arrived in London. } ⇨ 「ジョンはロンドンに行った」

お金があればいいものが食べられる
いい服も買える
いい車にも乗れる
いい家にも住める
老後も安泰だ } ⇨ 「お金は大事だ」
「お金は様々な願望をかなえてくれる」

③「(様々な)〇〇にも見られるように…」 「〇〇に例証されるように」といったフレーズで簡潔にまとめる。

(ex) 原発といえば、古くはスリーマイル島での事故が思い出される。そして有名なチェルノブイリ。最近では、中越地震による柏崎原発の被害にも寒気がした } ⇨ 「様々な事故にみられるように、原発(事故)恐ろしい」

3.要約の際に削る[捨てる]べきもの。

(1)指定字数が少ない場合はサポート部分は捨てる。

(2)同じ内容を(別の表現などで)繰り返している箇所。付け加え情報的な箇所。

(3)筆者の「主張」とは全く関係ない箇所。

(ex)余談(世間話、言い訳、ぼやき等)、文章冒頭の話のつかみネタなど。

《まとめ》

- ①まず初めに、問題文の「メイン(「テーマ」「主張[結論]）」「サポート」「論旨展開」を整理する。
- ②要約で入れるべきもの。
 - 1.トピックセンテンス(筆者の主張を一言で述べている文)。
 - 2.トピックセンテンスがなければ、それを自分で作る。
◎指定字数が少ない場合は、「テーマ」と「主張」に的をしぼってまとめる。
 - 3.キーワード。
 - 4.指定字数が多い場合は具体例。
制限字数が多く、具体例も書く必要が出てくる場合は、その制限字数に応じて具体例をどの程度入れるかを定める。
特に具体例が複数あるような場合は、どれか1つを抜き出すより、全ての具体例を包括する概念[共通項]を抜き出す(「具体例の一般化」)。
 - 5.30字を超える要約は「〇〇が……すること[から]」とまとめる。
それ以下の字数で要約する場合は「〇〇の + 体言止め」でまとめる。
- ③要約で捨てるべきもの。
 - 1.指定字数が少ない場合はサポート部分は捨てる。
 - 2.同じ内容を(別の表現などで)繰り返している箇所や、付け加え情報。
 - 3.筆者の「主張」とは全く関係ない箇所。

「物語[小説]攻略の基本」

1.事前の設問の先読みをする。

設問が本文の内容を類推するのに役立つものなら、(本文を読む前に)先に設問を読んでおく(必要ならメモ書きしておく)。
そして登場人物や場所、出来事など、読み進める際の助けになりそうなキーワードを整理しておく。

2.「5W1H」をメモにとりながら読み進める。

その際のポイントは以下の通り。

- (1)「時と場所(when と where)」そしてその中で「事件とその動機[原因]、展開(what と why と how)」が、どのように主人公の心理との関連の中で進み、結末へと向かっていくのかに着目する。
- (2)登場人物同士の間関係も整理してみる(関係図をメモ書きするのもいい)。
- (3)セリフなども、一体それが誰のセリフなのか毎度確認する。
- (4)he, she, they, it といった代名詞が指すものは誰[何]なのかも確認しながら読み進める。
- (5)登場人物のセリフ、行動などから、その性格、思考、心理を読み取る。

3.「語り手」は誰なのかをはっきりさせる。

ストーリーの語り手(Narrator)は、「作者自身」なのか? 「登場人物の一人」なのか? それとも「主人公自身」なのか? 要するに誰の、どんな視点でストーリーが語られているのかを読み取る。

4.「省略」に注意する。

会話が長い場合には、繰り返しになる部分が省略されてしまっていることが多

い。文法的に不完全な個所に出会ったら、省略の可能性を考慮して、もし省かれているものがあるならそれを補ってみる。

④ LESSON BOOK REVIEW Rule-49 を参照せよ。

また会話の決まり文句[慣用句]などを日頃から増やす努力も必要。

5. 物語系独特の言い換えに注意する。

それは、事実・行動を心情で言い換える(又はその逆の)パターン。

(ex) 「彼の手紙を読もうともしなかった」 = 「彼が大嫌いだった」

6. 「ストーリーライン(話の筋・展開を語っている部分)」と「心情表現(登場人物の心情を語っている部分)」をしっかりと区別して読むこと。

特に「心情表現」に関しては、注意しないと読み落としたり、「ストーリーライン」とごっちゃになりやすい。特に、心情を「動作[行動]」「視点」「風景」などで(代弁させて、あるいは比喩的に)表現することが時としてある。

(ex) 「受話器を置いたテッドの手は小刻みに震えていた」

7. 描出話法にも注意を配る。

心の中で思ったこと[言ったこと]をそのまま文字にする表現方法を描出話法と言う。和訳の際には「〇〇と**思った**」「〇〇と**言った**」という言葉**を補ってあげる**といい。

(ex) They refused her request for an interview again. Lucy sighed.

What else can I do? She felt entirely lost.

彼らは再び彼女の面会の申し入れを拒絶した。ルーシーはため息をついた。
他に何ができるのだろうか。彼女は途方に暮れた

What can I do? の部分は、本来なら Lucy thought what else she could do.

あるいは、She said to herself, "What else can I do?" とすべきところを、心の中で思った こと[言ったこと]をそのまま文字にしている。

「エッセイ攻略の基本」

1. エッセイとは。

エッセイとは、

- ① 筆者の個人的体験・エピソード
- ② 筆者が見聞きしたこと

を通して、それに対する「思い[心情]」や「メッセージ」を伝えようとする文章。

④ その「思い[心情]」「メッセージ」は、(直接的よりも)間接的な表現で語られることも多い。特に筆者独自のたとえや、表現方法をきちんと理解し、伝えたい内容を正確に読み取ることが大切。

比喩的な表現の場合、自身の身近[卑近]な事柄に落とし込んで、その内容をくみ取れるかが重要になる。

2. エッセイを読む際の心得。

したがって読む際には、最終的にその思い[心情]やメッセージが何なのかを理解しようとする気持ちを持って(読みを)進めることが大切。

そしてそのために、エッセイでは、書き手[作者]の心の内面に入り込み、書き手の気持ちになりきって(書き手と一体化して)、その心情(の変化・展開)を理解し、それを追いかけてながら読むことが大切。

それからエッセイの構成としては、

- ① 第一パラグラフがストーリーの起点としてその後の展開を理解する上で重要な役割を果たす
- ② 最終パラグラフ(もしくはその周辺で)、筆者の「思い[心情]」や「メッセ

ージ」が語られる
という展開が多い。

「会話型長文攻略の基本」

1. 場面設定や登場人物の人間関係をおさえる。
2. 会話の決まり文句をおさえる。 ⇒ 「頻出会話表現のまとめ」をHPからDL。
3. 会話文特有の省略に慣れる、会話文のルールを知る。
4. 展開に慣れる。空欄穴埋めの場合、直後にヒントがあることも多い。

⚠️ 会話型長文を手とるには慣れるまで必ず全訳と様子を文を作業を定期継続するとい。解くのはそれからいい。

「同一内容異表現の原則」

「内容一致[真偽]」問題の正解の選択肢の特徴は、正解なのだから内容的に本文と一致しているのは当然だが、表現の仕方が本文とは換えてある(別の表現で「言い換え」られている)。これを「同一内容異表現の原則」と言う。
この同一内容異表現の原則に関する大切なポイントをいくつかあげてみよう。

1. 表現の違いにまどわされずに、内容から正解を正確に見極められるか。

表現方法の変化には、具体的には以下のようなものがある。

(1) 表現[語句]レベルでの言い換え

- ① 単語同士、熟語同士の「言い換え」(同意語、反意語)
- ② 単語 ⇄ 熟語、句 ⇄ 節などの「言い換え」

(2) 内容レベルでの言い換え

- ① 文法構造を転換しての言い換え(態の転換、仮定法 ⇄ 直説法、二重否定、原級・比較級 ⇄ 最上級など)
- ② 「抽象 ⇄ 具体」「直接的 ⇄ 間接[婉曲・比喩]的」の言い換え
- ③ 「因果関係(原因 ⇄ 結果)」での言い換え

(ex) 「その国は大国の庇護の下に入った」 = 「その国の平和は保たれた」

⚠️ 内容一致問題で、本文とは因果関係が逆になってしまっている選択肢があったりする。もちろんそのような選択肢は×になる。

④ 逆の表現を否定する形での言い換え

⚠️ 別の言い方をすれば、ある事実[行動]・心情を別の[裏返した]事実[行動]・心情での「言い換え」

(ex) 「よく欠席していた」 = 「あまり出席しなかった」

「男は嫌い」 = 「女が好き」

このようなある事を裏返したような表現で言い換えるパターンが(同一内容異表現では)最も多い。

⑤ 事実・行動を心情での「言い換え」(又はその逆)、自然現象などを用いてのたとえ[比喩]

(ex) 「彼の手紙を読もうともしなかった」 = 「彼が大嫌いだった」

⚠️ 特に評論文系では②～④(特に④)、エッセイ・物語系では⑤のパターンが多い。

以下の例文はすべて表現方法が異なっているが、内容的にはイコール。

・She explained it clearly. 彼女はそれをはっきりと説明した
= She accounted for it clearly.

・Not all the staff were present. 職員全員が出席していたわけではなかった

- Some staff were present. 出席していた職員もいた
- ・Neither of her parents is dead. 彼女の両親は、両方とも死んではいない
 - =Both of her parents are alive. 彼女の両親は、両方とも生きている
- ・The moment she saw me, she ran away. 彼女は、私を見るとすぐに逃げた
 - =No sooner had she seen me than she ran away.
- ・Nobody but a genius could do such a thing.
 - 天才以外の誰もそんなことはできないだろう
 - =Only a genius could do such a thing. そんなことができるのは天才だけだ
- ・With a little more money, she would be sure to succeed.
 - =If she had a little more money, it would be certain for her to succeed.
- もう少しお金があれば、彼女はきっと成功できるだろうに
- ・They were discussing the problem.
 - 彼らはその問題について話し合っているところだった
 - =The problem was being discussed (by them).
 - その問題は、(彼らによって)話し合われているところだった
- ・Nothing is more interesting than[as interesting as] skiing.
 - スキーよりおもしろいものは他にない
 - =Skiing is more interesting than[as interesting as] anything else.
 - スキーは、他のいかなるものよりもおもしろい
 - =Skiing is the most interesting of all (things).
 - スキーは、すべてのうちで最もおもしろいものだ
- ・I would not have told the truth, if I had known that.
 - それを知っていたら、本当のことは言わなかったのに
 - =Since I didn't know that, I told the truth.
 - それを知らなかったから、本当のことを言ってしまった
- ・In Japan, 20 percent of the people had some experience with volunteering.
 - =In Japan, one person out of five participated in a volunteer activity.
 - 日本では、20%(つまり5分の1)の人たちがボランティア活動を経験していた(に参加していた)
 - ◎上例のような、本文ではパーセントで書かれていたものを、選択肢では分数(もしくはそれに準ずる表現)で書き換えているといったものもよく見かけられる。
- ・Never a moment goes by unless I think of her.
 - 一時として彼女のことを思わないことはない
 - =I always think of her. いつも彼女のことを思っている

このように、その表現方法に惑わされることなく、内容的に本文と一致しているものを正確として選択できるかがこのタイプの設問のポイントになっている。

2. 受験生を引っ掛けさせようとする出題者のワナに引っかかるな。

- こういった「内容一致[真偽]」型の問題でもうひとつ注意しておいてほしいのは、**真偽は語句の類似ではなく、内容で判断する**ということ。いくら原文にある語句を用いてあっても、内容が異なっていれば(当たり前だけど)×。
- ◎覚えておくべきこととして、本文中と同じ語(句)を散りばめている選択肢は引っ掛け(つまり×)である可能性の方が高かったりする。
- 特に「**数・量・程度を示す語**」については受験生は引っ掛かりやすいから注意。

most 「大部分」と every, all 「全て」
 some 「いくらか」と any 「どんな～も」
 few 「ほとんど～ない」と a few 「2、3の～」
 little 「ほとんど～ない」と a little 「少量の～」

only a few 「ほんの少しの～」と quite[nct] a few 「たくさん～」
only a little 「ほんのわずかの～」と quite[nct] a little 「たくさん～」
a number of A 「数多くのA」と the number of A 「Aの数」

こういった語句は、形から何となく意味も同じと錯覚しやすいもの。もちろんその内容は異なっている。以下もそのような例だが、両者が内容的には異なることが、瞬時に見切れるだろうか。

・They were almost dead.

彼らは死にかかっていた ☹️ということはまだ死んではいない!
#Most of them died. 彼らの大半は死んだ

☹️ almost については、「もう少し（のところで）」と訳した方がいいことがある。

(ex) He was almost late. 彼はもう少しで遅刻するところだった
I almost won the race. 僕はもう少しでレースに勝つところだった
I almost drowned. すんでのところでおぼれるところだった

・Only a few expected that the film would have a long run.

その映画の長期上演を予想したのは、ほんのわずかの人たちだった
#Quite a few expected that the film would have a long run.
多くの人々が、その映画の長期上演を予想した

3.時制や単数・複数に注意せよ。

本文では現在の話なのに、選択肢では過去の話に内容がすり替えてあることもある。もちろんこんな選択肢も正解にはならないのは当たり前。このような時制や単数・複数のすり替えで受験生を引っ掛けさせようという"意地の悪い"選択肢も中にはあるから要注意。

4.否定語を含まない否定表現に注意する。

☹️48ページを参照せよ。

5.真偽は本文の内容に即して判断すること。

選択肢がたとえ常識や自分の価値観から見ておかしかったとしても、本文の内容と一致していれば正解となる。

6.まとめ—真偽判定のルール。

最後にが正解で何が不正解になるかのルールをまとめておこう。

《正解の選択肢》

表現形態や常識、自分の価値観に関係なく、選択肢の内容が本文と一致しているもの。

《不正解の選択肢》

- (1)内容が本文とは明らかに異なっていたり、関連性がない選択肢。
- (2)関連性はあるが、本文の内容を越えて 逸脱して]しまっている選択肢。
- (3)本文中では明らかな数・量・程度の記述が不明確だったり、異なっている選択肢 (特に、この数・量・程度を表す表現には注意せよ)。
- (4)「最も」「唯一の」「必ず」「絶対」「決して～ない」などの語 (要するに程度が著しい語) が使われている選択肢は、×であることが多い。

関係代名詞の2重限定

1. 関係代名詞の2重限定とは

関係代名詞の2重限定とは、2つの(制限用法の)関係代名詞節が、**接続詞を伴わないで同じ先行詞を修飾する用法**を言います。

① 1つ目の関係代名詞は省略されることもある。
例を挙げてみましょう。

(ex) There are some people (that) I know who can write but not type.

上の英文では、(that) I know と who can write but no type という2つの関係代名詞節が、先行詞(some people)を共に修飾しています。

→ There are some people { (that) I know
who can write but not type }.

上の英文を「二重限定」の意味をしっかりと出して日本語に表せば、以下のようになります。

「私が知っている人の中で[うちで]、(ペンで)字は書けるがタイプは打てないという人が何人かいます」

つまり「私が知っている」とまず一度限定しておいて、「(更にその知っている人の中で)ペンで文字は書けるがタイプは打てない」ともう一度(つまり二重に)限定しているわけです。ちなみに以下の英文は、接続詞(and)で結ばれているので「二重限定」ではありません。

(ex) Joe is a man (whom) we can trust and who always lives up to our expectations.

ジョーは信頼できる男で、また常に我々の期待に応えてくれる男だ

2. 二重限定(の関係詞節)と、and で結ばれた関係詞節の区別とその違い。

二重限定の文では、2つの関係詞節の後の方を省略したり、間に and を入れたると変な意味になることが多いのです。

(ex) Ted is the only person (that) I know who has never been to a foreign country.

テッドは私の知っている人の中で、外国に行ったことのない唯一の人だ

上の英文は、who 以下(つまり後半の関係詞節)を省略したり and を入れたりすると、「私はテッドという人しか知り合いがない」ということになってしまいます。これに対して and で結ばれているふつうの用法(つまり二重限定でない用法)の場合は、

① どちらか一方の関係詞節を省略しても文として成り立つ。

② 2つの関係詞節の順序を入れ換えても意味は変わらない。

先程の英文を例にあげて考えてみると

Joe is a man whom we can trust.

Joe is a man who always lives up to our expectations.

Joe is a man who always lives up to our expectations and whom we can trust.

上記のどれも文として成り立ち、3つ目の英文については、元の英文と意味が変わりませんね。

3.2 重限定の関係詞節のうまい訳し方。

2重限定の関係詞節のうまい訳し方は、

A(先行詞)+B(関係詞節)+C(関係詞節)

となる部分を

「Bである中で[うちで]、更にそのうちCである(ような)A」
「Bであり、かつCである(ような)A」

とまとめるといいでしょう。
練習問題を2つしてみましょう。

1. This is the novel that you can read easily which is both interesting and instructive.

《語句》

instructive: ためになる both A and B: AとBの両方

2. The goal of the project is to break down the barriers that humans have built which allow us to treat non-human animals as objects and not as creatures with feelings.

(名古屋大)

《語句》

break down: 打ち破る treat A as B: AをBとして扱う creature: 生き物
barrier: 障壁 A not B: BではなくてA
object: 物 feelings: 感情

【解答&解説】

1. この英文は簡単なので訳だけで十分でしょう。「これはあなたが簡単に読め、かつ面白くてためになる小説です」となります。
2. 骨組みは、「そのプロジェクトの目的は、that以下であり、かつ which 以下のような障壁を打ち破ることです」となります。that節は「人間が作った」、which節は「人間以外の動物を、感情を持った動物としてではなく物として扱う」。これをまとめると、「そのプロジェクトの目的は、人間が作った障壁の中で、更にそのうち人間以外の動物を、感情を持った動物としてではなく物として扱う原因となっている障壁を打ち破ることです」となります。
④ allow O to do[彫]~の訳出については **LESSON BOOK REVIEW Rule-23 2.(2)** をうまく利用するといいい。

《課外授業②》

「その英文の動詞の数 - 1 = その英文の(従位)接続詞・関係詞・疑問詞の数」

このルールについて補足しておかなければならないことがあります。それは、このルールには例外が3つあるということです。具体的には以下になります。

(1) 疑問詞が先頭についた疑問文。

- ① When can you do that? いつそれをやれますか
② When did you decide where you're going for your vacation?
休暇に行くつもりをいつ決めたのですか

上の英文で(1)は動詞1つと疑問詞1つ、(2)は動詞2つと疑問詞2つで、上記のルールに当てはまらない。

(2) 接続詞・関係詞が省略される場合。

- ① The man I love is you. 私が好きな男性はあなたです
- ② I think he is right. 彼は正しいと思います

①の英文は動詞が2つ(loveとis)、②の英文も動詞が2つ(thinkとis)だが、両英文とも接続詞・関係詞・疑問詞を含んでいない。その理由は①の英文の場合、関係代名詞の whom が man の後ろに、②の英文の場合、接続詞の that が think の後ろに省略されているから。ただし省略されているだけで先のルールがあてはまっていなわけではない。

(3) (副詞節を導く)従位接続詞の後ろで「主語+be動詞」が省略される場合。

これについては LESSON BOOK REVIEW Rule-53 を参照せよ。

では一つ英文を解いてみましょう。以下の英文を訳してみてください。

The most important reason changing nature's secret code is controversial is that the DNA in food is changed.

《語句》 secret code: 遺伝子コード
 controversial: 議論を呼ぶ[巻き起こす]、意見の分かれる

【解説】

- ①この英文には動詞が3つ(is / is / is)ありますが、that という接続詞が1つあるのみです。本来なら $3 - 1 = 2$ ですから、あともう1つ「(従位)接続詞」「関係詞」「疑問詞」のどれかがなくてはならないはずです。
- ②実はこの英文の reason と changing の間には関係詞(why)が省略されているのです。全体の構造と全訳は以下のようになります。

The most important reason

⑤

[(why) changing nature's secret code is controversial]

is

⑥

that the DNA in food is changed

(接)

S ↑

↓ V

C

【解答】

「自然界の遺伝子コードを変えることがその意見の分かれるものである最も重要な理由は、食物中のDNAを変えてしまうことになるということだ」

《課外授業③》

ネクサス(NEXUS)

さて皆さんネクサス(NEXUS)という言葉を知っていますか? これは簡単に言うと「意味の上での主語と述語の関係」のことです。例えば

(ex) It is important for you to study hard.
 君は一生懸命勉強することが大切だ

上の英文中の(構文上の)S+Vはもちろん It is ですが、for you の you と to study

の間にも「君が勉強する」という(意味の上での)主語と述語の関係が成立しています(LESSON BOOK REVIEW Rule-35 を参照せよ)。このように構文[文型]上以外にも、(繰り返しますが)意味の上での主述関係が英文の中で成立している場合があり、その場合にはこれを意識して訳出)することは、読解では大切な作業となります。

では(上述の for A to do[原形]~以外で)ネクサスが成立するパターンをまとめてみましょう。

①[S V O C構文における] O と C

☞ LESSON BOOK REVIEW Rule-23 を参照せよ。

②所有格[目的格・名詞]と(それらが修飾する)動名詞

☞ LESSON BOOK REVIEW Rule-35 を参照せよ。

③[分詞構文における] 名詞と(それに続く)分詞

☞ LESSON BOOK REVIEW Rule-35 を参照せよ。

④[with O C構文における] O と C

(ex) She was sitting on the bench with her eyes closed.

彼女は目を閉じてベンチに座っていた

☞ her eyes と closed にネクサスが成立している。Her eyes were closed

(彼女の目は閉じていた)と読み換えることができる。

with O C 構文そのものについては LESSON BOOK REVIEW Rule-37

(5) を参照せよ。

⑤所有格と(それらが修飾する)名詞

(ex) He proved his innocence. 彼は自分が無罪であることを証明した

☞ his と innocence にネクサスが成立している。He was innocent(彼は無実だった)と読み換えることができる。

ただし全ての所有格と(それに続く)名詞との間にネクサスが成立するわけではない。LESSON BOOK REVIEW P45 Rule-4 を参照せよ。

⑥形容詞・分詞と(それらが修飾する)名詞

(ex) They were displeased with his increasing reputation.

彼の名声がますます高まっていくことを彼らは快く思わなかった

☞ increasing と reputation にネクサスが成立している。His reputation

was increasing(彼の名声は高まった)と読み換えることができる。

⑦[主格の of が作る] A of B

(ex) The world has changed with the appearance of the new computer.

新しいコンピュータの登場で世の中は変わった

☞ the new computer と the appearance にネクサスが成立している。

The new computer appeared(新しいコンピュータが登場した)と読み換えることができる。

これ以外にも「目的格の of が作る A of B」などもあるので注意 (LESSON BOOK REVIEW P44 を参照せよ)。

⑧[There be動詞+S(名詞)+分詞. における] S(名詞)と分詞

☞これについては LESSON BOOK REVIEW Rule-44 を参照せよ。

a researcher $\left\{ \begin{array}{l} \text{giving it to subjects throughout certain period} \\ \text{(述)} \\ \text{and} \\ \text{asking them at the end whether they thought it had } \sim \text{ effect.} \\ \text{(述)} \end{array} \right.$

【全訳】

「ある薬に関して綿密な科学的な研究の必要性が生じた場合、研究者がそれを被験者にある一定の期間の間中与え、最後に彼らにそれがとても効果があったかどうか尋ねても無駄である」

《課外授業④》

instead に関して

instead という副詞は、「その代わりに」「それどころか」「そうではなくて」などと辞書にはあるが、場合によっては「その代わりに」の「その」が具体的に何を指しているかが、設問に問われることもある。

The city has its pleasures, but she wished instead for the quiet of country life.
 都会には都会なりの楽しみがあるが、彼女はむしろ田舎の生活の静けさを望んだ
 ④ wish for A で「Aを望む」。

Let's go somewhere else instead.
 そこでなくどこかほかの所へ行こうよ

My son never studies in the morning. Instead, he plays basketball with his friends.
 うちの息子は午前中全然勉強しないで、友だちとバスケットをしている

My daughter never studies. Instead, she watches television all day.
 うちの娘は全然勉強しない。それどころか1日中テレビばかり見ている

My father didn't take his success for granted, but considered instead it good luck.
 父は自らの成功を当然と思わず、むしろ幸運と考えた
 ④ take A for granted で「Aを当然とみなす」。not A but B で「AではなくてB」。

《課外授業⑤》

A or B の可能性

1. A or B が「A、またはB」となる場合、AとBはイコール関係にはならない。場合によっては、対比的な内容になる。

(ex) He or I am to go there. 彼か私がそこへ行かなければならない

2. A or B が「A、即ち[いやむしろ]B」となる場合、AとBはイコール関係になる。

(ex) She studies botany, or the science of plants. ④カンマはないことあるので注意。
 彼女は植物学つまり植物に関する学問を研究している

3. A or B が「AであろうとBであろうと」となる場合、A or B がカンマで区切られ、文中で挿入句として用いられている。そしてAとBは対比的な内容になる。

(ex) All men, rich or poor, have equal rights under the law.
 金持ちでも貧乏人でもすべての人は法の下で平等の権利を持っている

《課外授業⑥》

主語(S)と動詞(V)の間に挿入される可能性のある語句[節]

主語(S)と動詞(V)の間に挿入される可能性のある語句(節)には、以下のようなものがある。

S +	{ <ul style="list-style-type: none"> ①名詞(句) ②形容詞(句) ③副詞(句) ④不定詞(句) ⑤分詞(句) ⑥前置詞句 ⑦that節 ⑧疑問詞節 ⑨whether節 ⑩関係詞節 	+ V~
-----	--	------

①⑦⑧⑩の大半は、形容詞句[節]としてSを説明する。それ以外のもの場合、カンマなどにはさまれて挿入される場合、副詞句[節]となることが多い。
 ⑧ただし、中にはカンマなどにはさまれていても形容詞句[節]として訳した方がいい場合もあるので、注意は必要。

それぞれの働きの可能性を整理してみましょう。
 基本的にそのような(主語と動詞の間に挿入される)語句・節の文中での働きは、以下の2つのいずれかです。

- 1.形容詞的にSを説明[修飾]している。 ☞カンマ、ダッシュにはさまれていないことが多い。
- 2.副詞的にV(又は文全体)を修飾している。 ☞カンマ、ダッシュにはさまれることが多い。

《課外授業⑦》

otherwise に関して

この英文、君達ならカンタンに訳せるはず。

(ex) Make haste, otherwise you will be late for school.
 急ぎなさい。さもないと学校に遅刻しますよ

しかし、副詞の otherwise は「さもなければ(=or else)」という意味しかないと考えている人は要注意。なぜならそれでは意味が通じない otherwise が受験ではよく問われるから。

(ex) Judy thought otherwise.

この英文、「ジュディはさもなければ考えた」では全く意味不明だ。しかも実際(特に難関大学では)このような otherwise が問われることの方が多いのだ。

実は、副詞の otherwise には、以下の3種類の意味があるのだ。

- (1) 「もしそうでなければ[そうしないと]、さもなければ」
 ☞ 「(たとえ)そうしでないとしても」と訳す場合もある。
- (2) 「他[別]のやり方で、違ったふうに」 =in a different way
 「異なる状況では、他の状況であれば」 =in different circumstances

(ex) Judy thought otherwise. ジュディはそうは考えなかった
 ☞ 「ジュディは違ったふうに[別のやり方で]考えた」ということ。
 You should have done otherwise. 君は他の方法ですべきだったのに
 You would not have done it otherwise than your parents did.
 あなたも両親がしたようにするほかなかっただろう
 ☞ otherwise than Aで「Aとは違った[A以外の]方法で(は)」。

(3) 「その他の点で(は)、それ以外は」 =in every other respect[way]
=in other respects[ways]

(ex) Nancy has a freckled face, but otherwise she is a very cute girl.

ナンシーはそばかす顔だが、その他の点ではとてもかわいい子だ

The bedroom is a bit too small, but otherwise the house is satisfactory.

寝室がちょっと狭いが、それを別にすればこの家は満足できる

After he retired, he was leading an otherwise happy and uneventful life in the country.

引退後、彼はその他の点では幸せで平穏な田舎暮らしをしていた

上記以外に形容詞の otherwise(そうではない、異なる)もあります。「異なる」という意味では different とほぼ同じと考えればいいでしょう。

(ex) Some are wise and some are otherwise in the world.

世の中には、賢い人もいればそうでない人もいる

《課外授業⑧》

including は for example と同じとみなせることがある

つまり including は、前後を「抽象とその具体例」の意味[論理]関係で導くと知っていれば

General Motors tempted customers away from Ford with a steady stream of innovations including yearly styling changes.

上の英文の innovation がわからなくても、直後に including があるので、前後は「抽象とその具体例」の関係だとわかります。ならば、たとえ innovations including yearly styling changes を「毎年のモデルチェンジを含む様々な刷新」などと訳せなくても、「毎年のモデルチェンジ」と訳せば問題ないとわかります。

⚠ただすべての including がそうなるわけではないので注意。

《課外授業⑨》

英文中の one の可能性

1. 「一[つ・人・個・時]」という意味の名詞の one 。

⚠形容詞としても用いられる。

(ex) She was doctor and nurse all in one. 彼女は医者と看護婦を兼ねていた
No one of you could do it. 君たちは1人ではそれができないだろう

2. 「a+既出の単数名詞」の代用としての(代名詞の) one 。

⚠ちなみに the one は「the+既出の単数名詞」の代用。代名詞の that とほぼ同じ。

(ex) If you need a pen, here's one [=a pen]. ペンが必要ならここにありません

3. 「一般の人」を表す one 。

⚠この one も代名詞。HR-11 も参照せよ。
(ex) One must keep one's promise. 人は約束を守らなくてはならない

共通テストリーディング問題解法の手順

1. 全般的傾向と、全問に共通する解法手順。

(1) 全般的傾向

① 本文の展開と設問構成

大前提として、共通テストは本文の展開[流れ]と設問の順序は、基本的に一致している(たまに例外はある)。

☞つまり、本文を最初から読んでいけば、設問の対応箇所が問一から順に現れるようになっている。

② 正解を見極める際の心得。

(a) 本文の対応箇所と正解の選択肢とは、必ず「同一内容異表現」。

(b) 正解に悩んだら、消去法で(正解を)あぶり出す。

(c) 「最も」「唯一の」「必ず」「絶対」「決して～ない」などの語(要するに、程度があまりに著しい語)が使われている選択肢は、×であることが多い。これを「極論不一致の原則」と言う。

(ex) absolutely「絶対に」 all/every「すべての～」 invariably「いつも」
 only「唯一の～」 few/little「ほとんど～ない」 without exception「例外なく」
 never「決して～ない」 without fail「間違いなく」 (almost) always「(ほとんど)いつも」
 necessarily/certainly/definitely「必ず」 any「いかなる」

ただし、この原則は必ず当てはまるわけではないので、注意は必要。

③ 本文[問題文]を全部読み終えていなくても、正解を出し終えてしまったら、もうそれ以上問題文を読み続ける必要はない。次の問題へ向かう。

(2) 共通する手順

① 問題文冒頭の導入部をまず読んで、設定を確認する。

記事冒頭にそのタイトルが示されている場合には、それも読んで、記事の内容を(できる限り)予測する。

☞タイトルは抽象的で理解しづらいものもある。

② 設問の指示文を読んで、キーワードに下線を引く。

☞下線を引いたキーワードが本文[問題文]中に現れ出したら、そこが設問の対応箇所である可能性が高い。キーワードとは、主要品詞、つまり「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」など。中でも「名詞」は最大のキーワード。そして名詞の中でも「固有名詞」「数詞」は特に要チェック。

選択肢の方は、基本的にこの時点では読まない。読むとすれば以下の場合。

(a) 指示文の方に目ぼしいヒントがない。

(b) 選択肢が短い。または内容が簡単。

(c) 選択肢中の「数詞」「固有名詞」は、下線を引いておくといい。

そのような場合、選択肢のキーワードもチェックする。

内容が複雑な場合、余白にメモ書きをする。☞ただしこれは万一。

☞設問のタイプによっては、選択肢も読んでおいた方がいいものもあるが、それについては後述する。

- ③ヴィジュアル部分（イラスト・グラフ・図表・ポスターなど）がある場合には、**本文を読む前にそれをチェック**しておく。
特にグラフ・図表をチェックする際のポイントは以下の通り。

- (a)タイトル ☞ グラフ・図表が作成されるに至った調査・研究の
(b)横軸・縦軸 目的を間接的に知ることができる。
 (目盛りの) 単位
(c)わかる範囲で、内容もチェック

イラストが本文中にある場合、(本文には書かれていない)イラスト内の情報が解法のヒントになることも多い。
それからポスター部分については、事前にそこを読んでおけば、それはイコール、設問に目を通したことになる。してしまう。

- ④本文を読んでいく際の心得。

- (a)基本は「**読みながら解きながら**」。
本文を読んでいく中で、設問の対応箇所が見つかった時点で（その場で）解く。つまり「読む」作業と、「解く」作業を同時進行で行っていく。
(b)「**分割方式**」で。
本文を複数分割し、その分割した箇所まで読んだところで、（一旦読みを止め、解ける設問、消せる選択肢がないかチェックをする。
☞特に第四問以降の場合、段落ごとに分割方式で設問を確認していくのもいい。
(c)内容が複雑な場合、ポイントになりそうなところは、余白にメモる。

2.設問タイプ別の解法のアドバイスと注意点。

- (1)チラシ・広告・告知文を用いた問題では、本文（チラシ・広告・告知）を読む際、まず**見出しと欄外・注釈をチェック**する。
☞その目的を問う設問の場合、本文前半にそれがあることが大半。
(2)「事実(fact)」と「意見(cpinicn)」を選ばせる設問における両者の区別の仕方。

「事実」

- ・客観(情報)に基づく。
- ・話し手[聞き手]の好き嫌いや、善悪の(価値)判断に左右されない。

.....

※「事実」には普遍性がある。

「意見」

- ・主観(的判断)に基づく。
- ・話し手[聞き手]の好き嫌いや、善悪の(価値)判断に左右されうる。

.....

※ 個人的感想・思い・気持ちも「意見」。

☞このタイプの設問については、選択肢を事前にチェックし、cpinicn と fact のよりわけをしておくといい。
また cpinicn は本文[問題文]の REVIEW&COMMENTIS に対応箇所があることが多い。

- (3)本文中の語・句・節の表す意味を問う設問の場合、

- ①**パラフレーズ**や(解答の)対応箇所は、**問われている語句・フレーズの、直前もしくは直後にある**

☞「パラフレーズ」とは、下線部を別の表現で(わかりやすく)言い換えた語句・節のこと。

- ②端的な**パラフレーズ**がない場合は、その語・句・節を含むパラグラフ全体の流れから類推する。

- (4) エッセイ型の問題（第三問B）では、
- ①筆者[登場人物]の感情の変化・推移を問う設問の場合、これも本文中の対応箇所と正解は、「同一内容異表現」。
 ☞感情の変化・推移を問う設問については、本文を読む前に選択肢(感情の推移)の2つ目までは目を通しておくといい。
 - ②最後に、そのストーリーから得られた教訓・学びなどを問う設問もあり得る。
 ☞その場合、本文の対応箇所は、本文終盤(最終パラグラフなど)にあることが多い。
- (5)2種類の記事を比較して読む問題（第四問）、は分割方式と消去法が解法の基本。
また、「両記事を元にレポートを書こうと思っている。そのタイトルとして最もふさわしいものを選び」という設問の場合、正解は両記事の主旨を合わせ持つものとなるはず。前半の記事を読み終えた段階で選択肢を読み、その主旨が反映されていない選択肢をまず消去してみる。
- (6)複数のグラフ[表]から正しいものを選ぶ設問の場合、問題文[本文]中の対応箇所は複数箇所あることが多い。つまり、1つ目の対応箇所では選択肢を半分絞り込み、2つ目の対応箇所では正解を決定するといった具合である。
- (7)内容一致問題も「分割方式」と「消去法」で正解をあぶりだす。
- (8)時系列に沿って出来事を並べる設問（第五問）では、ポスター中の**年(代)・時系列を示す数詞**をチェックし、それを目印に本文を読んでいく。その年代(を示す表現)が現れたら、そこからはパラグラフ単位での分割方式で設問に答えを出していく。
- (9)第五問によく見られる主人公のモットーを選ぶ設問は、その主人公の人生(とそのエピソード)を俯瞰し、正解を出していく。
- (10)本文の内容を要約した選択肢を選ぶ設問（第五問など）や本文のタイトルを選ぶ設問（第六問など）の場合、（各パラグラフの内容・展開を整理しながら読んでいくことも大切だが）
- ①6割程度読んだ段階で、選択肢をチェック。
 ☞プラスして、最終パラグラフの冒頭文(もしくは最終文)を読んでおくのもいい。
 - ②正解の導き出し方は、消去法で。

《 授業の予復習について 》

1. 予習について

予習に時間を使いすぎてはいけない(やりすぎてはいけない。30分～45分以内で行う)。

予習とは、授業を効率的に聴くために行うもの。予習時にわからない箇所は、「？」などをその部分に書き込んで、授業時にその箇所の説明時には、その箇所をしっかりと聴くというふうにするれば、大事な箇所を聞き逃すことがなく、効率的な聴講ができる。

2. 復習について

脳科学的に、人が最もある情報を記憶するのは、

- (1) 「他人に(その情報を)伝える[教える]とき」
- (2) 「(自身の)感情が揺れ動いたとき(に入ってきた情報)」

である。これを同時に行う復習法は、自分が「講師」と「生徒」の一人二役となって自分に授業をすることだ。そして「生徒」側の自分が「へえ～そうなんだ」「おもしろいなあ!」「すごいすごい!」と、感情を揺らせるリアクションをしながら、「講師」の自分の授業を聴くのだ。それを、当日・三日後・一週間後・十日後・二週間後と、合計5回繰り返す(少なくとも4回はやりたい)。

《 過去問に取り組み始めた際の勉強法 》

受験期後半、過去問に取り組み始める段階に入った際、量をこなしたいのに、なかなか過去問が解けない(内容がつかめない、結果、量をこなせない))ということがよくあるもの。そういうときには

- ①最初から全訳を横に置いて、対訳でその長文を読む。
罫・設問は解かなくてもいい。
・構造などがつかめない部分があれば、講師に質問して解決する。
- ②文全体の意味がつかめたら、訳なしでその長文が日本語の新聞・雑誌を読むような感覚でスラスラ読めるようになるまで、何回も読み込む。
- ③スラスラ読めるようになったら、次の長文も同じ方法で取り組む。
- ④このトレーニングを3週間(1カ月でもいい)続ける。
- ⑤トレーニング終了後、対訳なしで過去問(問題集)を用いての演習に入っていく。

《 「マインドフルネス」のやり方 》

1. スタート姿勢

- ①まず背筋を伸ばして、体を左右横にゆすりながら、体が真っ直ぐになる位置を見つける。「背筋が伸びてその他の体の力は抜けている」楽な姿勢を見つける。天井から伸びた糸に、軽く背中をピンと引っ張られているイメージ。
- ②肩の力を抜いて、目を軽く閉じる。
- ③次に顔(特にアゴ)の力を抜いていく。
罫軽くアゴを前後左右に動かし、その後、口をポカーンとさせ、力を抜く。
- ④「はあ～」と息を長めに(ため息をつくように)吐き切るところから呼吸をはじめ。そのままゆっくりと呼吸を続ける。(鼻から息を吸い)吐くときは「はあ～」と心で言いながら。ちなみに「あ」という音は人をリラックスさせる音なのだ。

2.呼吸

「呼吸の長さをコントロールしない」
「呼吸している『今の瞬間』の体の動き[変化]を客観的に見守る」

というのが最大のポイント！

息が入ってくると、お腹や胸がグッと膨らんでいく。

息が出ていくと、お腹や胸がグッとへこんでいく。

その感じを、ただただ感じ続けて、(客観的に)見守るようなイメージ。

呼吸をコントロールしないで、身体がそうしたいようにさせる(気持ち良いだけ吸って、気持ち良いだけ吐く。ただしゆったりと)。

吸った息が手足の先まで流れ込んでいくように、吐く息が身体の隅々から流れ出ていくように感じながら、呼吸に伴ってお腹や胸がふくらんだり縮んだりする感覚に注意を向け「ふくらみ、ふくらみ、縮み、縮み」と実況を続けていく。

3.わいてくる雑念や感情にとらわれない

単純な作業なので、「ライン来てたな…」「お腹すいたな…」など雑念が浮かんでくるもの。そうしたら「雑念、雑念」と心の中でつぶやき、考えを切り上げ、「戻ります」と唱えて、呼吸に注意を戻す。

不安などの漠然とした感情に駆られた場合、「不安 不安 大丈夫 大丈夫」などと心の中でつぶやき、「戻ります」と唱えて、呼吸に注意を戻す。

4.身体の外にまで注意のフォーカスを広げていく

さらに、自分の周りの空間の隅々に気を配り、そこで気づくことのできる現実の全てを見守るようにしていく。

自分を取り巻く部屋の空気の動き、温度、広さなどを感じ、さらに外側の空間にも(部屋の外の音などに対しても)気を配っていく。それと同時に「ふくらみ、ふくらみ、縮む、縮む」と実況は続けるが、そちらに向ける注意は弱くなり、何か雑念が出てきたことに気づいても、その辺りに漂わせておくようにして(「戻ります」とはせずに)、消えていくのを見届ける。

10分後、最後はまぶたの裏に注意を向けて、そっと目を開いて終了する。

《ハーバード大学の図書館に貼ってある20か条》

1. Sleep now and a dream will come out; Study now and a dream will come true.
「今居眠りすれば君は夢をみる。今学習すれば君は夢が叶う」
2. Today you wasted is tomorrow loser wanted.
「君が無駄にした今日は、どれだけの人が願っても叶わなかった未来」
3. The earliest moment is when you think it's too late.
「物事に取りかかるべき一番早い時は、君が「遅すぎた…」と感じた瞬間」
4. Better do it today than tomorrow.
「今日やるほうが、明日やるよりも何倍も良い」
5. The pain of study is temporary; the pain of not study is lifelong.
「勉強の苦しみは一瞬のものだが、勉強しなかった苦しみは一生続く」
6. You never lack time to study; you just lack the efforts.
「勉強するのに足りないのは時間ではない。努力だ」
7. There might not be a ranking of happiness but there is surely a ranking of success.
「幸福には順位はないが、成功には順位がある」
8. Studying is just one little part of your life; losing it leads to losing the whole life.

「学習は人生の全てではないが、人生の一部として続くものである」

9. Enjoy the pain if it's inevitable.

「苦しみ避けられないのであれば、むしろそれを楽しめ」

10. Waking up earlier and working out harder is the way to success.

「人より早く起き、人より努力して、初めて成功の味を真に噛みしめる事ができる」

11. Nobody succeeds easily without complete self-control and strong perseverance.

「怠惰な者が成功する事は決してない。真の成功者は徹底した自己管理と忍耐力を備えた者である」

12. Time passes by.

「時間は一瞬で過ぎていく」

13. Today's slaver will drain into tomorrow's tear.

「今日の涎(よだれ)は明日の涙となる。この瞬間の誘惑に負けてはならない」

14. Study like a Dog; Play like a gentleman.

「犬の様に学び、紳士の様に遊べ」

15. Stop walking today and you'll have to run tomorrow.

「今日歩くのを止めれば、明日からは走るしかない」

16. A true realist is one who invests in future.

「一番現実的な者は、自分の未来に投資する」

17. Education equals to income.

「教育の優劣が収入の優劣」

18. Today never comes back.

「過ぎ去った今日は二度と帰ってこない」

Live as if you were to die tomorrow. Learn as if you were to live forever.

「明日、死ぬかのように生きろ。永遠に生きるかのようにして、学べ」

(Mahatma Gandhi)

19. Even at this very moment your competitors keep reading.

「今この瞬間も相手は読書をして力を身につけている」

20. No pain, No gain.

「努力無くして結果なし」

《メル・ロビンスの「5秒の法則」》

時間が経てば立つほど、脳は言い訳を始める。ただ、面白い事に、何かをやろうと思ってから5秒以内であれば、この言い訳が出てこない。だから、「5秒の法則」を使うとやる気がなくてもすぐに行動出来る。 by メル・ロビンス

1. やりたい[やらなくてはいけない]ことが頭に浮かんだら、

2. 「5, 4, 3, 2, 1」とカウントダウンを始める。

3. そしてそのやりたい[やらなければならない]ことを、カウントダウン終了と共に「よしっ!」と掛け声と共に、勢いよくスタートする。

更に詳しく知りたい人は、ネットで「メル・ロビンス」で検索してみるといい。

受験に限らず私たちが生きていく上で「時間」ほど大切にしなければならないものはないのではないのでしょうか。しかし大切だとわかってはいても、普段の生活の中で「時間」をうまく使えていないのが私たちでもあります。そこでこんな言葉を君たちに紹介しましょう。「時」の、そして「今」の持つ意味をもう一度考え直すチャンスになれば…そう思います。

「プレゼント」

次のような銀行があると、考えてみましょう。その銀行は、毎朝あなたの口座へ86,400ドルを振り込んでくれます。同時に、その口座の残高は毎日ゼロになります。つまり、86,400ドルの中で、あなたがその日に使い切らなかった金額はすべて消されてしまいます。あなただったらどうしますか。もちろん、毎日86400ドル全額を引き出しますよね。

僕たちは一人一人が同じような銀行を持っています。それは「時間」です。毎朝、あなたに86,400秒が与えられます。毎晩、あなたが上手く使い切らなかった「時間」は消されてしまいます。それは翌日に繰り越されません。それは貸し越しできません。毎日、あなたの為に新しい口座が開かれます。そして、毎晩、その日の残りは消されてしまいます。もし、あなたがその日の預金を全て使い切らなければ、あなたはそれを失ったことになります。過去にさかのぼることはできません。あなたは今日与えられた預金の中から「今」を生きなければなりません。

だから、与えられた「時間」に最大限の投資をしましょう。そして、そこから健康、幸せ、成功のために最大の物を引き出しましょう。時計の針は走り続けています。今日という日に最大限の物を作り出しましょう。

1年の価値を理解するには、落第した学生に聞いてみるといいでしょう。

1ヶ月の価値を理解するには、未熟児を産んだ母親に聞いてみるといいでしょう。

1週間の価値を理解するには、週間新聞の編集者に聞いてみるといいでしょう。

1時間の価値を理解するには、待ち合わせをしている恋人たちに聞いてみるといいでしょう。

1分の価値を理解するには、電車をちょうど乗り過ごした人に聞いてみるといいでしょう。

1秒の価値を理解するには、たった今、事故を避けることができた人に聞いてみるといいでしょう。

10分の1秒の価値を理解するには、オリンピックで銀メダルに終わってしまった人に聞いてみるといいでしょう。

だから、あなたの持っている一瞬一瞬を大切にしましょう。そして、もしあなたがその大切な人生の一時（ひととき）を誰かと過ごそうと思っているのなら、その一時とその相手を十分に大切にしましょう。その人は、あなたの「時間」を使うのに十分ふさわしい人でしょうから。

そして、「時間」は誰も待ってくれないことを覚えましょう。もし今日という日を役立てないままに過ごしてしまえば、それは永久に失われてしまう。二度と戻ってはこないのです。今日という日は、昨日あれほどいろんなことをしようと思っていたあの「明日」なのだということをよく心に刻んでおいて下さい。そしてこの貴重な今日という日もまた、やがて永遠の時の彼方に去ってしまうのだということを忘れてはなりません。私達が生きることができるのは現在だけであって——過去は既に無くなっており——未来はまだ到達していません。昨日は、もう過ぎ去ってしまいました。明日は、まだわからないのです。「昨日」を悔やみ、「明日」を思いわずらうことをやめましょう。私たちは、今、この時を生きることができるだけなのですから。「今日」は与えられるもの。だから、英語では「今」をプレゼント(=present)と言うのです。

「素直さは最大の知性なり」